

明治三十七七八年海戰史

第五部 施設

第二篇 海軍艦政本部

第三章 石炭及ヒ燃料

第一節 石炭

第一目 開戦前ニ於ル石炭ノ準備購入

抑艦艇ノ罐ニ用フヘキ燃料ハ、現時尙主トシテ石炭ニシテ、罐ノ實勢力ヲ發揮セシメントスルニハ、之ニ使用スル石炭ハ、性質無煙ニシテ點火シ易ク、灰燼ノ量比較的少クシテ、一基量ヲ以テスル蒸發力ハ成ルヘク高カラサル可カラズ、不幸ニシテ本邦産出炭中、斯ノ如キ性状ヲ具有スル石炭ハ未タ嘗テ發見シ得サル所ニシテ、艦艇機關ノ實勢力ヲ顯表セント欲セハ、勢ヒ他邦炭ニ倚賴セサル可カラサル境遇ニ在ルヲ以テ、一朝事アルノ準備トシテハ、常ニ帝國軍港ニ相當ノ準備貯藏ヲ爲シ置クヲ要ス、由來英國「カーダフ」炭ハ、艦艇ニ於ル罐ノ燃料トシテ完全無缺ノ者ニ非サルモ、其ノ性状ヲ綜合セハ、列國産炭中ノ首位ニ屬スルヲ以テ、列國ハ競ウテ之ヲ用ヒ、帝國海軍モ亦出師準備炭トシテ、從來主トシテ同炭ヲ貯藏シ來リシ所ニシテ、同炭若クハ同目的ニ向ヒテ使用シ得ル煉炭等ヲ、他劣等炭ト種別スルカ爲メニ、我カ海軍ニ於テハ之ヲ第一種炭ト公稱ス、

明治三十二年一月、海軍々令部ハ前ノ二十七八年戦役ノ實驗ニ鑑ミ、第一種炭ノ準備貯藏額ヲ二十五萬噸ト爲サント欲シ、海軍大臣ニ商議スル所アリシモ、一時ニ其ノ當時ノ不足額ヲ購買貯藏スルカ如キハ、經費支出ノ點ニ於テ許サ、ル所ナルノミナラス、準備炭ハ之ヲ炭庫ニ格納シ置クヲ要シ、炭庫ノ容積モ亦多額ノ貯藏ヲ許サ、リシヲ以テ、漸次其ノ貯藏額ヲ遞加シ行クノ方針ヲ取り、明治三十四年十一月十八日、海軍大臣海軍中將山本權兵衛ハ各鎮守府司令長官ニ對シ、第一種炭ノ出師準備トシテ準備スヘキ數額ヲ、當分ノ内左記ノ通り定メタル旨訓令セリ、

	第一種無煙炭 <small>(英國、ウエールス、炭佛國製煉炭)</small>	第一種煉炭 <small>(日本煉炭株式會社最上製)</small>
横須賀鎮守府	凡三萬五千噸乃至四萬噸	凡六千噸乃至八千噸
吳鎮守府	凡四萬二千噸乃至四萬五千噸	凡一萬噸乃至一萬二千噸
佐世保鎮守府	凡七萬三千噸乃至七萬五千噸	凡一萬二千噸乃至二萬五千噸
舞鶴鎮守府	凡二萬噸乃至五萬噸	凡二萬噸乃至五萬噸
計	凡十五萬二千噸乃至十六萬五千噸	凡三萬噸乃至五萬噸

乃チ之ヲ合計スルトキハ、第一種炭ノ最大貯藏額ハ約二十一萬五千噸ニシテ、既定計畫ノ出師準備額二十五萬噸ニ對スル不足額約三萬五千噸ハ、有事ノ時ニ際シ、容易ニ本邦内ニ於テ購入シ得ヘキ豫定ナリキ、然ルニ爾來新艦艇ノ續々就役スル者アリシヲ以テ、三十六年七月海軍々令部ハ之カ消費力ニ就テ考察シ、且二十五萬噸算出ノ基因タル二十七八年戦役ニ於ル消費額ノ狀況ニ鑑ミ、三十六年度海軍戦時編制ニ基キ、其ノ出征スヘキ艦艇(防禦用水雷艇及第二種)ノ消費

カヲ算定スルトキハ、左表ノ如クニシテ、各艦艇ヲ通シテ一箇月十五晝夜間航海スルモノトセハ、一箇月航走用炭約五万六千三百五十五噸、碇泊用炭約二千三百二十二噸、合計約五万八千噸トナリ、未成艦艇ノ分ヲ除クモ猶約五万三千噸トナル、故ニ前計畫ニ關ル二十五万噸ノ準備炭量ハ、約五箇月ヲ支持スルニ足ルト雖モ、出師準備トシテハ少クモ六箇月分ノ炭量ヲ貯藏スルノ要アルヲ認メ、前計畫ノ準備炭量二十五万噸ヲ三十一万噸ニ増加セシコトヲ海軍大臣ニ商議セリ、

第二群					第一群					通常速力	通常速力 一晝夜分	平常用炭 六箇月分	記 事
宮古	吉野	高砂	千歳	笠置	八島	富士	朝日	敷島	初瀬				
二三	二二	二二	二二	二二	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇			
四〇	七六	六四	七一	八二	七五	七五	一〇八	一〇八	一〇八	一〇八			
一八〇	四五〇	四二〇	六〇〇	六五〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、六〇〇	一、六〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇			

第二章 第一節 第一目 開戦前ニ於ル石炭ノ準備購入

第一驅逐隊				第四群							第三群						
叢雲	隴	曙	電	雷	愛宕	赤城	大島	鳥海	磐城	海門	千早	秋津洲	明石	須磨	高千穂	浪速	
一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	七	七	七	七	七	七	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	通常速力
一五	一八	一八	一八	一八	九	九	七	九	一二	一二	二四	四〇	四〇	四〇	四五	四五	一通 晝常 夜速 分力
一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	三〇	三〇	三〇	三〇	一五	五〇	九〇	二七〇	三〇〇	三〇〇	二四〇	二四〇	六平 筒常 月用 分炭
																	記
																	事

第二章 第一節 第一目 開戦前ニ於ル石炭ノ準備購入

第五群						假装水雷母艦	假装巡洋艦	水雷母艦	第二艇隊	第一艇隊	第三驅逐隊				第二驅逐隊		
吾妻	八雲	出雲	磐手	常磐	淺間	二六	六	豐橋	佐第一水雷艇隊 五	竹第一水雷艇隊 五	東雲	霞	曉	薄雲	陽炎	不知火	夕霧
一一二	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二	一一五	一三乃至一五	一〇	一〇	一〇	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二
一〇六	一〇六	一〇六	一〇六	一一二	一一二	二〇〇	四一七	三〇	三〇	四〇	一五	一八	一八	一五	一五	一五	一五
一、一〇〇	一、〇〇〇	一、一〇〇	一、一〇〇	九〇〇	九〇〇	二、〇〇〇	四、四〇〇	二一〇	二五	二五	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二

防禦用水雷艇隊						第四艇隊	第三艇隊	第四驅逐隊			第七群			第六群					
吳第二水雷艇隊	吳第一水雷艇隊	横第二水雷艇隊	横第一水雷艇隊	舞第一水雷艇隊	佐第二水雷艇隊	漣	朝潮	白雲	龍田	筑紫	千代田	扶桑	鎮遠	橋立	松島	嚴島			
六	五	五	五	五	五														
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一二	一二	一二	一〇	一〇	一〇	八	八	八	八	八	通常速力		
三六	三〇	三〇	四八	三〇	三〇	一八	一八	一八	一八	二二	三四	三六	五〇	三一	三一	三一	一通常 晝夜速力		
三〇	二五	二五	四〇	二五	二五	一一	一一	一一	一一〇	七〇	二四〇	一五〇	二六〇	三二五	三二五	三二五	六平常 筒月分炭		
																	記		
																	事		

第二章 第一節 第一目 開戦前ニ於ル石炭ノ準備購入

合	計	三等艇	二等艇	其ノ他	未成艇	第五驅逐隊 三隻 春雨、速鳥、朝霧、	第四驅逐隊 村雨	第七群			第二群 八重山	第四群 宇治	計	以上記載ノ外未成ノ艦艇等			
								對馬	音羽	新高				竹第三水雷艇隊	竹第二水雷艇隊	舞第二水雷艇隊	佐第三水雷艇隊
計	一	七	一一	一一	一一	一一	一一	一〇	一五	一〇	一二	一〇	五	六	六	五	
	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一二	一二	一〇	一五	一〇	一二	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	
	三七五七	三四〇	五	四二	四四	五四	一八	四二	四二	四二	三六	一五	三四一七	三四	三六	三〇	
	二七、八六三	一、三〇三	五	三五	五五	三六	一一	三五〇	三五〇	三五〇	六〇	五〇	二六、五六〇	二五	三〇	二五	
		水雷術練習所用		此ノ内二隻ハ横第三水雷艇隊ニ増加トナル	此ノ内四隻ハ既ニ佐第四水雷艇隊ト爲ル												

一ヶ月(十五晝
夜分)

(航走用 五六、三五五)
(碇泊用 二、三三二)

五八、六七七噸

同

未成艦艇等ノモノヲ除キ 五三、四六九噸

是ニ於テ山本海軍大臣ハ、經費ノ許ス限リ漸次本商議ノ量額ニ達セシムルノ方針ヲ取ラントセリ、然ルニ其ノ當時、東洋ノ形勢ハ頗ル危急ニ迫リ、日露間動モスレハ破裂ノ虞アリ、一朝開戦ノ曉ニハ、軍用第一種炭ノ準備充實ハ最緊要事ニ屬スルヲ以テ、同年十月十四日海軍大臣ハ三十六年度臨時部軍艦需品費トシテ、金四拾八萬參千九拾貳圓四拾八錢ヲ第二豫備金ヨリ支出方ヲ大藏大臣ニ要求シ、同月二十一日勅裁ヲ經タル旨ノ通牒ニ接シ、内金參拾貳萬五千圓ヲ以テ英炭ヲ購入準備スルコト、シタリシモ、形勢ハ愈益逼迫シ來リシニ依リ、同年十二月十七日更ニ明治三十六年度歲出臨時部軍艦需品費ノ款項へ、金四拾九萬千貳百九拾貳圓四拾八錢ノ支出追加ヲ得、其ノ一部ヲ以テ第一種炭ヲ購買準備スルノ費途ニ供セリ、由來艦營需品ノ一タル石炭ノ準備保管及ヒ配給ノ事業ハ、各鎮守府管下ノ工廠ニ於テ擔當スル所ニ關リ、平時ハ豫メ定ムル所ノ準備炭量ニ應シテ配布セラレタル豫算範圍内ニ於テ之ヲ購入準備シ、戦時ニ在リテモ亦其ノ需要供給ノ額ニ鑑ミ、隨時其ノ準備額ヲ補填スヘキハ勿論ナルモ、我カ海軍ニ於テ主トシテ軍用燃料ニ使用セントスル英炭ハ、供給ヲ外邦ニ仰カサル可カラス、然ルニ是カ輸入事業ニ從事スルモノ其ノ數甚タ多カラサルノミナラス、其ノ過半ハ外人ニシテ、取引ノ中心ヲ橫濱若クハ東京ニ設ケアリ、且是ニ從事スル本邦商社モ亦多クハ東京ヲ中心トスルモノナルカ故ニ、各鎮守府ニ於テハ相競ウテ此等少數ノ直輸入者ト購買契約ヲ

締結セントセンカ、嘗ニ購買價格ニ於テ統一ヲ缺クノミナラス、勢ヒ不廉ニ陥ル可ク、加之戰局ノ弛張如何ハ鎮守府ノ豫期シ得ヘカラサル所ニシテ、戰局大ニ發展シテ石炭ノ供給頓ニ増加スルカ如キコトアラシカ、急速是カ補填ヲ爲サント欲スルモ、容易ニ其ノ目的ヲ達シ難キヤノ恐アリ、是ヲ以テ艦政本部ハ中央ニ在リテ、各地ニ於ル貯藏量ト其ノ配給量トヲ常ニ考覈シ、豫メ購入額ヲ定メテ内外輸入商社ト直接交渉シ、其ノ單價及ヒ主ナル契約條件ヲ定メ、而テ後チ海軍大臣ヨリ其ノ購買方ヲ當該鎮守府司令長官ニ訓令スルコト、爲シタリ、

明治三十七年一月、新ニ臨時事件費ノ支出ヲ得、更ニ英炭ノ購買契約ヲ爲サシムルコトヲ得タルモ、之ヲ英本國ヨリ輸入シテ我カ軍港ニ於ル貯藏場ニ收納スルニ至ル迄ニハ、幾多ノ日子ヲ要スルヲ以テ、斯ノ如キ事變ノ發端ヨリ、第一種英炭ノ購買蒐集ニ盡瘁スル所アリシニ拘ラス、一トシテ開戰前ニ來著シタルモノナシ、然ルニ是ヨリ先キ本邦諸港ノ外商中ニ英炭ヲ貯藏スルモノアリ、其ノ量約三萬噸ナリシヲ以テ、之ヲ買收セント欲シ、竊ニ三井物産會社ヲシテ之ヲ一手ニ買收セシメントシタリシニ、甚シク高價ヲ稱ヘタルヲ以テ、更ニ各持主ニ就キ直接交渉ヲ開キ、比較的廉價ニ内約二萬五千噸ヲ購入スルコトヲ得タリ、而テ又戰端愈々開クルトキハ、軍用燃料トシテ獨リ英炭ノミニ倚賴スルハ決シテ得策ニ非サルヲ以テ、豫テ我カ海軍ニ於テ第一種炭トシテ指定シアル米國「ボカホンタス」炭(明治三十六年十月九日海軍第一種指定炭トナル)ヲモ購入セント欲シ、幸ヒ當時長崎港ニ貯藏シアリシ同炭四千二百噸ヲ買收シ、尙日本煉炭株式會社ヲシテ、煉炭五千噸ヲ製造セシムルコト、セリ、

開戦前ニ於テ、購買契約ヲ締結シタル英炭ハ、商會ニ於テ既ニ日露間ノ開戦ヲ氣構ヘテ、著シク其ノ單價ヲ暴騰セシメ、殊ニ之ヲ英本國ヨリ輸入スルニ當リテハ、保險率ハ著シク高歩ヲ稱ヘタリ、然ルニ當時和戰孰レニ歸著スルヤ豫想シ得ヘカラサルニ、我カ政府ニ於テ高歩ノ保險料ヲ支拂フカ如キハ、決シテ得策ニ非サルヲ以テ、海軍次官海軍少將齋藤實ハ賣上受負者ニ對シ、輸送ノ途中万一戰爭ノ爲メニ損害ヲ蒙リタルトキハ、帝國政府ハ其ノ石炭ノミニ對シテ全責任ヲ保有スル旨ヲ暗示シ、以テ保險料ヲ支拂ハスシテ之ヲ輸入セシメタリ、開戦前出師準備トシテ、貯藏蒐集シタル第一種炭ハ、已ニ出征艦隊ニ於テ其ノ一部ヲ搭載シタルヲ以テ、三十七年一月三十日ニハ減シテ十三万餘噸ニ過キサリキ、當時各鎮守府及ヒ要港部等ニ貯藏シタル各種炭ノ現量ハ左記ノ如シ、

明治三十七年一月三十日調石炭現量

	英炭	煉炭	第二種炭	第三種炭
横須賀需品庫	二九、七九七 <small>噸</small>	一〇、六六三 <small>噸</small>	八、七六三 <small>噸</small>	二五六 <small>噸</small>
吳需品庫	二三、八三八	一五、四〇一	一一、七五八	三八〇
佐世保需品庫	七八、二九二	六、八〇九	一三、二八六	二、一六五
舞鶴需品庫	二、三六一	七、二五七	一四、八二九	八七九
竹敷要港部	四、九〇三	八三六	二、〇九四	四七九

馬公要港部	○	○	一、九七一	一、〇〇〇
大湊水雷團	○	九二六	○	一、〇〇〇
計	一三九、一九一	四一、八九二	五二、七〇一	六、一五九

第二目 開戦後ニ於ル石炭ノ準備購入

第一款 英炭ノ輸入購買

宣戦ノ詔勅發布セラレテヨリ以來、英炭ノ輸入回漕ハ途上ノ安全ヲ期スルト、且本邦ニ陸揚ケスルニ當リ、直接我カ軍港ニ入港セシムルヲ以テ、同盟國汽船ニ倚ルヲ便ナリトシ、英國汽船ニ搭載スヘシトノ一條件ノ外、他ニ何等特殊ノ條件ヲ設ケス、一ニ賣上人ニ委セシモ、仕向港ハ常ニ東洋中立各港ト爲シ、發荷者受荷者共ニ外商ノ名義ト爲シ、航路ハ外商取扱ノ一二ヲ除ク外、悉ク喜望峰ヲ迂回セシメタリ、但三十八年五月日本海々戦前、英船ノ不手回ナルアリ、夫ニモ拘ラス、尙英國汽船ヲ以テ之ヲ輸送セシメントセハ、勢ヒ多額ノ輸送費ヲ要シ、結局炭價ヲ高カラシムルカ故ニ、敵國ニ好意ヲ有セサル他ノ二三ノ中立國汽船ニ、搭載輸入セシメタルコトアリキ、當時艦政本部ニ於テ制定シタル英炭賣上人心得左ノ如シ、

海軍用英炭賣上人心得

- 一、輸入英炭ハ必ス英國汽船(英國々旗ヲ掲揚スルモノ)ニ搭載スヘキコト
- 二、輸入英炭表面上ノ仕向地ハ新嘉坡以東ノ中立港灣ニ定ムルコト

- 三、輸入英炭ノ發荷者受荷者ハ表面上必ス外商人名ナルコト
 - 四、輸入英炭搭載船ニ於テハ表面ノ仕向地ニ到著スル迄ハ本邦用ナルコトヲ證明又ハ推測シ得ラル可キモノ若クハ證明又ハ推測シ得ラルヘキ虞アル總テノ書類其ノ他物件ヲ存セサルヲ要スルハ勿論發覺シ得ラルヘキ言動ニ出ツ可カラサルコト
 - 五、英炭陸上軍港ハ佐世保トス但時機ニ依リ變更スルコトアルヘシト雖モ既約以後ニ於テハ合意ノ上ニアラサレハ變更スルコトナシ
 - 六、英炭ハ指定軍港ノ需品庫納トス故ニ庫納迄ニ於ル一切ノ費用ハ賣上人ノ負擔トス
 - 七、英炭ハ軍港ニ於テ海軍用石炭試驗検査法ニ依リ試驗ヲ爲シ之ニ合格ノ者ニ非サレハ受領セス
 - 八、英炭買上ニ關シテハ官及ヒ賣上人ニ於テ何等ノ條件ヲ附セサルコト但海軍物品購買賣却規則等ニ定メタル契約上ノ條件ハ此ノ限ニ非ス
- 「ジャードン、マヂソン」會社ハ、常時英國東洋艦隊ニ英炭ノ供給ヲ爲セルモノニシテ、戰役開始ト同時ニ帝國海軍ニ申告シテ曰ク、若シ英炭ノ輸入ヲ自己ノ會社ニ命セラルレハ、之ヲ回漕スル途中ニ於テ例ヒ敵艦ニ遭遇スルコトアルモ、英國東洋艦隊ニ供給スルモノナリト言明シ得レハ、捕獲抑留等ノ危險ニ陷ルコトナク、最安全ナリトシ、一手ニ之ヲ請負ハントセリ、然ルニ同會社ノ提供シタル價格ハ、他商會請負ノモノニ比シ著シク高價ナルノミナラス、偏ニ輸送中ノ安全ヲ期シテ、獨リ同會社ヲシテ之ヲ輸入セシメンカ、所謂獨占事業ニ陷リ、彼ヲシテ炭價ヲ左

右セシムルニ至ルコトナシトセス、旁、以テ我ハ英炭ノ賣上ヲ志望スル幾多ノ内外商社アルヲ利用シ、相互ニ價格ヲ競争セシメ、以テ我ニ漁夫ノ利ヲ收メンコトニ努メタリ、然ルニ英炭ノ輸入ニ從事スル外商ハ、本邦官衙ノ習慣ヲ熟知セサルカ爲メニ、往々本邦人ノ仲繼者ヲ介シ、仲介者ハ音ニ外商ヨリ手数料ヲ收ムルノミナラス、外商ノ賣ラント欲スル價格以上ニ炭價ヲ暴騰シ、以テ其ノ差額ヲ自己ノ囊中ニ收メントシ、甚シキニ至リテハ轉々數人ノ仲繼者ヲ經ルモノアリテ、結局不條理ニ炭價ヲ暴騰セシメ、又三十七年一月臨時軍事費ヲ以テ、第一回約八万噸ノ英炭ヲ購入スルニ當リテハ、之ヲ競争入札ニ附セシニ、賣炭商社ハ相競ウテ炭價ヲ暴騰セシメタルヲ以テ、同年二月以降ハ專ラ外商ト直接交渉シ、炭價ノ比較的安直ナル時機ヲ見計ラヒ、之ヲ購入スルノ手段ヲ採レリ、由來臨時軍事費ハ月別支出ニ屬スルモ、英炭ノ購入契約ヲ月別ニスルカ如キハ、音ニ準備ノ點ニ於テ遺憾アルヲ免レサルノミナラス、炭價ノ浮沈極リナキヲ以テ、時ニ不當ノ高價ヲ以テモ、尙之ヲ購入セサル可カラサルコトアルカ故ニ、常ニ市場ノ炭況ニ注意シ、比較的安價ノ時ニ於テ、一時ニ多量ノ購買契約ヲ締結シ、却テ炭價ノ支拂ヲ月別ニ爲シタリ、

本戰役ニ於テ、臨時軍事費支辨ヲ以テ、英炭ヲ購入シタルコト八十四万四千六百二十三噸四九四ニシテ、其ノ總價格金壹千八百八拾五萬壹千七百八拾七圓九拾八錢九厘、一噸ノ平均價格ハ金貳拾貳圓參拾貳錢ニ相當ス、而テ其ノ賣上ニ從事シタルモノ、商社若クハ氏名及ヒ其ノ各賣上額等ハ、左表ニ示スカ如シ、

因ニ言フ我カ海軍ニ於テ明治三十三年度ニ購入シタル英炭一噸ノ平均價格ハ金貳拾九圓九拾五錢壹厘、三十四年度ニ於ルモノハ金貳拾七圓貳拾八錢五厘、三十五年度ハ金拾九圓八拾參錢壹厘、三十六年度ハ金貳拾四圓四拾五錢八厘ニ相當スルカ故ニ、此ノ四ケ年度ヲ通シタル平均單價ハ金貳拾四圓拾參錢壹厘トナルヲ以テ、本戰役中購入シタル英炭ハ累年購買ノモノヨリモ遙ニ安價ナリシヲ知ルニ足ル、

英炭賣上請負者及數量價格表

數量	代價	平均一噸價格	賣上請負者
127,587.156	2,942,941.917	23.066	高田商會
114,228.112	2,542,505.434	22.258	三井物産合名會社
84,674.920	1,998,697.503	23.604	大倉組
43,902.586	1,045,817.997	23.821	Jardine Matheson & Co.
44,220.863	1,019,594.120	23.057	American Trading Co.
46,331.696	924,140.023	19.946	Dodwell & Co.
41,758.016	885,790.350	21.213	E. H. Hunter & Co.
36,088.679	826,504.386	22.902	Strome & Co.
37,651.944	782,979.383	20.795	Samuel and Samuel Co.
37,393.932	676,306.340	20.878	Strachen & Co.

27,880,440	664,950,438	23,850	Birch Kirby & Co.
30,444,943	653,359,654	21,460	Findley Richardson.
28,927,340	599,373,926	20,720	Faber Voight & Co.
17,088,914	431,438,734	25,247	Frazer & Co.
21,182,584	408,744,200	19,296	China and Japan Trading Co.
17,883,288	374,202,881	20,925	日本郵船株式會社
18,281,275	349,037,168	19,093	Illies & Co.
15,735,808	303,780,903	19,305	米井源治郎
11,000,000	302,604,000	27,509	三菱合資會社
11,496,040	294,270,582	25,598	範田龍太郎
10,214,864	266,222,854	26,062	磯野商會
8,403,336	165,074,419	19,644	Sale & Co.
5,499,807	139,240,704	25,317	M. Raspe & Co.
4,973,294	118,648,715	23,857	Cornes & Co.
3,752,100	73,466,118	19,580	Nirop & Co.
2,591,557	51,831,140	20,000	淺野總一郎
430,000	10,264,100	23,870	Armstrong & Co.
合計 844,623,494	18,851,787,989	223,320	

第二章 第一節 第二目 第一款 英炭ノ輸入購買

十五

英炭ノ輸入及ヒ購買ニ關シテハ、本戰役中我カ海軍ハ幾多ノ好機會ヲ捉ヘテ、比較的廉價ニ之ヲ購入スルコトヲ得タリ、即チ明治三十六年ノ末東洋ノ風雲急ヲ告クルヤ、露國モ亦英炭ノ準備ヲ必要トシ、續々之ヲ旅順口若クハ浦鹽斯德ニ回漕セシメシカ如キモ、三十七年一月以降英國ヲ發セシ者ノ東洋ニ著到セルトキハ、既ニ戰局開ケ、制海權ハ殆ト我ニ歸シタリシヲ以テ、此等兩港ニ至ルヲ難シ、請負外商ハ更ニ之ヲ我カ邦ニ轉賣セントシタルモノアリ、其ノ中二三ニ就キ、比較的安價ヲ以テ之ヲ購入シ、又日本郵船株式會社ノ歐洲航路船ニシテ、開戰前彼ノ地ニ在リシモノハ、宣戰布告ノ爲メ將ニ歸航ノ途ニ就カントスルニ際シ、荷客共ニ殆ト皆無ナルヲ以テ、「バラスト」トシテ英炭ヲ滿載シ、喜望峰ヲ迂回シ以テ本邦ニ著到セリ、蓋日本郵船株式會社ノ「バラスト」トシテ英炭ヲ選ヒタルハ、帝國海軍ニ賣上ケントノ希望ヲ有シ、依テ以テ相當ノ利益ヲ收メント欲シタルニ外ナラスト雖モ、帝國海軍ハ著到後之ヲ比較的安價ニ購買シ得、彼我共ニ利益スル所アリキ、而テ又開戰ト同時ニ、本邦ノ商船ハ概ネ政府ニ雇上ケラレ、民間ノ海運ハ頓ニ挫折スルニ至ルヤ、外商ノ機敏ナル、帝國海運業者ハ必ス外國商船ヲ買收シ、若クハ雇傭スヘントナシ、歐洲ヨリ幾多ノ汽船ヲ我カ東洋ニ送致セリ、而テ其ノ過半ハ概ネ英炭ヲ積載シ來リタルヲ以テ、之ヲ買收スルコトヲ得、期セスシテ帝國政府ノ英炭輸入事業ヲ幫助シタリ、又我カ海軍ニ於テ、兵器及ヒ火藥ヲ外國ヨリ購買輸入スルニ當リ、汽船ノ「バラスト」トシテ、英炭ヲ共ニ搭載シ來ラシメタルコトアリキ、

開戦ノ當初、二三ノ露艦ハ紅海及ヒ地中海方面ニ游弋スルアリ、又「マンヂウール」ノ上海ニ在ルアリテ、多少英炭輸入ノ事業ヲ妨害セリ、就中一度浦鹽斯德艦隊ノ我カ沿岸ニ出沒スルヤ、石炭輸入船ノ中、或者ハ新嘉坡以東ニ進航スルヲ肯セサル者アリシカ、三十七年二三月ノ頃、紅海若クハ地中海ニ於テ、露艦ノ爲メニ二三隻ヲ抑留若クハ臨檢セラレタル外、他ハ孰レモ何等ノ損害ヲ蒙ラス、安全ニ本邦ニ來著セリ、尤宜戰ノ詔勅發布セラレテヨリ以降ハ、輸入スル英炭ニ對シテハ、總テ戰時保險ヲ附セシメタリ、蓋開戦前ニ於ルカ如ク、之ニ保險ヲ附スルコトナクシテ、萬一敵手ニ陥ル時ハ、其ノ積荷石炭ニ對シ全然責任ヲ保有シ、全價格ヲ支拂ハサル可カラズ、斯ノ如キハ政府ノ堪ヘ得ヘキニ非サルヲ以テナリ、保險率ハ一上一下其ノ變化極リナク、二分ヨリ時ニ一割四分ノ高歩ヲ唱ヘタルコトアリ、蓋戰報ハ露國側ノモノ先ツ歐洲ニ傳播セラル、カ故ニ、時ニ虛報ヲ傳ヘ、爲メニ保險率ヲ高メタルコト一再ニシテ止ラス、殊ニ我カ海軍ニ於テ決行セル旅順口閉塞ノ企ノ如キ、閉塞船ノ爆沈ヲ以テ我カ軍艦ノ爆沈ト誤認セラレ、特ニ高歩ヲ唱ヘタルコトスラアリキ、

第二款 英炭ノ品質

我カ海軍ニ於テ、從來出師準備トシテ購入シタル英炭ハ、カーヂフ産ニシテ、英國海軍指定炭タルヘキモノ、中ヨリ、左記五礦ノモノヲ選ヒタルヲ以テ、本戰役開始ニ先タチテ購入契約ヲ締結シタル英炭ハ、依然トシテ此ノ五礦區ヨリ産シタルモノヲ選ヒテ之ヲ購入セリ、

1. Ferndale
2. Nixon's Navigation
3. Albion Merthyr
4. Harris's Deep Navigation
5. National Navigation

然ルニカーダフ炭礦中、他ニ軍用燃料トシテ幾多ノ良礦區アルニ拘ラス、斯ノ如ク單ニ五礦區
産出ノモノニ限りテ之ヲ購入スルコトノセハ、自然ニ炭價ヲ騰貴セシムルカ故ニ、戰役開始以
降ハカーダフ炭礦中ニ於テ、更ニ左ノ八礦區ヲ指定シ、前記ノ五礦區ヲ併セテ十三礦區ノモノ
ヲ購入スルコトノ爲セリ、

1. Cambrian Navigation
2. Ocean Merthyr
3. Cory's Merthyr
4. Hood's Merthyr
5. Locket's Merthyr
6. Powell's Duffryn
7. Dowlais Merthyr

8. Hill's Plymouth merthyr

然レトモ幾多ノ石炭賣上外商中、我カ海軍ニ於テ指定シタル此ノ十三礦區以外ノ「カーヂフ」炭ヲ任意ニ輸入シ、以テ買上ヲ求メ來リシ者アリタルカ故ニ、時ニ右指定礦區以外ノ者モ、尙我カ海軍ニ於テ規定シタル石炭ノ検査規格ニ合格シタルモノハ、特ニ之ヲ購買セリ、三十六年海總第三四〇八號ヲ以テ制定シタル石炭ノ検査規格ニ依レハ、英炭ハ每一噸ヲ以テ攝氏百度ニ於ル蒸發水量八十噸以上ニシテ、針金製八分目篩ヲ脱スル粉炭量ハ、二割五分以下ナラサル可カラス、本戰役中我カ海軍ニ於テ購買シタル英炭ハ、概ネ此ノ規格ニ適合シタリト雖モ、開戦ノ當初前後ニ於テ購入シタル、本邦若クハ本邦以東ニ存在シタルモノハ、粉炭甚タ多ク、到底該規格ニ準據シ得サリシヲ以テ、特ニ臨機ノ處置トシテ、粉炭ノ存在三割五分ニ達スルモノヲモ採用購入セリ、戰役中英本國ヨリ直輸入シタル英炭モ、亦蒸發量及ヒ粉炭量ニ於テ、規格以下ニ降りタルモノアリ、此等ハ其ノ品質低下ノ程度ニ準シテ、相當ノ減價ヲ命シ之ヲ購入セリ、即チ粉炭量ニ對シテハ、規格以外ノ粉炭總量ヲ煉炭ニ改造シテ、始テ使用シ得ルモノト爲シ、以テ其ノ改造費用ヲ減價シタルカ如キハ、其ノ一例ナリトス、

戰役中我カ海軍ニ於テ購買シタル英炭試験ノ平均成績ハ、左表ノ如シ、

戦役中購買シタル各種英炭試験平均成績表

炭種	分析試験										試験成績					
	試験回数	揮發物%	固定炭素%	灰%	炭素%	水素%	酸素及窒素%	硫黄%	比重	計算上ノ蒸気	試験回数	石炭テ每基	度ニ於ル百基	發水量	灰ノ割合%	ノ割合%
Ferndale.	23	18,81	82,05	4,12	87,18	4,90	2,92	0,87	1,84	8,15	31	10,65	6,71	1,87	26,71	
Nixon's Navigation.	22	18,78	82,28	4,10	87,25	4,64	3,18	0,88	1,86	8,01	32	10,71	6,22	2,07	26,41	
Harris Deep Navigation.	2	18,40	83,25	3,30	88,05	4,75	3,15	0,66	1,85	8,15	2	10,85	7,75	2,30	80,80	
Lewis Merthyr.	1	16,00	78,80	5,70	84,90	4,70	3,80	0,88	1,80	7,90	1	10,30	7,30	0,60	51,70	
McLaren Merthyr.	2	14,50	79,60	5,90	85,30	4,20	3,70	0,88	1,40	7,75	3	10,70	5,67	2,88	23,80	
Hood's Merthyr.	2	18,90	79,80	6,80	84,25	4,75	3,45	0,75	1,30	7,85	6	10,90	5,22	2,80	23,88	
Cambrian Navigation.	8	13,70	81,18	5,17	85,70	4,30	4,10	0,89	1,87	7,77	7	10,27	6,87	2,19	29,58	
Hill's Plymouth Merthyr.	1	13,80	80,10	6,60	84,00	4,00	4,20	1,10	1,80	7,60	8	10,55	6,49	2,55	27,21	
Albion Merthyr.	6	14,43	79,70	5,88	84,82	4,95	3,43	0,78	1,87	7,98	17	10,74	6,44	2,38	28,12	
Dowlai's Merthyr.	1	14,50	82,40	3,10	88,30	5,40	2,30	0,84	1,30	8,40	7	10,66	6,01	2,00	26,39	
Ocean Merthyr.	2	14,85	80,75	4,40	87,05	4,40	3,35	0,79	1,35	8,00	3	10,67	6,18	1,28	26,87	
National Merthyr.	3	14,20	79,60	6,20	85,88	4,33	3,33	0,82	1,40	7,80	10	10,78	6,10	2,49	27,54	
Powell's Duffryn.	5	13,25	83,24	4,52	85,10	4,18	3,28	0,68	1,40	7,88	23	10,52	6,48	3,05	24,98	
平均若クハ合計	78	14,12	80,90	5,06	85,90	4,57	3,40	0,83	1,35	7,94	150	10,66	6,41	2,14	29,22	

本表ハ各鎮守府工廠需品庫ニ於テ、納入契約者ト之ヲ授受スルニ當リ、検査規格ニ準シテ執行シタル試験及ヒ分析ノ成績ニシテ、炭種ノ明亮ナルモノヲ採擇シタルモノニ關リ、試験ノ大

部分ハ佐世保鎮守府ニ於テ之ヲ爲シ、分析ハ主トシテ海軍造兵廠ニ於テ之ヲ執行シタルモノナリ、

平時我カ海軍ニ於テ購買スル石炭ノ重量ヲ檢定スルニハ、之ヲ貯炭場ニ陸揚ケスルニ當リテ、陸揚人夫ノ使用スル畚若クハ石炭籠數十杯ヲ任意ニ選擇シテ之ヲ計量シ、以テ其ノ平均重量ヲ算出シ、總畚若クハ籠數ト相俟チテ、石炭ノ總重量ヲ計算スルヲ例トスルカ故ニ、本戰役ノ初期ニ於テハ、此ノ例ヲ襲ウテ以テ英炭ノ重量ヲ檢定シタリト雖モ、一時ニ多量ノ英炭ヲ輸入購買スルニ當リテ、此ノ方法ニ準據セハ、徒ラニ陸揚ケニ時日ヲ空費スルカ故ニ、多クハ荷役先ニ於ル送狀^{インボイス}ヲ檢定シ、之ニ信用ヲ措キテ受渡ヲ了シ、時ニ又船^{インターシヨ}足ヲ以テ之ヲ測定シタルコトアリ、然レトモ幸ニ嘗テ炭量ノ不足シタルコトナク、否却テ契約額ヨリモ幾分カ多量ナリシコトサヘアリキ、

第三款 「ボカホンタス」炭ノ準備購入

英炭ハ彼我ノ艦隊唯一ノ軍用燃料トシテ、需用益々大ナルニ隨ヒ、三十七年三月ノ頃、其ノ價格ハ著シク騰貴スルノ傾向アリシヲ以テ、我カ海軍ニ於テハ、豫テ幾多ノ調査ヲ重ネテ、海軍指定炭ト公定シアル米國「ボカホンタス」炭ヲ採用シテ、英炭ノ騰貴ヲ掣肘セント欲シ、同炭約二万五千噸ヲ購入セシメタリ、在本邦米國公使ハ米炭ノ採用セラレタルヲ深ク多トシテ、多少斡旋スル所アリシト雖モ、爾後同炭ノ價格モ亦漸次騰貴シテ、英炭ト何等選フトコロナキニ至リシヲ以テ、遂ニ其ノ後購買ヲ中止セリ、

第四款 「ボカホンタス」炭ノ品質

二二二

「ボカホンタス」炭ハ之ヲ購買スルニ當リ、三十六年海總第三四〇八號ヲ以テ制定シタル石炭規格ニ準據シ、英炭ニ等シク石炭一氂ヲ以テ、攝氏百度ノ水ヲ蒸發セシムル量ハ十氂以上ニシテ、針金製八分目篩ヲ脫スル粉炭ハ二割五分以下ナラサル可カラス、然ルニ由來「ボカホンタス」炭ハ其ノ質餅塊性ニ富ムモ、脆弱ニシテ粉碎シ易キ特性ヲ有スルカ故ニ、到底此ノ規定ニ準據シ難キヲ慮リ、三十七年二月官房第六一一號ヲ以テ、米國「ボカホンタス」炭ニ限り、粉炭ハ三割五分以下ノモノヲモ購買スルコト、爲セリ、蓋我カ海軍ニ於テハ、從來同炭ヲ多量ニ購入シタルコトナク、實驗ニ乏シカリシト雖モ、艦政本部ニ於テハ、英炭ニ比シ一割ノ粉炭量ヲ増加セハ、容易ニ之ヲ購入シ得ヘシト推考シタルナリ、然ルニ同年六月新ニ輸著シタル同炭ヲ見ルニ、殆ト全部粉炭ニシテ、到底此ノ新規格ニモ依ルコト能ハサリシヲ以テ、艦政本部ニ於テハ、同部出仕海軍機關大監武田秀雄ヲシテ、北米合衆國ノ海軍用トシテ、橫濱港ニ貯藏シタル同炭ニ就テ之ヲ實査セシメタルニ、同炭モ全部殆ト粉炭ナリシカ、然モ之ヲ以テモ、其ノ餅塊性ヲ利用セハ、能ク罐ノ最大效力ヲ發揮シ得ルモノナルヲ知レリ、是ニ於テ同年六月二十七日官房第二二九〇號ヲ以テ、當分ノ間石炭規格中、粉炭ニ關スル項ハ、米國「ボカホンタス」炭ニハ、之ヲ適用セサルヲ得ルコトニ改定シ、同炭ニ限り如何ニ多クノ粉炭ヲ含有スルモ、之ヲ購入シ得ルコト、セリ、左表ハ、戰役中我カ海軍ニ於テ購買シタル同炭ノ試験平均成績ニシテ、灰燼ノ少キ、蒸發力ノ優レタルハ、共ニ英炭ニ比スヘキナリ、

炭種	分析試験成績						試験成績								
	試験回数	揮發物%	固定炭素%	灰%	炭素%	水素%	窒素及酸素%	硫黄%	比重	蒸騰力(100g)	試験回数	石炭ニ對シテノ水素量(%) 石炭ニ對シテノ窒素量(%) 石炭ニ對シテノ灰量(%)	灰ノ割合%	クリンカノ割合%	粉炭割合%
ボカホントス	3	15.2	79.0	5.93	85.5	4.53	3.47	0.64	1.3	7.9	5	10.0	6.54	2.36	61.52

「ボカホントス」炭ハ、戰役中多ク之ヲ出征艦隊ニ供給シタルコトナク、三十七年三四月ノ交、一
 二ノ軍艦ニ於テ、之ヲ焚用シタルニ過キス、然ルニ同炭ノ品質タルヤ、英炭ニ比シ粉末著シク多
 キヲ以テ、他日我カ艦隊ニ於テ廣ク同炭ヲ使用セシムル時來ラハ、此ノ種石炭ノ焚用ニ慣レサ
 ルモノハ、或ハ一種ノ危惧ニ陥ルコトナシトセサルヲ以テ、同年六月艦政本部第二部長海軍大
 佐岩崎達人ハ、各艦隊參謀長ニ、三十五年中石炭調査委員ニ於テ同炭ヲ試焚シタル成績ヲ移牒
 シ、且同炭ハ其ノ質甚タ軟弱ニシテ容易ニ粉末ニ化シ、其ノ大部分ハ粉末ナリト雖モ、元來餅塊
 性ニ富ムヲ以テ、適當ノ方法ヲ以テ之ヲ焚火セハ、粉末モ亦塊狀トナリテ能ク燃燒スルモノニ
 シテ、現ニ米國海軍ニ於テハ、主トシテ同炭ヲ使用スルカ故ニ、我カ艦隊ノ諸艦ヲシテ、豫メ其ノ
 意ヲ諒セシメラレシコトヲ通牒セリ、後子三十八年三月、海軍大臣ハ官房機密第二九六號ヲ以
 テ、聯合艦隊司令長官ニ訓令シ、軍艦富士(艦長海軍大佐松本和、機關長海軍機關大監富岡延次郎)ヲシテ、役務上差支ナキ限度
 ニ於テ同炭ヲ使用セシメ、其ノ成績及ヒ同炭ニ對スル焚火法ヲ考查セシメ、以テ其ノ報告ヲ徴
 セリ、然ルニ同艦ハ役務ノ都合上、其ノ試験ヲ終了スルコト能ハス、僅ニ其ノ第一回ノ成績トシ

テ、左ノ報告ヲ提出セリ、

軍艦富士「ボカホンタス」炭試焚報告(富士機密第一七五號)

本艦曩ニ其ノ筋ノ命ヲ受ケ試焚ノ爲メ「ボカホンタス」炭ヲ搭載シタルハ三月二十一日ヲ以テ初メトセリ爾來艦砲射擊艦隊運動等ハ勿論碇泊中ト雖モ有ユル機會ヲ利用シテ勉メテ焚火法ノ研究ヲ試ミタリト雖モ不幸ニシテ此等ノ航海ニ在リテハ速力ノ緩急發停共ニ頗ル頻繁ニシテ長ク一定ノ燃燒度ヲ以テ焚火ヲ試ミルコト能ハサリシカ故ニ未タ其ノ成績ヲ數字的ニ表明スルコト能ハサルノミナラス搭載シタル石炭ハ概ネ粉炭ノミニシテ塊炭ハ極テ稀ニ混在スルニ過キサリシヲ以テ不日選別シタル塊炭ヲ要求シテ尙一層研究ノ歩ヲ進メシコトヲ期シタリシカ適ニ敵艦隊ノ東航ニ依リテ戰機ノ切迫ヲ告ケタルガ爲メ一旦此ノ試験ヲ中止シテ今日迄ニ研究シ得タル事項中確實ニシテ誤ナシト信スルモノ、ミヲ報告スルコト左ノ如シ

「ボカホンタス」粉炭焚火法

一、本粉炭ノミヲ使用シ若クハ巨多ノ粉末ヲ有スル本炭ヲ使用セントスル時ハ焚火室ニ於テ先ツ之ヲ濕潤セシムルヲ得策ナリトス此ノ方法ハ從來ヨリ我カ商船ニ於テ粉炭ヲ使用スル際ニ慣用セル所ニシテ亦會社ノ推薦スル所ナリ(編者曰ク會社トハ「ボカホンタス」炭礦會社ヲ云フ以下同シ)其ノ目的タルヤ單ニ焚火室ニ於テ塵埃ノ飛散ヲ避クルニ止ラス其ノ爐内ニ投入セラレタル時通風ニ依リテ空シク粉末ノ煙筒ニ吹散セラル、事ヲ妨クルニアリ

二、本粉炭ヲ完全ニ燃燒セシムルノ最大要件ハ強盛ナル火上ニ短少ナル時間ノ間隔ヲ以テ少量宛之ヲ平等ニ散布スルニアリ此ノ方法ハ明治三十五年以降本艦カ其ノ炭種ノ如何ヲ間ハス常ニ慣用スル所ノ焚火法ニシテ亦會社ノ“Spreading System”ト稱シテ「ボカホント」炭ノ最良焚火法ト思考スル所ノモノ之ナリ此ノ焚火法ニ依ル時ハ著シク發煙量ヲ減殺シテ強盛ナル火力ヲ維持スルコトヲ得ヘシ然レトモ若シ之ニ反シテ一時ニ多量ノ粉炭ヲ投シ或ハ平等ニ散布セシテ之ヲ一局部ニ投入スルトキハ靦面ニ多量ノ煙ヲ發生スルノミナラス新ニ粉炭ニ依リテ覆ハレタル火層ノ表面ハ次第ニ暗黒色ヲ呈シテ薄ク粘結シ以テ大ニ通風ヲ阻害スヘシ斯テ火勢ヲ衰弱セシメ且頻繁ニ火鎗ノ使用ヲ必要ナラシムルノ結果ハ灰ト共ニ空シク粉炭ヲ半燒ノ儘ニ落下セシメ又無益ニ冷氣ヲ焚口戸ヨリ闖入セシムル等莫大ナル二重ノ損失ヲ免ル、コト能ハサルモノトス本艦ニ於テハ普通ノ燃燒度ヲ用フル時ハ四個ノ焚口戸ト八二、二平方呎ノ火床面トヲ有スル主罐ニ在リテ一分時ノ間隔ニ於テ輕ク二杯ノ割合ヲ以テ焚火スルヲ例トセリ

三、此ノ粉炭ハ其ノ燃燒ニ殊ニ良好ナル通風ヲ要ス故ニ灰及ヒ「クリンカー」等ノ多少火床機ニ附着シテ通風ヲ阻害スルトキハ恰モ前項ニ説明シタル場合ノ如ク亦火層ノ表面ヲ次第ニ暗黒色ニ粘結セシメントスルノ傾向ヲ生ス此ノ場合ニ於テハ靜ニ火鎗ヲ火層ト火床機トノ間ニ滑走シテ其ノ間ニ空隙ヲ生セシムルカ如ク少シク火層ヲ起スヘシ然ルトキハ灰及ヒ小ナル「クリンカー」ハ火床機ノ間隙ヨリ落下スルノミナラス其ノ表面ノ粘結シタル火層ハ直ニ

破壊セラル、ヲ以テ通風ハ再良好ト爲リ火勢ハ頓ニ恢復セラルヘシ而テ此ノ火鎗ハ普通圓筒形ノ罐ニ在リテハ各爐共其ノ中央及ヒ兩側ノ三個所ニ挿入スルヲ以テ充分ナリトス本炭ヨリ生スル「クリンカー」ハ其ノ量ノ鮮少ニシテ粘著性ノ缺乏スルカ爲メニ概ネ火床棧ノ間隙ヨリ排除セラルト雖モ若シ大ナル塊ヲ生シタル時ハ火搔ヲ以テ焚口戸ヨリ排出スヘキコト勿論ナリ本艦ノ實驗ニ依レハ灰落内ニ落下シタル半燒炭末ヲ再三火上ニ投シテ焚火シタル場合ニ於テスラモ其ノ生シタル「クリンカー」ノ大サハ遂ニ拳大ニ過クルモノヲ發見スルコトナカリキ

四、本粉炭ハ一時假ニ其ノ蒸發力ヲ制限スル爲メニ灰落戸ヲ閉塞シテ通風ヲ遮斷スルトキハ前項ニ説明シタルカ如ク火層ノ表面ハ暗黒色ニ粘結シテ遂ニハ消滅スルニ至ルヘシ此ヲ以テ塊炭ヲ混合スルニ非サレハ全然埋火用ニ供スルコト能ハサリシノミナラス亦艦隊運動等ノ如キ場合ノ使用ニ適セサルモノトス

五、要スルニ本粉炭ハ之ヲ有效ニ燃焼セシムルノ困難ナルコト頗ル我カ高島産ノ粉炭ニ似タリト雖モ其ノ「クリンカー」ノ微量ニシテ粘著性ノ缺乏セルト發煙量ノ鮮少ニシテ蒸發力ノ強盛ナルトハ遙ニ高島炭ヲ凌駕スルモノト認ム

(附言)

明治三十七年四月始テ本艦ニ搭載シタル「ボカホンタス」炭ハ當時供給ノ英炭ニ比スレハ粉末ヲ含ムコト一層多カリシモ其ノ品位尙英炭代用トシテ戰時ノ用ヲ充タスニ足ルモ

ノト認メタリ然レトモ今回試焚ノ爲メ搭載シタルモノハ全部殆ト粉炭ノミニシテ稀ニ塊炭ノ混在スルコトヲ見ルニ過キサルナリ若シ現時貯藏セラル、所ノ本炭ニシテ其ノ大部分ハ皆今回供給セラレタルカ如キ品位ノモノナラシニハ其ノ儘戰時ノ用ニ供スルコト能ハサルヲ以テ寧ロ煉炭材料トシテ之ヲ利用セラル、ノ適當ナルヲ信ス

明治三十八年四月三十日

第五款 煉炭ノ購買

日本煉炭株式會社ハ、小規模ノ工場ヲ長崎港土井ノ首ニ有シ、天草島ニ産出スル無煙粉炭ヲ原料トシテ、煉炭ヲ製出シ、其ノ煉炭ハ品質ニ於テハ、固ヨリ英炭若クハ佛國製優等ノ煉炭ニ比スヘキニ非スト雖モ、比較的優等ノ煉炭ヲ製出スル本邦唯一ノ會社ナリトス、我カ海軍ニ於テハ、夙ニ同會社製ノ煉炭ヲ採用シ、平時ニ於テハ、之ヲ驅逐艦及ヒ水雷艇ノ航海用トシテ使用セシメタリシカ、戰時ニ於テモ、對敵行動以外ニ在リテハ、尙驅逐艦及ヒ水雷艇等ニ於テ、此ノ種ノ煉炭ヲ使用シ得ルノ機會多キヲ以テ、同會社ヲシテ三十七年度ニ五萬噸、三十八年度ニ更ニ五萬噸ヲ製造セシメタリ、然ルニ同會社ノ規模甚タ大ナラス、嘗ニ煉炭製造機械ノ設備ニ於テ小ナルノミナラス、天草島ニ於ル原料炭ノ採掘事業モ、又甚タ小規模ニシテ、幾多ノ小炭礦坑ヨリ之ヲ蒐集セサル可カラス、然モ各炭礦ニ於ル炭層ハ甚タ薄キカ故ニ、如何ニ勵精シテ之ヲ採掘セント欲スルモ、或限度以上ニハ採掘高ヲ増加セシムルコト能ハス、三十七年度ハ辛ウシテ所要額ヲ製出シタリシモ、三十八年度ニ於テハ、原料礦坑ニ浸水シタルカ爲メニ、三十八年十月平

和克復時ニ至ル迄ニ、僅ニ二万餘噸ヲ製出シ得タルニ過キス、

第六款 煉炭ノ品質

日本煉炭株式會社ニ於テ製出スル煉炭ハ、其ノ原料ヲ天草島ニ於ル幾多ノ小炭礦ヨリ蒐集スルモノナルカ故ニ、一定不變ノ組成ヲ有セシムルコト能ハス、是ヲ以テ戰役中我カ海軍ニ於テ、同會社ヲシテ製出セシメタル煉炭ハ、左記十二種類ノ原料配合ニ依ラシメタリ、

日本煉炭株式會社製煉炭原料及ヒ配合(百分)

第十一號	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山
新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山	新山
五〇	三三、三三	三三、三三	三三、三三	三三、三三	三三、三三	三三、三三	三三、三三	三三、三三	三三、三三	三三、三三	三三、三三	三三、三三	三三、三三	三三、三三	三三、三三	三三、三三	三三、三三	三三、三三	三三、三三	三三、三三
三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
浦越	高島	浦越	高島	浦越	高島	浦越	高島	浦越	高島	浦越	高島	浦越	高島	浦越	高島	浦越	高島	浦越	高島	浦越
一五	一〇	一六、六七	一七	二〇	二〇	二五	一〇	二〇	二〇	二五	一〇	二〇	二〇	二五	一〇	二〇	二〇	二五	一〇	二〇
粘土	粘土	粘土	粘土	粘土	粘土	粘土	粘土	粘土	粘土	粘土	粘土	粘土	粘土	粘土	粘土	粘土	粘土	粘土	粘土	粘土
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

日本煉炭株式會社ヲシテ製造セシメタル煉炭ハ、上表ノ如ク其ノ原料ニ於テ產地ヲ異ニシ、配
合ヲ區別シアルノミナラス、同會社ハ尙之ヲ煉炭ニ製造スル方法ニ於テ、頗ル幼稚ナルヲ免レ
サリシヲ以テ、艦政本部ハ、同出仕海軍大機關士高津黃薇男ヲ長崎ニ特派シ、其ノ製造方法ヲ監
督セシメタリ、(但戰役中ニシテ佐世保海軍工廠ニ於テ之ヲ監督ス)而テ製品出來シタル後之ヲ授受スルニ當リ、石炭規格ニ準
シテ之ヲ試驗セリ、其ノ成績ハ、原料及ヒ配合ノ著シク相違シアルニ拘ラス、孰レモ大同小異ニ
シテ、石炭一疋ヲ以テ攝氏百度ノ水ヲ蒸發セシムル量ハ約九疋ナリキ、日本煉炭株式會社ニ於
テ製造シタル煉炭ハ、主トシテ重量約九疋ヲ有スル方形ノモノナリシカ、戰役中ニシテ同社ノ
煉炭製出量ヲ大ナラシムル目的ヲ以テ、同社煉炭機械ノ副動裝置ヲ利用シ、卵形ノ煉炭ヲ製造
シタルコトアリ、卵形ノ者ハ方形ノ者ニ比シ、其ノ形小ナルヲ以テ、之ヲ焚クニ當リテ、特ニ破碎
スルノ要ナク、水雷艇若クハ驅逐艦ニ於テハ、方形ノモノヨリモ、其ノ狹隘ナル石炭庫ニ多量ヲ
搭載シ得ルノ利アリト雖モ、出征シタル各艇隊ノ機關官ニ就テ、之ニ關スル意見ヲ徵シタルニ、
卵形ノ煉炭ハ、第一、之ヲ艇内ニ搭載シ若クハ運搬スルニ不便ナルコト、第二、水雷艇ノ炭庫ハ
容積小ナルヲ以テ、往々石炭ヲ庫外ニ積置カサル可カラス、然ルニ卵形ノモノハ之ヲ堆積スル
ニ不便ナルコト、第三、點火用意ヲ爲スニ其ノ構成ニ困難ナルコト、第四、形狀扁平ニ過キ、之ヲ
燃燒スルニ通風完全ナラス、隨テ火勢弱キコト、第五、露面平滑ニシテ點火シ難キコト、第六、埋

火及ヒ繼火等ヲ爲スニ困難ナルコト、第七、凝集力少クシテ粉末ニ成リ易ク、其ノ粉末ハ燃エスシテ灰燼ニ混入シ去ル不利益アルコト等、多クノ缺點アルヲ知リタルヲ以テ、後チ之カ製造ヲ中止セシメタリ、

三十八年八月軍艦富士ニ於テ、日本煉炭株式會社製第一種煉炭(粘土ヲ混入シタルモノ)ヲ試焚シタル成績ニ就キ、同艦長海軍大佐松本和ヨリ岩崎艦政本部第二部長ニ提出シタル報告ノ摘要左ノ如シ、

一、蒸發力ハ良好ナル英炭ニ比シテ遜色アルハ勿論ニシテ之ヲ從來ノ第一種煉炭ニシテ粘土ヲ混入セサルモノニ比スルモ亦多少ノ劣ル所アルモノ、如シ然レトモ今回使用シタル炭量ハ僅ニ百二十噸ニシテ其ノ燃燒度モ普通ノ艦隊航行中普通ノ燃燒度ヲ以テ之ヲ焚用シタルニ過キサルヲ以テ尙未タ一概ニ之ヲ劣勢ナリト斷言スルコト能ハサルナリ

二、發煙ノ狀ハ一般ニ稀薄ニシテ良好ナル通風ヲ以テ火床面積一平方呎毎ニ約十四呎五ノ割合ニテ燃燒スル場合ニ在リテハ其ノ成績ハ良好ナル英炭ニ讓ラサルコトヲ實驗セリ而テ之ヨリ低度ノ燃燒度ニ於テハ其ノ發煙ハ英炭ヨリ稍々濃厚ナリ(但高度ノ燃燒度ヲ以テスル時ノ狀態ハ之ヲ實驗スルノ機會ナカリキ)

三、燃燒ノ狀ハ從來ノ煉炭ト敢テ大差ナシト雖モ只其ノ燃燒ニ一層良好ナル通風ヲ要スルト且其ノ灰落戸ヲ閉サ、ル時ハ火力頓ニ衰ヘテ火層ノ暗黒色ヲ呈スルコト一層速ナルノ不利益アリ此ヲ以テ本炭ノミヲ使用シテ埋火ヲ行ヒ或ハ長ク低速力ノ運轉ヲ繼續シタル後チ俄ニ大速度ニ變スル等ノ場合ニ於テハ一層細心ナル注意ヲ要スルモノナリ

四、「クリンカー」ハ從來ノ煉炭ニ比スレハ其ノ量稍、少キノミナラス其ノ性粘著力ニ乏シク容易ニ破碎セラル、ヲ以テ從來ノ煉炭ニ於テ往々見ルカ如ク高速力ノ運轉ニ於テ「クリンカー」ノ爲メニ火力ヲ衰微セシムルカ如キ不幸ニ陥ル患ナカル可シト認ム然レトモ灰燼ノ總量ハ極テ夥シク百分中實ニ一三、五ノ多キニ達シタリ

第七款 第二種炭ノ購買

第二種炭ハ、平時艦船ノ航海用炭ニシテ、北海道及ヒ筑豊方面ニ産出スル有煙炭中、有數ノ品種ニ屬ス、戰時ニ於テ艦艇ノ實勢力ヲ顯表セシメント欲セハ、罐ノ燃料トシテ、英炭ヲ使用セサル可カラサルハ勿論ナリト雖モ、戰時モ前進根據地等ニ碇泊スル時ハ、多ク第二種炭タル石炭ヲ使用シ得ルノミナラス、對敵行動ニ妨ケナキ限りハ、航海用ニモ亦時ニ之ヲ使用シ得ルヲ以テ、戰時モ第二種炭ヲ使用スル範圍頗ル廣ク、隨テ之カ多額ノ準備貯藏ヲ爲サル可カラス、然ルニ一度戰端開ケハ、海ニ在リテハ、本邦汽船ノ十中八九ハ、政府ニ雇上ケラル、ヲ以テ、一般ノ海運業ハ沈衰シ、爲メニ石炭ノ運賃ハ著シク騰貴スルハ勿論、陸ニ在リテハ、鐵道ハ兵馬輸送ノ爲メニ忙殺セラル、ヲ以テ、延テ石炭ノ搬出ニ影響シ、結局炭價ヲ暴騰セシムルニ至ルヘク、加之第二種炭ハ海軍以外ニ於テモ、需用甚々尠カラサルヲ以テ、我カ海軍ニ於テ多額ニ之ヲ購買セントスル場合ニ、動モスレハ市場品拂底ヲ告クルコトナシトセサルナリ、是ニ於テ三十七年三月、艦政本部ハ、我カ國ニ於ル主ナル炭業商社ニ交渉ヲ重ネ、三十七年度ニ於テ、各鎮守府ニ庫納スヘキ炭種單價及ヒ其ノ供給者ヲ協定シ、之ヲ各鎮守府司令長官ニ通牒シ、各鎮守府ニ於テハ、

一年度契約ヲ以テ、必要ノ數量ヲ各供給者ヨリ購入シ得ルコト、セリ、即チ其ノ協定シタル炭種單價及ヒ供給者等ハ左ノ如シ、

横須賀鎮守府

一、小松炭(起行)

横須賀庫納

一噸金八圓八拾錢

但三菱合資會社納

一、夕張炭

室蘭小樽船積込納

一噸金六圓九拾錢

但北海道炭礦株式會社納

吳鎮守府

一、田川、豐國、金田炭ノ内

吳庫納

一噸金六圓七拾錢

但三井物産合名會社納

一、小松炭(起行)

吳庫納

一噸金六圓七拾錢

但三菱合資會社納

佐世保鎮守府

一、田川、豐國、金田炭ノ内

佐世保庫納

一噸金七圓

但三井物産合名會社納

一、相知炭

佐世保庫納

一噸金七圓

但三菱合資會社納

一、小松炭(起行)

但三菱合資會社納

舞鶴鎮守府

竹敷庫納

一噸金七圓九拾五錢

一、小松炭(起行)

但三菱合資會社納

舞鶴庫納

一噸金八圓四拾錢

前表中、相知炭ハ佐世保鎮守府ニ於テ、三十六年度内ニ購買シタル納品ノ成績ニ徴スルニ、其ノ品種ハ至テ良好ナルヲ以テ、同鎮守府ヲシテ成ルヘク多量ノ同種炭ヲ購買貯藏セシムルノ必要ヲ認メタリシカ、同炭礦坑ニ於ル出炭量ハ甚タ多カラズ、毎月僅ニ約四千噸ノ選別炭ヲ出スニ過キサルヲ以テ、戦局ノ如何ニ依リ、急速ニ多額ノ同炭ヲ購入セントスルモ、到底其ノ望ヲ充タスコト能ハサルヲ慮リ、海軍大臣ハ三十七年四月官房機密第六六〇號ヲ以テ、今後毎月四千噸ノ目途ヲ以テ、战役間引續キ相知炭ヲ購入シ、之ヲ貯藏スヘキ旨佐世保鎮守府司令長官ニ訓令セリ、

熟、佐世保軍港ニ於ル第二種炭ノ供給高ヲ見ルニ、战役開始以降三十七年六月初旬ニ至ル四ヶ月ニ彌ル平均ハ、毎月約一万噸内外ニシテ、當時同港ニ於ル同種炭ノ貯藏額ハ、僅ニ一万餘噸ニ過キス、尙大ニ同種炭ヲ購買貯藏セシムルノ要アリ、然ルニ高島炭ハ蒸發力ノ點ニ於テ、我カ國有煙炭中他ニ比類ナキ良質ノモノニシテ、我カ海軍ニ於テハ、夙ニ第二種炭トシテ之ヲ指定シタリト雖モ、其ノ炭脈ハ將ニ盡キントシテ、出炭ノ量甚タ少ク、然モ其ノ全部ハ常ニ他ニ契約シ

テ之ヲ販賣シ、又甚々高價ナリシヲ以テ、海軍ニ於テハ、近年久シク之ヲ購買シタルコトナカリシモ、幸ニ曩ニ新炭脈ヲ發見シ、大ニ其ノ採掘額ヲ増加シ、從テ著シク其ノ價格ヲモ低減シタルヲ以テ、之ヲ購買貯藏スルヲ利益ナリトシ、海軍大臣ハ同年六月十七日官房機密第九五八號ヲ以テ、同炭大凡一万八千噸ヲ購入貯藏スヘキ旨、佐世保鎮守府司令長官ニ訓令セリ、

同年十月戰局ハ益々發展シ、旅順口ニ於ル敵艦隊ハ、再海上ニ出ツルノ勇ナク、其ノ最期モ亦甚々遠カラサル可ク、隨テ我カ艦艇ノ燃料トシテ英炭ヲ專用スルノ要ナク、之ニ代フルニ第二種炭ヲ以テスルコト、近キ將來ニアルヘキヲ察シ、艦政本部ハ徐ニ其ノ準備ニ著手セリ、今戰役開始以降、主トシテ需品供給基地ニ當ル佐世保軍港ニ於テ、出征艦隊用トシテ、石炭ヲ供給シタル數額ヲ查覈スルニ、英炭煉炭、及ヒ和炭(第三種炭ヲ除ク)ヲ合シテ、平均月額約四萬噸ニ達スルヲ以テ、全部和炭ヲ使用セシムルモノトセハ、少クトモ約二ヶ月分ヲ準備貯藏シ置クヲ要スルカ故ニ、佐世保軍港ニ合計八萬噸ノ第二種炭ヲ蒐集セシメサル可カラズ、然ルニ曩ニ佐世保鎮守府司令長官ニ購買方ヲ訓令シタル相知及ヒ高島兩炭種ノ庫納月額ハ、計一萬噸ニ過キササルヲ以テ、更ニ差引六萬噸ヲ購買セシムルヲ要ス、斯ノ如キ多額ヲ時ニ臨シテ急速購買蒐集センコト、到底不可能事ナルヲ以テ、漸次之ヲ購買貯藏シテ、以テ機宜ヲ失セザランコトヲ期シ、海軍大臣ハ、同年十月十四日官房機密第一三六三號ヲ以テ、第二種和炭六萬噸ヲ購入シ、之ヲ貯藏スヘキ旨、佐世保鎮守府司令長官ニ訓令セリ、

然ルニ三十八年一月、敵ノ堅守シタル旅順口ハ開城シテ、此ノ方面ニ於ル戰局ノ一段落ヲ告ク

ルヤ、我カ艦隊ハ對敵ノ行動少キニ至リシヲ以テ、海軍大臣ハ聯合艦隊司令長官ニ訓令シテ、當分ノ間艦船ノ航海用炭ハ、特ニ其ノ必要ヲ認メサル限り、成ルヘク第二種炭ヲ使用セシメ、驅逐艦及ヒ水雷艇ニハ成ルヘク煉炭ヲ使用セシムルコト、爲シタルカ故ニ、曩ニ佐世保鎮守府司令長官ニ訓令シテ購買セシメタル第二種炭六万噸、及ヒ佐世保軍港ニ於ル同種炭ノ貯藏額ハ、僅ニ二ヶ月ヲ支フルニ止リ、三十八年三月以降ノ分ハ、更ニ購買シテ貯藏スルヲ要スルニ至レリ、是ニ於テ艦政本部ハ、更ニ戰役開始以降三十七年十一月ニ至ル期間ニ於テ、聯合艦隊ノ消費シタル石炭量ヲ精査シタルニ、平均月額三万七千八百七十九噸ニシテ、内驅逐艦及ヒ水雷艇ノ消費シタルモノ六千〇六十一噸ヲ控除セバ、其ノ他ノ軍艦(假裝軍艦ヲ含ム)ニ於テ消費スル石炭量ハ、三万一千餘噸ナルカ故ニ、自今毎月同額ノ第二種炭ヲ要スルモノトス、是ニ於テ海軍大臣ハ、三十八年一月二十八日官房機密第一四六號ヲ以テ、同年三月以降毎月三万噸ヲ限度トシ、第二種和炭ヲ購入シ、所屬工廠ニ之ヲ貯藏スヘキ旨、佐世保鎮守府司令長官ニ訓令セリ、蓋斯ノ如ク毎月購入契約ヲ爲サシメタルハ、今後戰局ノ變遷ニ伴ヒ、何時同炭種ヲ要セサルニ至ルヤ期セラレサルニ依リシモノニシテ、月額三万一千餘噸ヲ要スルニ、之ヲ三万噸ニ限定シタルハ、我カ海軍ニ於テ經營スル新原炭ト相俟タハ、供給上敢テ遺憾ナシト認メタルニ依ル、而テ又此ノ訓令ノ發布ト同時ニ、三十七年官房機密第六六〇號ノ訓令ヲ廢シ、佐世保鎮守府ニ於テ、相知炭ヲ毎月凡四千噸宛、戰役間引續キ購入貯藏スル件ヲ取消セリ、是同炭モ亦前ノ訓令ニアル三万噸ノ中ニ包含セシメ得レハナリ、

三十八年三月、艦政本部ハ再我カ國ニ於ル主ナル炭業商社ニ協商シ、以テ同年四月以降十二月ニ至ル期間ニ於テ、各鎮守府ニ庫納スヘキ第二種炭ノ單價ヲ協定シ、之ヲ各鎮守府司令長官(旅順口鎮守府ヲ除ク)ニ通牒セリ、單價表左ノ如シ、

納入地	炭種	夕張	田川、金田、豊國	相知	小松	高島
門司			七、二五〇		六、五〇〇	
長崎						九、〇〇〇
佐世保			九、〇〇〇	八、〇〇〇	八、五〇〇	九、三〇〇
吳			八、七〇〇		八、二〇〇	
横須賀		八、五〇〇			九、八〇〇	
函館		八、五〇〇				
小樽、室蘭		六、九〇〇				
竹	敷				八、九五〇	

備考 小樽及ヒ室蘭ニ於ル夕張炭六、九〇〇トアルハ艦船カ其ノ燃料トシテ搭載スル場合ノ價格ニシテ同地ニ於テ運送船ヲ以テ積取ル場合ニハ千疋六圓五拾錢ノ割ニ引下ルモノナリ

而テ之ト同時ニ、各炭礦ニ於ル毎月ノ出炭力ヲ調査シタルニ、高島ハ約三千噸、相知ハ約六千噸、小松ハ約四千噸、田川、金田及ヒ豊國ハ合シテ約八千噸、而テ夕張ハ殆ト制限ナク幾何ニテモ供給スルコトヲ得ヘキヲ以テ、三十八年四月ヨリ同十二月ニ至ル期間ニ於テ、各鎮守府ノ需

用量ヲ豫定シ、各別炭種ヲ協定シ、之ヲモ各鎮守府司令長官ニ通牒シ、成ルヘク官船便ヲ以テ、各其ノ軍港ニ回漕セシメラレタキ希望ヲ申告セリ、各鎮守府ニ供給スル炭種ノ區別表左ノ如シ、

鎮守府	三十八年四月ヨリ十二月ニ至ル	炭種	購入地	鎮守府	三十八年四月ヨリ十二月ニ至ル	炭種	購入地
	需要豫定額				需要豫定額		
横須賀	三〇、〇〇〇	夕張	室蘭	舞鶴	一〇、〇〇〇	同上	同上
吳	一五、〇〇〇	田川、金田、豊國	門司	佐世保	一五〇、〇〇〇	田川、金田、豊國、相知、高島	同上

然ルニ日本海海戦ニ於テ、我カ艦隊ハ新來ノ敵第二太平洋艦隊ヲ殆ト全滅ニ歸セシメ、次テ北遣艦隊ヲ編制シテ、樺太方面ニ作動スルニ至リシヲ以テ、同艦隊ニ對スル軍需品ハ、主下シテ之ヲ横須賀軍港ヨリ供給セサル可カラサリシヲ以テ、横須賀鎮守府ニ於ル第二種和炭ノ需用ハ頓ニ増加シ、隨テ豫定購買高ヲ増加スルノ止ムヲ得サルニ至リ、結局納入契約者ヲシテ、他ノ賣口ニ充テタルモノヲ納入セシメ、延テ豫メ契約シタル單價ニ、幾分カノ割増ヲ要シタリ、

第八款 第二種炭ノ品質

我カ海軍ニ於ル石炭試験規格ニ依レハ、第二種炭トシテ指定シタル和炭ハ、一吨ヲ以テ攝氏百度ノ水ヲ蒸發セシムル量ハ、八吨以上ニシテ、針金製八分目ノ篩ヲ脱スル粉末ハ、一割以下ナラサル可カラス、然ルニ高島炭ハ由來其ノ質甚タ脆クシテ粉末多ク、塊炭モ亦容易ニ破碎スルヲ以テ、戦役中同炭ヲ購買セント欲スルモ、此ノ規格ニ準據セハ、到底之ヲ得ルノ望ナカリシカ故

ニ、海軍大臣ハ三十七年六月佐世保鎮守府ヲシテ、同炭一万八千噸ヲ購入セシムルニ當リ、同炭ニ限り石炭規格ヲ逸シテ、粉炭量ハ三割五分以下ト爲シ、其ノ代リニ蒸發力ハ他ノ有煙炭ニ比シ遙ニ優勝ナルヲ以テ、同炭ニ限り、一屯ヲ以テスル攝氏百度ニ於ル蒸發水量ハ、八屯五以上ト爲サシメタリ、戰役中我カ海軍ニ於テ購入シタル第二種和炭ノ試験成績ハ左表ノ如シ、

炭種	分 析 試 驗 成 績										試 炭 成 績				
	試驗回数	揮發物%	固定炭素%	灰%	炭素%	水素%	酸素及鹽素%	硫黄%	比重	計算上ノ炭 lbs	試験回数	石ニ應ル水炭ニ於テ攝氏一基百磅	灰ノ割合%	シリノ割合%	粉炭割合%
田川	5	35,48	54,89	9,17	72,96	6,58	11,54	0,52	1,32	7,19	6	8,33	7,00	2,79	7,59
金田	1	33,90	56,30	9,80	73,00	5,40	11,20	0,55	1,30	7,30	2	8,33	6,50	3,35	9,57
堀島	1	32,90	62,00	5,10	80,45	5,80	7,80	0,83	1,30	8,20	4	9,27	4,08	2,44	19,65
相模	3	38,60	57,53	8,87	73,63	5,73	10,57	0,86	1,30	7,47	13	8,34	4,94	2,87	7,91
小松	5	32,67	54,91	12,47	69,87	5,09	12,05	0,54	1,34	6,88	8	8,33	8,03	2,13	6,30

第九款 蘇我炭ノ購買

豊前國田川郡川崎村ニ無煙炭礦アリ、池尻停車場ト川崎停車場トノ殆ト中央ニ位シ、坑主ノ名ヲ採リテ蘇我無煙炭坑ト云フ、由來本邦ニ産出スル無煙炭ノ多クハ粉末ニシテ、天然ノ儘之ヲ艦艇ノ焚用ニ供スルコトヲ得サルニ拘ラス、獨リ本炭礦ノ無煙炭ハ比較的塊炭多シ、只其ノ質硬ク容易ニ蓄火セサルヲ以テ、單獨ニハ之ヲ焚用ニ供スルコトヲ得サルモ、有煙炭ト相混合シ

テ之ヲ焚ケハ、多少ノ望ヲ囑スルニ足ルモノト認メ、明治三十五年十月、艦政本部ハ時ノ石炭調
査委員(委員長吉田海軍機關總監)ヲシテ、艦船ニ於テ同炭使用ノ適否如何ヲ調査セシメ、同委員ハ軍艦八雲ニ
於テ、同炭ト御徳炭トヲ混合シテ試焚シタル結果、同炭ハ有煙炭ヲ適當ニ混合セハ、強壓通風裝
置ヲ備フル艦艇ニ於テ、平常汽走ノ場合ニハ之ヲ使用シ得ヘキモノナリト報告シ、而テ又三十
六年十二月、軍艦嚴島ニ於テ同炭ト夕張炭トヲ混用試焚シタル成績ニ關シ、同艦機關長海軍機
關中監入澤敏雄ノ意見ニ徵スルニ、同炭ハ多少ノ強迫通風ヲ與フレハ、五分ノ三速力以下ニ之
ヲ適用シ得ルノミナラス、聊カ炭費ヲ増大スル不利アル外、軍艦用トシテ普通ノ和炭ニ比シテ
大ニ勝ル所アリ、而テ之ニ混合スル炭種ヲ選擇セハ、恐ラクハ「クリンカー」ノ量モ減少シ、且炭
費モ必ス減少シ得ヘシト信ス云ヤトアリ、之ヲ要スルニ、同炭ハ他ノ有煙炭ト混合使用スルニ
於テハ、全力五分ノ三以下ノ速力ヲ以テスル巡航、竝ニ艦隊運動其ノ他操練等ニ於テ、第一種炭
ノ代用トシテ、適當ノ燃料タルヲ失ハス、其ノ無煙ナルノ點ニ於テハ、特ニ戰役中大ニ利スル所
アル可ク、且其ノ質短焰ナルカ故ニ、水管式ノ罐ニ對シテハ、保存上大ナル利益アルヘキモノト
認メ、海軍大臣ハ、三十六年十二月佐世保鎮守府ニ於テ先ツ同炭三千噸ヲ購入セシメ、後チ三十
七年四月、横須賀及ヒ吳ノ兩鎮守府ニ於テ各三千噸、佐世保鎮守府ニ於テ更ニ四千噸ノ同炭ヲ
購買セシメ、之ニ約三分ノ一ノ有煙炭ヲ混合シテ、水管式罐ヲ裝備シタル艦艇(平常)及ヒ常ニ強
壓通風ヲ使用スル特設船舶ニ供用セシムヘキ旨、各關係鎮守府司令長官ニ訓令セリ、
然ルニ蘇我炭ハ從來其ノ需用稀ナリシカ故ニ、其ノ採掘ノ設備至テ小規模ニシテ、而モ今後モ

尙引續キ多額ノ需用アルヤ否ヤハ、大ニ疑フ存セサル可カラサルヲ以テ、急ニ設備ヲ増大シ、採掘高ヲ増加セントスルカ如キハ、坑主ニ於テ大ニ考慮ヲ要スル點ナルノミナラス、坑主亦恆産ナク、到底前記ノ炭量ヲ契約期間内ニ納入シ得ルコト能ハス、遂ニ契約總高一万三千噸ニ對シ、僅ニ六千九百九十五噸ヲ納炭シ得タルノミナリキ、

由來蘇我炭ハ一種特異ノ性狀ヲ有シ、之ヲ燃燒スルコト頗ル困難ナルヲ以テ、艦政本部ニ於テハ、同炭供給ノ主旨及ヒ焚火上ノ注意ヲ印刷シ、以テ所要ノ向へ配布セリ、其ノ要領左ノ如シ、

蘇我無煙炭供給ノ主旨

蘇我炭ハ含有スル揮發成分多クハ約百分ノ八ニ過キサル無煙炭ニシテ單獨之ヲ使用スルトキハ高度ノ強壓通風ニ據ルニ非サレハ燃燒極テ困難ナルモノナレトモ之ニ約三分ノ一ノ有煙炭ヲ混和シ以テ其ノ燃燒ヲ助ケ好良ナル通風ノ下ニ焚用スルトキハ大ニ其ノ面目ヲ更メ自然通風全力五分ノ三以下ノ汽走ニハ優ニ之ヲ使用シ得ヘキコト軍艦八雲及ヒ嚴島ニ於テ施行シタル航走試験ノ成績ニ徴シテ明ナルヲ認ム而テ有煙炭ト約同一ノ價格ヲ以テ無煙炭料ヲ平常航海用トシテ軍艦ニ供給スルノ途ヲ開クコトヲ得ニハ嘗ニ艦隊運動其ノ他ノ操練執行ノ爲メ著大ノ利益ヲ與ヘ從來常ニ耳ニスル所ノ缺點ヲ補正スルヲ得ルノミナラス又有煙炭ヲ用ヒ水管罐ニ於テ煙路燒損頻繁ナルノ患ヲ全然若クハ大ニ減少スルコトヲ得ヘシト信ス抑本炭ハ今日迄ノ試験成績ニ徴スレハ決シテ第一種炭ニ比較スヘキモノニ非スシテ其ノ特有ノ性質ヨリ生スル利益ハ一ニ只其ノ發煙ノ稀薄ナルト其ノ短焰ニシテ水管罐ニ適

スルトノ二件ニ過キサルナリ故ニ此ノ二件以上ノ效能ヲ之ニ俟ツハ多キヲ望ムニ失スルモ
ノニシテ本炭使用ヲ開始スルノ目的ハ單ニ價ノ低廉ナル無煙炭ヲ本邦ニ得ル迄ノ間約全力
五分ノ三以内ノ平常航海ニ於テ常用トシテ差支ナキヲ得ハ本炭使用ノ目的ハ足レルナリ然
レトモ其ノ特質ヨリ見ルモ燃燒極テ平易ナル有煙炭ニ比較シテハ焚火上特別ノ注意ヲ要ス
ルハ論ヲ俟タス其ノ礦脂發生ノ速ナルト灰分ノ稍夥多ナルカ爲メ機關兵ノ勞力或ハ多少増
大スルノ恐ナキニ非サルモ若シ兵員ノカト伎倆ニ依頼シテ如上ノ利益ヲ收ムルコトヲ得ハ
得失優ニ相償フコトヲ得ン乎又英炭若クハ煉炭焚火上ノ熟練ヲ得ルニモ利益スルコトナキ
カ是廣ク本炭若クハ之ニ類似スル筑豊産出無煙炭ヲ使用スルノ可否ヲ確定スル以前尙進テ
研究スヘキ要點ニシテ今回供給セントスル數量ノ如キ此ノ目的ノ用途ニ充テシコトヲ期ス
ルモノナリ

巖島ニ於ル試験ノ經過ヨリシテ考フルニ試験開始ノ頃ヨリハ其ノ後半ニ於テ好成绩ヲ呈ス
ルニ至リタルヲ見ルは一ハ當初程度以上ノ燃燒ヲ本炭ニ豫期シタルト一ハ漸次本炭特性ノ
存スル所ヲ了知スルニ至レルニ依ルモノニシテ即チ熟練ノ如何ニ依テ成績ヲ左右スルコト
アルヘキハ蔽フヘカラサル事實ニシテ特ニ注意セサル可カラサルナリ
茲ニ使用者ノ參考ニ資スルノ目的ヲ以テ焚火法ニ關スル注意ヲ掲ケントス然レトモ本炭ニ
就テハ八雲及ヒ巖島ノ試験ニ於テ漸ク之ヲ或程度迄ノ實用ニ供シ得ヘキコトヲ識認シタル
ニ止リ尙研究ヲ要スルコト少シトセス本炭ノ供給ヲ受ケタル各官ハ以上ノ主旨ヲ諒シ一層

深ク研究アラシコトヲ望ム

焚火上ノ注意(参考ニ止ル)

一、蘇我無煙炭ハ揮發分過少ニシテ燃燒困難ナルヲ以テ之ニ約三分ノ一ノ有煙炭ヲ混和シ適合ノ通風ノ下ニ焚火スルヲ要ス

二、水管罐ニ於テ火床上ニ空氣ヲ注入スルノミニシテ良好ノ成績ヲ得ル能ハサレハ適宜二分ノ一時以下ノ通風ヲ焚火室内ニ維持シテ燃燒ヲ助クルヲ要スヘシ但火床上ニ空氣ノ注入又ハ送風機械其ノ何レヲ用フルモ通風ノ度ハ最能ク燃燒程度ニ適合スルヲ要ス且送風機械ノミニ依テ通風スルコト其ノ他ノ法ニ勝ルコトヲ發見シタル實例アルヲ以テ特意ヲ加ヘ焚火室通風裝置ノ狀態及ヒ燃燒程度等ヲ監視シ何レカ適當ノ方法ニ準據セサル可カラス

三、他ノ無煙炭ヲ使用スルト等シク火層ハ成ルヘク薄ク維持シ給炭ハ其ノ回數ヲ多クシ一度ノ量ヲ減スルコトニ注意スルヲ要ス

四、特ニ細心注意スヘキハ給炭ノ量通風ノ度ト相伴ハサルトキハ本炭ノ特質トシテ燃燒困難ナルカ爲メ有煙炭ハ速ニ燃燒スルモ本炭ハ骸炭ノ狀態ヲ成シテ漸次火床上ニ堆積シ通風阻害ノ爲メ骸炭ノ量ヲ増加スルニ至ルヘキコトナリトス

若シ不熟練ノ爲メ斯ノ如キ狀態ニ陥ルトキハ骸炭ノ幾分ヲ掻キ出シ火層ヲ薄クシ更ニ給炭ヲ加減スルニ非サレハ火勢ヲ挽回スルコト難キコトアルヘシ

五、本炭ハ比較的速ニ礦脂ヲ發生スルノ傾アルモノナルヲ以テ時々火鎗ヲ用ヒテ礦脂ヲ起シ之ヲ除去スヘシ

但礦脂ハ其ノ質粘著性ノモノニ非サルヲ以テ之ヲ起シ取出スコト比較的容易ニシテ若シ怠ラス之ヲ行ヘハ通風ヲ阻害シ火力ヲ殺滅スルニ至ルコトアル可カラズ

六、若シ第五項ノ注意ヲ怠ルトキハ通風ハ漸次礦脂ノ爲メ阻塞セラレ燃燒不充分ニシテ第四項ニ掲クル所ノ不良ナル結果ヲ生スルニ至ルヘシ

七、以上ノ注意ヲ加ヘ時々礦脂ヲ除去スルモ或時間ニ達スレハ換火ヲ行フノ必要ヲ生スヘキヲ以テ以上ノ注意ヲ勵行スルヲ以テ足レリト爲サス其ノ必要ヲ認ムルニ至ラハ換火ヲ行フヘシ

八、必要ニ應シ時々整火ヲ行フコトヲ怠ル可カラズ通風ノ状態ト焚火ノ熟否ニ依リ或ハ屢之ヲ行フノ必要ヲ認ムルコトアルヘシ而テ灰落ニハ必ス充分水ヲ充タシ置クヘシ

九、焚火法ハ定律焚火法ニ據ルヲ適當ナリトス而テ毎回ノ給炭量及ヒ間隔ハ燃燒ノ程度及ヒ通風ノ状態ニ準シ之ニ適應スル様規定スルヲ要シ火層ニ高低ナキ様裝炭スルコト最必要ナリ

十、送風機械ヲ用フルトキハ先ツ約八分ノ一時ノ通風ヨリ始メ燃燒ノ状態ヲ視察シナカラ必要ニ應シ徐ニ之ヲ増加スヘシ

而テ艦政本部ハ又之ト同時ニ各海軍工廠ニ對シ、蘇我炭ト有煙炭トノ混合方法ニ關シ、左ノ如

ク取計ヲハレタキ度旨通牒セリ、

一、混合スヘキ有煙炭ノ比例ハ蘇我無煙炭ノ二ニ對スル一タルヘキコト

一、混合ハ石炭船ニ石炭ヲ積入ル、ノ際之ヲ行ヒ無煙炭二杯ニ付有煙炭一杯ト定メ交、積載

セシメ平均ニ混和スル様ニ注意スヘキコト

一、混合用有煙炭ハ貴重品庫ニ貯藏シアル和炭ノ内何レヲ使用スルモ妨ケナシ云々

然ルニ爾後軍艦敷島(機關長海軍機關
大監倉橋半藏)及ヒ富士(機關長海軍機關
大監富岡延次郎)ニ於テ使用シタル成績ニ徴シ、兩艦

機關長ノ意見ヲ綜合スルニ、蘇我炭ト有煙炭トヲ各等分ニ混合使用スルモ、蘇我炭ハ有煙炭ノ

燃燒ニ伴ハスシテ、單ニ赤燒スルニ止リ、火力弱クシテ往々半燒ノ儘灰ト共ニ灰落ニ落下シ、灰

量亦甚タ多ク、到底艦船用石炭トシテ、其ノ平常使用スル場合ニ於テスラ、適當セサルモノト

セリ、

戰役中萬一英炭ノ缺乏シタルトキ、艦隊ノ行動上發煙ヲ忌ムノ場合ニ、使用セシメ得ヘキ鑑定

ヲ下シ、本炭ヲ購買準備スルノ舉ニ出テタルモ、英炭ハ我カ希望ニ伴ウテ續々輸入セラレ、又戰

局ハ常ニ我ニ利アリテ、艦艇ヲシテ隨時我カ好ム所ノ燃料ヲ使用セシメ得タルヲ以テ、強イテ

蘇我炭ヲ出征艦隊ニ供給スルノ要ナクシテ止ミタリ、

第十款 第三種炭ノ購買

第三種炭ハ第二種炭ニ比シ劣等ナル有煙炭ニシテ、主トシテ運送船、工作船、病院船、通信船等ノ

燃料ニ供スルモノナリ、本戰役中我カ海軍ニ於テ、此等ノ用途ニ供シタル船舶ハ、概ネ民間ヨリ

之ヲ雇上ケタルモノニシテ、其ノ事務ハ海軍省經理局ノ所掌ニ屬シ、隨テ其ノ航海用燃料ノ供給ニ關シテモ、亦同局ノ擔當スル所ニシテ、戰役開始前ニ於テハ、船舶各自ニ搭載シタル炭量ニ對シ、同局ヨリ其ノ經費ヲ支出スルノ方法ヲ採リシモ、斯テハ事餘リニ繁雜ニシテ、大ニ敏活ヲ缺クノ恐アリシヲ以テ、經理局ト艦政本部トハ相交渉シテ、之ヲ艦營需品費ノ支辨トシ、普通艦船ニ供給スルト同法ヲ以テ、需品庫其ノ他ヨリ之ヲ供給スルコト、爲セリ、是ニ於テ海軍大臣ハ、三十七年二月六日官房第四三〇號ヲ以テ、運送船、工作船、病院船及ヒ通信船用トシテ、第三種炭ヲ左記數額ノ如ク、各鎮守府需品庫ニ間斷ナク貯藏準備シ、供給シタルトキハ直ニ之ヲ補填スル様取計ヲフヘキ旨、各鎮守府司令長官ニ訓令セリ、

横須賀鎮守府

五千噸

吳鎮守府

五千噸

佐世保鎮守府

一万一千噸(内一万噸ハ佐世保海軍工廠需品庫ニ一千噸ハ竹敷要港部ニ貯藏)

舞鶴鎮守府

二千噸

而テ是ヨリ先キ炭礦商社ニ交渉シテ、第三種炭トシテ供給スヘキ炭種及ヒ單價ヲ協定シ、三十七年一月、艦政本部長ハ之ヲ各鎮守府司令長官ニ通牒セリ、其ノ要領左ノ如シ、

納場所	炭	質	單價	條	件	納入者
船積門司	豐前筑前一等塊粉兩種折中混合		四二〇〇	風雨又ハ夜荷ニ積込費五割増		日本郵船株式會社門司支店
同	長崎	松島杵島又ハ唐津切込炭ノ内	四七五〇	庫納ナレハ一噸ニ付金九錢ヲ減 ス夜中ノ船積ハ一噸ニ付拾八錢ヲ増ス		三菱合資會社

納場所	炭質	單位	條	件	納入者
納場所	炭質	單位	條	件	納入者
佐世保	三池切込炭塊六粉四ノ割合	四三五〇			三井物産合名會社
竹敷	甲 嵯田、上山田、小松鹽頭ト佐與 乙 新入、起行、三勝野ノ切込混合	五五七五			三菱合資會社
同	同上	四九七五			同上
同	同上	四九七五			同上
船積	神戶	六〇〇〇	増	風雨又ハ夜荷ノ節ハ積込費五割	日本郵船株式會社神戶支店
庫納	橫須賀	六四〇〇			北海道炭礦株式會社
船積	橫濱	六八〇〇	増	風雨又ハ夜荷ノ節ハ積込費五割	日本郵船株式會社
庫納	函館	六四〇〇			北海道炭礦株式會社
同	大湊	七〇〇〇			同上
船積	小室 橋關	四九〇〇			同上
庫納	舞鶴	五九二五			三菱合資會社
船積	西戶崎	四七五〇			岩谷松平

斯ノ如クシテ供給ノ途ヲ一定シ、軍港要港以外ニ於テ船積スル場合ニ在リテハ、乗組監督官
 (監督官ノ乗組マサル船舶ニ於テハ海軍主計官乗組アルトキハ同官ノ證明ニ依)ハ領收證ヲ納入者ニ交附シ、同
 (リ又主計官乗組アラサルトキハ船長ヲシテ證明セシメ事實至當ト認ムルトキ)ハ領收證ヲ納入者ニ交附シ、同
 時ニ管區所管海軍工廠長ニ其ノ數量代價ヲ報告シ、納入者ハ右監督官ノ領收證ヲ以テ、管區所
 管海軍工廠ヲ經テ、海軍經理部ニ代價支拂ヲ請求スルコトニ定メタリ、第三種炭ノ單價ヲ協定
 シタルハ、前記セルカ如ク開戦前ニ關リ、當時既ニ東洋ノ風雲甚々穩ナラス、隨テ炭價ハ平時ニ

比シ騰貴シアリシハ勿論ナリト雖モ、三十七年二月彼我愈々開戦スルヤ、幾多ノ船舶ハ政府ノ雇上クル所トナリ、民間ニ於テハ石炭ヲ運搬スル船舶ニ缺乏シ、遂ニ炭價騰貴セルヲ以テ、納入契約者ハ開戦後幾ナラスシテ單價ノ増額ヲ願ヒ出ツルニ至レリ、北海道炭礦株式會社ノ如キモ即チ其ノ一例ニシテ、平時ハ會社所有ノ船舶ヲ以テ、石炭ノ輸送ヲ爲シツ、アリシニ、開戦ト同時ニ其ノ船舶ハ孰レモ皆政府ノ雇上ケトナリ、外國船ヲ借りテ、之カ輸送ニ從ハシムルノ止ムヲ得サルニ至リ、大ニ其ノ輸送費ヲ増セリ、蓋斯ノ如キハ經濟界自然ノ成行ニシテ、事實止ムヲ得サルヲ以テ、孰レモ其ノ單價ニ相當ノ増加ヲ爲スヲ許セリ、

抑炭況ハ平時モ尙非常ナル浮沈アルモノニシテ、殊ニ戰時ニアリテハ一層然リトス、三十八年四五月ノ交、炭價ハ大ニ暴騰シタルニ、我カ海軍ニ於ル第三種炭ノ需用ハ、前數ヶ月ニ比シ遙ニ多大トナリ、納入契約者ハ前ニ定メタル單價ニ據リテ、之ヲ供給セサル可カラサルヲ以テ、非常ナル苦境ニ陥リ、屢歎訴スルニ至レリ、是ニ於テ其ノ必要ニ應ジ單價ノ増額ヲ許セリ、同年六月協定シタル第三種炭ノ單價ハ左表ノ如シ、蓋前單價表ヲ参照シテ之ト比較セハ、炭價ノ暴騰非常ナルヲ見ルヘシ、

納場所	炭	質	單價	條	件	納入者
船積	門司	豐前筑前一等炭塊粉兩種折半混	七二五〇	風雨又ハ夜荷積込費五割増		日本郵船株式會社門司支店
同	神戸	同	九七五〇	同上		同 神戸支店
同	横濱	豐前筑前一等炭又ハ北海道夕張空知炭塊粉兩種折半混合	一二七五〇	同上		日本郵船株式會社

以上郵船會社納ハ三十八年八月一日ヨリ同年十二月三十一日迄ニシテ搭載船舶其ノモノ、
 焚料トシテ搭載スルモノニ限ル又晴天晝間ニ於ル積込費ハ一噸ニ付キ門司金四拾貳錢神戸
 金四拾壹錢橫濱金五拾五錢ナリ

船積	納場所	炭	質	單價	條	件	納入者
庫納	長崎	杵島又ハ唐津切込炭ノ内		八〇〇〇	庫納ナレハ一噸ニ付金九錢ヲ減 ス夜中ノ船積ハ一噸ニ付金十八 錢増		三菱合資會社
庫納	竹敷	筑豊切込炭		六五七〇			同
同	吳	同		六二〇〇			同
同	舞鶴	同		六七五〇			同
同	横須賀	夕張切込炭		九五〇〇			北海道炭礦株式會社
同	函館	同		九五〇〇	船積金六十錢増		同
船積	小室 樽廻	同		七五〇〇			同

以上炭礦會社納ハ三十九年三月三十一日迄

庫納	納場所	炭	質	單價	條	件	納入者
同	大湊	夕張切込炭		九五〇〇			北海道炭礦株式會社
庫納	佐世保赤 崎貯炭場	杵島郡炭四分目篩塊粉折半混合		七三五〇			高取伊好、田島信夫 古賀善兵衛
同	同	同		九五〇〇	三十八年七月ヨリ十月迄毎月一 千噸宛炭置四千噸ニ限ル		同

第十一款 第三種炭ノ品質

我カ海軍ニ於ル石炭規格ニ依レハ、第三種炭ハ一氂ヲ以テ、攝氏百度ノ水ヲ蒸發セシムル量ハ六氂五以上ニシテ、針金製八分目篩ヲ脫スル粉末ハ、一割五分以下ナラサル可カラズ、然ルニ戰時ニ在リテハ、軍港要港以外ニ於ル同種炭ノ需用モ亦甚タ多キカ故ニ、到底一ニ此ノ試験規格ニ準據スルコト能ハス、通常市場ニ於テ一等炭ト唱フルモノ、若クハ之ニ等シキ炭質ヲ有シ、所謂切込炭ニシテ塊粉折半ノモノヲ購入使用シ得ルコト、爲シ、塊粉ノ割合ヲ檢定スルハ、四分目篩ヲ以テスルコトニ一定セリ、然レトモ本邦産出ノ有煙炭ハ、其ノ性狀區々ニシテ、或ハ餅塊性ナルモノアリ、或ハ否ラサルモノアリ、或ハ灰量饒多ナルモノアリ、或ハ粉量多クシテ塊炭ノ少キモノアリ、若シ夫其ノ蒸發力ヲ檢定セスシテ之ヲ購入スルコト、セハ、品質ノ點ニ於テ、或ハ劣等炭ヲ供給スル者アルヤモ測ル可カラサルカ故ニ、艦政本部ニ於テハ、豫メ納入者ト單價ヲ協定スルト同時ニ、其ノ品種ヲモ協定セリ、(第十款 參照)然ルニ三池炭ハ、之ヲ使用スル船舶ニ於テ數、品質ノ不良ナルヲ訴へ、審ニ多大ノ炭量ヲ要スルノミナラス、之ヲ焚用セハ希望スル速力ヲモ發出スル能ハスト提言スルモノ甚タ多ク、納入者ハ之ヲ聞キテ、其ノ儘ニ委センカ、今後其ノ炭價ニ影響スル所少カラサルヲ憂ヒ、特ニ人ヲ佐世保軍港ニ派シテ、三池炭特異ノ使用方法ヲ指示シ、火夫ノ熟達ニ努メシモ、畢竟スルニ使用者全般ニ其ノ使用方法ヲ指示スルカ如キハ、到底不可能事ナルノミナラス、其ノ使用方法ヲ學ヒ得タル者モ、尙是カ熟達ノ域ニ達スルニハ、多少ノ時日ヲ要スヘキハ勿論ナルヲ以テ、同炭ヲ焚用スル船舶ノ苦情ハ、依然トシテ毫

モ衰ヘス、之ヲ焚用セハ管ニ火夫ヲ過勞セシムルノミナラス、常ニ蒸氣力ヲ下降シ、延テハ豫定行動ノ遅延ヲ來スト訴フルモノサヘアリ、由來三池炭ハ年々約二百万噸ノ採掘ヲ爲シ、常ニ外國商船等ノ燃料ニ供シ、其ノ炭質ノ如キモ強チ不良ナラス、然モ價格ハ比較的低廉ナルカ故ニ、第三種炭トシテ之ヲ指定シタリト雖モ、斯ノ如ク之ヲ焚用スル船舶ノ苦情止ムコトナク、延テ豫定ノ行動ニ影響スルトセハ、例ヒ使用者ノ熟練ヲ待チテ、始テ同炭ノ眞價ヲ發揮シ得ルモノトスルモ、斯テハ頗ル事宜ニ適セサルノ嫌アルヲ以テ、三十七年八月以降、同炭ノ購入ヲ停止セリ、

第十二款 戦利石炭

戦役中、敵國運炭船ニシテ、我ニ捕獲シタルモノヲ始メトシ、戦役ヲ通シテ我カ海軍ノ戦利ニ歸シタル各種石炭ハ、左表ニ示スカ如ク、我カ海軍ニ於ル種別ヲ以テセハ、第一種炭十三万四千五百八十四噸五七二ニシテ、其ノ元受價格金貳百六拾八萬九千〇參拾九圓八拾九錢四厘、第二種炭三千百一十一噸、其ノ元受價格金貳萬七千四百〇八圓四拾壹錢、第三種炭二万〇九百二十二噸、其ノ元受價格金八萬八千參百九拾四圓六拾八錢七厘ニシテ、元受總價格金貳百八拾萬四千八百四拾貳圓九拾九錢壹厘、内第一種炭四千噸、第三種炭一万噸ヲ造船造兵料ニ供シ、第二種炭四百噸ヲ通常物品ニ供シタル外、殘餘一切ヲ艦營需品ト爲シ、戦役中我ニ於テ準備購買シタルモノト等シク、之ヲ艦艇ニ供給セリ、

戰 利 石 炭 明 細 表

捕獲船名若クハ鹵獲場所	船籍	新 船 名	炭種別	戰利炭量	元受價格	使用ノ目的
Oakley.	英	烏帽子丸	英 炭	1000,000	19000,000	造船造兵材料
”	”	”	”	4987,288	94758,472	艦 營 需 品
Vegga.	瑞	—	”	3000,000	54000,000	造船造兵材料
Oriel.	露	石 見	第二種炭	400,000	2400,000	通 常 物 品
Variag.	”	宗 谷	英 炭	45,000	814,185	艦 營 需 品
”	”	”	第二種炭	330,000	2252,910	”
Sungary.	”	松 江	第三種炭	205,000	766,700	”
Fū-Ping.	獨	長 山 丸	”	273,000	1097,187	”
Roseley.	英	高 崎 丸	英 炭	6476,290	123049,510	”
Lethinton.	”	若 宮 丸	”	6427,700	122126,300	”
Wilhelmina.	蘭	影 島 丸	”	6832,664	129820,616	”
Powderham.	英	—	”	4011,745	76223,155	”
Sylviana.	”	五 島 丸	”	6932,544	131718,336	”
Severus.	獨	藥 取 丸	”	3703,000	70357,000	”
”	”	”	第二種炭	22,000	187,000	”
Portava. Bayan.	露	丹 後 蘇	”	316,000	3160,000	”

第二章 第一節 第三 第十一款 戰利石炭

五十一

捕獲船名若クハ鹵獲場所	船籍	新船名	炭種別	戦利炭量	元受價格	使用ノ目的
Angara.	”	姉川	英炭	100,000	2477,000	”
I. Nicolai. 1.	”	壹岐	”	220,000	4180,000	”
Ad. Seniavine.	”	見島	”	174,000	3306,000	”
G. A. Apraksin.	”	沖島	”	256,000	4864,000	”
Biedovy.	”	阜月	”	20,000	380,000	”
Siam.	埃	襟裳丸	”	4000,000	80000,000	”
Eosby Abbey.	英	磯部丸	”	3743,000	74860,000	”
”	”	”	第三種炭	20,000	114,000	”
Harbarton.	”	藻寄丸	英炭	4710,980	94219,600	”
Wyefield.	”	汝首丸	第二種炭	216,000	2052,000	”
Aphrodite.	”	擇捉丸	第三種炭	237,000	1350,900	”
”	”	”	英炭	5044,000	110968,000	”
Venas.	”	辨天丸	”	5163,361	113267,220	”
Apollo.	”	國後丸	”	5647,000	124074,000	”
Burma.	埃	惠山丸	”	129,000	2580,000	”
”	”	”	第三種炭	15,000	85,500	”
Tacoma.	米	色丹丸	”	172,000	980,400	”
Scotsman.	英	—	第二種炭	135,000	1282,500	”

Paros.	獨	—	”	10,000	95,000	”
Henry Bolckon.	諾	—	第一種炭	61,000	1220,000	”
Australia.	米	—	第二種炭	525,000	4987,500	”
Montara.	”	—	”	1157,000	10991,500	”
旅順口			第三種炭	10000,000	42000,000	造船造兵材料
”			”	10000,000	42000,000	艦營需品
”			英 炭	61000,000	1241000,000	”
仁 川			”	900,000	20776,500	”
計	}		第一種英炭	134584,572	2690039,894	
			第二種炭	3111,000	27408,410	
			第三種炭	20922,000	88394,687	
總 計				158617,572	2805842,991	

戦利石炭中、英炭ハ孰レモ「カーザ」炭ナリシモ、其ノ孰レノ礦區ニ屬スルモノナルヤ詳ナラザリシト雖モ、捕獲檢定後、其ノ數隻ニ就キ主トシテ佐世保海軍工廠ニ於テ試焚セル成績ニ徴スルニ、左表ノ如クニシテ、帝國海軍ノ購買ニ係ル品種ト殆ト甲乙ナシ、

戰利英炭試焚成績

捕獲船名	全搭載量	試焚年月日	石炭一基ニ於テ 兵隊ニ於テ 試焚セシムル量	炭ノ割合	クランクノ割合
Roseley	6476,29 ^{FE}	38-1-26	9,9 ^{FE}	6,1%	1,8%
Wilhelmina	6832,664	38-1-27	9,9	5,4	3,3
Oakley	5987,288	"	10,5	7,4	1,2
Lethinton	6427,7	38-1-28	10,7	2,9	5,8
Powderham	4011,745	38-5-8	10,6	6,2	2,1
Sylvania	6932,544	38-6-2	11,0	5,9	2,8
平均	—	—	10,43	5,65	2,83

第三目 英炭ノ艦艇供給及ヒ其ノ節約

我カ帝國ノ艦艇ハ、平時航海用トシテ第二種炭タル和炭ヲ専用セルモ、之ヲ以テハ到底艦艇ヲシテ、其ノ機關ノ實勢ヲ顯表セシムルニ足ラス、勢ヒ英炭ヲ使用セシメサル可カラズ、是ヲ以テ海軍大臣ハ、明治三十六年七月、滿韓ニ關スル日露兩國ノ交渉、動モスレハ破裂スルノ恐アルニ際シ、同月十日海軍總務長官ヲシテ、軍機第四十二號ヲ以テ、先ツ第一群、第二群及ヒ第五群ノ諸軍艦ニ、平常ニ要スル石炭ノ外、艦内別區劃ノ炭庫内ニ便宜英炭ヲ積載セシムヘキ旨ヲ、各鎮守府司令長官及ヒ常備艦隊司令長官ニ通牒セシメタリ、而テ爾後時局ハ益々切迫シ、何時艦艇ノ出

動ヲ促スニ至ルヤ測ルヘカラサルヲ以テ、三十七年一月五日第二艦隊ニ屬スル諸艦(驅逐艦ヲ除ク)及ヒ同年一月八日第三艦隊ニ屬スル鎮遠、扶桑、嚴島、松島、橋立、秋津洲、和泉、千代田及ヒ官古ノ諸艦ニモ炭庫ノ一部ニ英炭ヲ積載セシメタリ、然ルニ英炭ハ元來粉量多ク、殊ニ本邦ニ輸入シタルモノハ、英本國ヨリ回漕ノ途中破碎スルヲ以テ、一層其ノ量多キカ故ニ、常備艦隊ニ於テハ、之ヲ選別セサレハ以テ罐ノ最大能力ヲ發揮スルニ足ラスト爲シ、電請スル所アリシヲ以テ、艦政本部長ハ各工廠長ニ通牒シテ、準備炭トシテ艦内別區劃ノ炭庫ニ搭載スヘキ英炭ハ、最近庫納ノ分ヨリ之ヲ供給シ、且之ヲ搭載スル艦艇員ヲシテ、自ラ之ヲ選別スルコトヲ容セリ、而テ驅逐艦及ヒ水雷艇ノ補充用トシテ、水雷母艦及ヒ假裝水雷母艦ニ搭載スル英炭ハ、孰レモ之ヲ選別セシメ、他ノ一般給炭船ニハ、之ヲ選別セシメテ搭載セシメタリ、然ルニ後日ニ至リ、艦隊ノ軍艦ニ補充スルモノモ、亦之ヲ選別スルノ必要ヲ認め、陸上ニ於テ、孰レモ八分目篩ヲ以テ粉末ヲ篩分ケ、以テ塊炭ノミヲ發送セシムルコト、爲セリ、由來英炭ハ英國ヨリ之ヲ輸入スルモノナルカ故ニ、妄ニ之ヲ使用スル時ハ、徒ニ硬貨ヲ海外ニ流出セシムルノ結果ニ陥ルヲ以テ、山本海軍大臣ハ、是カ使用ニ關シテハ、最節約ヲ加ヘシムルノ必要ヲ認め、同年一月九日、各鎮守府司令長官及ヒ各艦隊司令長官、各要港部司令官ニ對シ、左ノ訓示ヲ下セリ、

本大臣ハ夙ニ英炭貯藏ノ必要ヲ認め各官ト共ニ拮据經營多年ニ涉リタルヲ以テ漸クニシテ各地ノ貯量ニ今日アルヲ致シ一朝警急ノ場合アリト雖モ敢テ甚シキ顧慮ヲ須フルヲ要セサルニ至リタルハ聊各官ト共ニ其ノ喜ヒヲ分ツ所ナルモ然モ是外國品ノ購入ニ過キスシテ

特ニ戰時ニ於テハ所謂禁制品トシテ數ヘラルヘキモノナルカ故ニ一度之ヲ消費スルトキハ必要ノ場合ニ際シ再之ヲ得ルニ難キヲ覺悟セサルヘカラス客年ノ末ニ至リ本大臣ハ軍機第四十二號ヲ以テ各艦ニ若干ノ英炭ヲ搭載セシメタルコトアルモ是全ク對敵行動ノ場合ニ應セシメムカ爲メノ準備ニ外ナラスシテ決シテ之カ使用ヲ平時ニ許シタルノ意ニ非サルハ各官ノ等シク知ル所ナルヘシ各官ハ常ニ此ノ事ニ關シ本大臣ノ意ヲ體シ苟モ節約ノ途ヲ講スルニ怠リナキハ堅ク信スル所ナレトモ目下時局ノ進行ハ漸クニシテ益、英炭ノ使用ヲ促サントスルノ時ニ迫リタルヲ以テ此ノ際各官ハ部下ヲシテ其ノ使途ニ益、深厚ナル注意ヲ加ヘ對敵行動ヲ取ルトキノ外成ルヘク和炭ヲ使用シ英炭ニ對シテハ十二分ノ節約ヲ講スルニ怠リナカラシムル様特ニ諭達スヘシ

而テ之ト同時ニ、同大臣ハ前進地ニ於テ艦艇ノ石炭ヲ補充スルニ當リ、英和兩炭孰レノ需用ニモ應セシメンカ爲メ、各給炭船ニハ其ノ滿載量ノ約二割ハ、必ス和炭ヲ搭載セシメ、既ニ英炭ノミヲ滿載シタルモノハ、之ニ準シテ適宜和炭ヲ搭載セシムヘキ旨、各鎮守府司令長官ニ訓令シ、同時ニ此ノ趣ヲ各艦隊司令長官及ヒ要港部司令官ニ通達セリ、

戰役開始前、東郷聯合艦隊司令長官ハ、麾下ノ驅逐艦ニモ英炭ヲ搭載セシムルノ必要ヲ感シ、同年一月七日海軍大臣ニ之ヲ稟申シ、且驅逐艦ハ、平時ニ於テ日本煉炭株式會社製造ノ煉炭ヲ焚用スルカ故ニ、一朝開戰ニ臨ンテ、始テ英炭ヲ使用セシメンカ、罐ノ汽釀ニ困難ヲ感スルノ虞アルノミナラス、炭庫ノ區劃上、常用炭ト區別シテ之ヲ搭載スルコト、頗ル困難ナルヲ以テ、常用

ニモ英炭ヲ使用セシメント欲シ、請フ所アリシモ、海軍大臣ハ英炭節約ノ趣旨ヲ以テ、之ヲ認許セサリキ、然ルニ同長官ハ、佐世保軍港ニ於テ、石炭ヲ艦艇ニ供給スル速度ヲ查覈シ、驅逐艦及ヒ水雷艇ニモ、前以テ英炭ヲ搭載シ、豫メ準備スル所ナクシテハ、一朝出勤ノ必要ニ際シ、之ヲ積載スルニ少カラヌ時日ヲ要スルヲ以テ、同月十一日、更ニ之ヲ滿載セシメラレシコトヲ電請スル所アリ、是ニ於テ海軍大臣ハ、同月十六日ニ至リテ之ヲ認許シ、平常使用炭ノ外、別區劃ノ炭庫ニ英炭ヲ搭載シ、常用ニハ煉炭ヲ使用スヘキ旨訓令シ、而テ之ト同時ニ、前進地ニ於テ、驅逐艦及ヒ水雷艇ノ石炭ヲ補充スルニ當リ、英煉兩炭孰レノ需用ニモ應セシメンカ爲メ、水雷母艦及ヒ假裝水雷母艦ニハ、補給用滿載量ノ約二割ハ、煉炭ヲ搭載シ置クヘキ旨、各鎮守府司令長官ニ訓令セリ、

三十七年二月、戰役開始セララル、ヤ、我カ聯合艦隊ハ、對敵行動上、概ネ英炭ノミヲ使用スルニ至リシト雖モ、艦隊ノ役務若クハ其ノ性能ニ依リテハ、特ニ英炭ヲ使用セサルモ、敢テ大ナル差支ヲ及サル者アルヲ以テ、海軍大臣ハ、二月十七日、第七戰隊ニ屬スル各艦(扶桑、濟遠、大島、赤城、摩耶、鳥海、宇治、愛宕、筑紫、磐城、海門及ヒ平遠)ハ自今何分ノ儀訓令ニ及フ迄、第二種和炭ヲ使用セシムヘキ旨、片岡第三艦隊司令長官ニ電訓シ、三月八日、假裝水雷母艦及ヒ假裝巡洋艦ハ、自今常ニ和炭ヲ使用セシメ、現ニ此等諸艦ニ搭載シアル英炭ハ、便宜他ノ艦艇ヘ補給セシムヘキ旨、東郷聯合艦隊司令長官ニ電訓シ、尙驅逐艦及ヒ水雷艇ヲシテ、成ルヘク煉炭ヲ使用セシメ、又之ヲ補充スルニ便センカ爲メニ、各給炭船ニモ、便宜煉炭ヲ搭載セシムルコト、爲セリ、

三十八年一月、旅順口ニ在リシ敵ノ艦艇ハ、同要塞ノ開城ト共ニ、總テ爆沈セラレ、黃海々上又敵ノ隻影ヲ認メサルニ至リシヲ以テ、我カ艦隊ヲシテ、高價ナル英炭ヲ使用セシムルノ要ナク、終ニ同月二十一日、海軍大臣ハ聯合艦隊司令長官ニ訓令シテ、當分ノ間艦船ヲシテ、特ニ其ノ必要ヲ認メサル限り、航海用トシテ成ルヘク和炭ヲ使用セシメ、又驅逐艦及ヒ水雷艇ヲシテ、成ルヘク煉炭ヲ使用セシムルコト、爲シ、又旅順口鎮守府艦隊ノ艦船中、水雷艇ニハ煉炭ヲ使用セシメ、其ノ他ニハ第二種炭ヲ使用セシムヘキ旨、同日柴山同鎮守府司令長官ニ電訓セリ、而テ之ト同時ニ、前進地ニ於テ艦隊ノ石炭ヲ補充スルニ當リ、便利ナラシメンカ爲メ、船線上差支ナキ限りハ、給炭船ヲ成ルヘク和炭ト英炭若クハ煉炭トニ區別シ、以テ發送セシムルコト、爲セリ、然ルニ三十八年四月五月ノ交ニ於テ、敵ノ第二太平洋艦隊來東ノ期近ツクニ隨ヒ、我カ艦隊ノ多クハ、又主トシテ英炭ヲ焚用スルノ必要ニ迫リシト雖モ、日本海海戰ニ於テ、敵ノ艦隊ハ殆ト全滅シ、敗餘ノ殘艦又出テ、我ニ抗シ得ルモノナク、我カ艦隊ハ再主トシテ英炭ヲ使用スルノ必要ヲ減シ、且聯合艦隊所屬ノ軍艦ヲシテ、煉炭ノ焚火法ヲ教練セシメ置クノ必要ヲ認メ、同年六月十五日、海軍大臣ハ官房機密第七〇五號ヲ以テ、自今聯合艦隊所屬ノ軍艦ニハ、第一種煉炭(日本煉炭株式會社製)ヲ第二種和炭ト併用セシメ得ル旨ヲ、各鎮守府司令長官及ヒ聯合艦隊司令長官ニ訓令セリ、而テ同大臣ハ、三十八年十月平和克復ノ期漸ク近ツキ、艦艇ヲシテ英炭ヲ補充搭載セシムルノ要ナキニ至リタルモノト認メ、同月九日海軍次官ヲシテ、官房機密第一一八號ヲ以テ、艦艇ニ今後新ニ英炭ヲ搭載セシムルヲ停止シ、同時ニ戰役中若クハ其ノ以前ニ搭載シタル英

炭(補給用ヲ除ク)ニシテ、目下艦艇ニ殘存シアルモノハ、今後航海用トシテ適宜使用セシメ得ル旨ヲ、各鎮守府司令長官及ヒ聯合艦隊司令長官ニ通牒セシメタリ、

第四目 石炭庫

本戦役ヲ通シテ、出征艦隊ニ對スル石炭ノ供給基地ハ、主トシテ佐世保軍港ニ在リシヲ以テ、戦役開始前及ヒ其ノ後ニ於テ、購買シタル英炭ノ如キモ、其ノ大部分ハ之ヲ同軍港ニ陸揚セシメ、常ニ同軍港ニ於ル石炭ノ準備ニ遺憾ナキヲ期シタリト雖モ、戦役開始前ニ於テ、購買ノ手順ヲ爲シタル英炭ハ、三十七年二月ノ初頭ニ於テハ、尙本邦ニ回著スルニ至ラス、開戦ト同時ニ、出征艦隊ニ於ル英炭ノ需用ハ、噸ニ増加セシモ、同軍港ニ於ル供給ハ之ニ伴ハス、大ニ其ノ貯藏額ヲ減少スルニ至レリ、是ニ於テ給炭船ヲ吳軍港ニ回航セシメ、同軍港ニ於テ英炭ヲ搭載セシメ、又横須賀ヨリ、其ノ貯炭ノ一部ヲ佐世保軍港ニ保管轉換セシメタリ、由來各鎮守府ニ於ル石炭庫ハ、平時石炭ノ準備額約二十一万噸ヲ標準トシテ、建設シタルモノニシテ、横須賀ハ五七、三五四噸、吳ハ五四、六〇〇噸、佐世保ハ九四、八五〇噸、舞鶴ハ一六、六九二噸ヲ容ル、石炭庫ヲ有シ、合シテ二十二万三千四百九十六噸ヲ容ル、ニ足ルト雖モ、三十七年四月ノ交ニ至リテ、曩ニ購買ノ手續ヲ爲シタル英炭ハ、續々來著シ始メタルヲ以テ、特ニ佐世保軍港ニ於テハ、既設炭庫内ニ之ヲ收納スルコト能ハス、加フルニ各軍港共ニ、第二種及ヒ第三種炭ヲモ準備貯藏セサルヘカラサルヲ以テ、之ヲ露積スルノ空地ヲモ、恰好ノ處ニ見出スコト能ハサルニ至リシヲ以テ、同年四月一日、海軍大臣ハ、佐世保鎮守府司令長官ニ訓令シテ、同軍港赤

崎ニ面坪一万五千二百坪ノ地均工事ヲ施シ、茲ニ約十萬噸ヲ露積シ、赤崎ニ三萬五千噸、平瀬ニ四萬七千噸ヲ庫納シ得ヘキ石炭庫ヲ建設セシメ、尙之ヲ以テモ、石炭ノ陸揚ニ差支ヲ生スルトキハ、平瀬石炭庫及ヒ海兵團練兵場前石炭庫附近ノ空地ヲ利用シテ、之ヲ露積セシムルコト、爲シ、同年五月、同大臣ハ又舞鶴鎮守府司令長官ニ訓令シテ、建坪六百坪ノ石炭庫ヲ、同軍港ニ増設セシメタリ、

爾後石炭ノ貯量ハ次第ニ増加シ、佐世保軍港ニ於ル空地ハ、官有ト私有トヲ論セス、孰レモ之ヲ利用シテ剩ス所ナク、各種ノ石炭ヲ露積シタリト雖モ、尙揚陸貯藏ヲ要スルモノアリ、同年八月海軍大臣ハ、佐世保鎮守府司令長官ニ訓令シテ、更ニ赤崎ニ面坪一万一千九百四十五坪ノ埋築工事ヲ爲シ、此處ニ一千五百坪ノ容積ヲ有スル石炭庫ヲ建設セシム、

同年十一月、戦局ハ益々發展シテ、敵ノ堅守スル旅順口ハ早晚陥落スルニ至ルヘク、然ルトキハ其ノ後ノ戦局ニ對スル作戰準備トシテ、馬公、青泥窪、函館、基隆及ヒ大島ニ於ル、貯藏炭量ヲ増加スルノ必要ヲ認メ、軍令部長ハ海軍大臣ニ商議スル所アリ、乃チ同大臣ハ之ニ應ジテ、漸次配炭シテ其ノ貯藏額ヲ左項ノ如ク増加スヘキ旨、當該鎮守府司令長官ニ訓令セリ、

	英	炭	第二種炭		英	炭	第二種炭
馬公	五〇〇〇			基隆	三〇〇〇		
青泥窪	一〇〇〇〇		一〇〇〇〇	大島	六〇〇		
函館	五〇〇〇						

三十八年三月、横須賀軍港ニ於テモ、亦石炭ヲ陸揚シテ、之ヲ貯藏スルノ空地ニ狹隘ヲ來シタルヲ以テ、海軍大臣ハ同鎮守府司令長官ニ訓令シテ、軍港内荒井ニ在ル一民有地ヲ買收シ、之ヲ開鑿シテ面坪一千三百八十六坪ノ地均ヲ爲シ、之ニ石炭ヲ露積セシメタリ、

同年五月日本海々戰ニ於テ、我ハ敵艦隊ノ殆ト全部ヲ殄滅シタルカ故ニ、爾後多ク英炭ヲ使用スルノ必要ヲ認メサルニ至リシヲ以テ、艦政本部ニ於テハ、先ツ其ノ當時ニ於ル英炭ノ貯藏量ト、之ヲ收納スヘキ炭庫ノ量トヲ查覈シタルニ、左表ノ如シ、

英炭現存量及ヒ炭庫容積 三十八年六月三十日調

所在地	炭量	炭庫ニ收納シ得ヘキ炭量	所在地	炭量	炭庫ニ收納シ得ヘキ炭量
横須賀	七五、〇六五 <small>噸</small>	五七、三五四 <small>噸</small>	馬公	四、二〇九 <small>噸</small>	二、七五〇 <small>噸</small>
吳	四四、九八四	五四、六〇〇	長崎	五九、〇六三	〇
佐世保	三〇九、二四四	一四七、六五〇	基隆	三、〇〇〇	〇
舞鶴	二一、五三七	二二、一五二	函館	八、七八五	一、三一一
竹敷	四、六七九	二、〇九六	計	五三〇、五六六	二八七、九一三

以上總炭量ノ約一割即チ五万噸ハ、粉炭ナルヘキカ故ニ、之ヲ篩分シテ煉炭ニ改造シ、以テ露積スルコト、セハ、庫納ヲ要スル總額ハ約四十八万噸餘トナルヘキモ、戰局ノ變遷ニ伴ウテ、三十八年下半年中ニ消費スヘキ英炭量ヲ約五万噸ト假定シ、戰役終局ニ於テ、給炭船ヨリ陸揚スヘ

キ同炭量ヲ約二万噸ト見做シ、之ヲ加除セハ、庫納スヘキ炭量ハ、約四十五万噸トナルヘシ、然ルニ既設炭庫ノ容量ハ、合シテ約二十九万噸ニ過キサルヲ以テ、更ニ約十六万噸ヲ收納シ得ヘキ炭庫ノ建設ヲ要スト認メ、艦政本部長ハ之ヲ海軍大臣ニ稟申セリ、是ニ於テ同大臣ハ、同年八月一日横須賀ニ二千坪、吳ニ一千坪、佐世保ニ一万三千坪、各一坪ニ付十噸ノ英炭ヲ收容シ得ヘキ、假炭庫ヲ建設スヘキ旨ヲ、當該鎮守府司令長官ニ訓令セリ、然ルニ横須賀及ヒ佐世保兩軍港ニ於ル炭庫建設敷地ハ、狹隘ニシテ、此ノ訓令ニ據ル總炭庫ヲ建設スルコト不可能ナリシヲ以テ、横須賀ニ在リテハ、内六百坪ヲ大湊要港ニ、佐世保ニ在リテハ、四千七十二坪ヲ長崎舊海軍炭庫敷地内ニ建設方、各兩鎮守府司令長官ノ稟申ニ依リ、海軍大臣ハ何レモ之ヲ認許セリ、(後チ三十九年二月佐世保鎮守府司令長官再上申ニ依リ長崎ニハ三千三百十坪ノ炭庫ヲ建設シ其ノ差七百六十二坪ハ之ヲ佐世保ニ建設セリ)

同年九月海軍々令部ハ、本戰役ノ實驗ニ鑒ミ、今後有事ノ時ニ際セハ、竹敷、馬公及ヒ函館ノ三地點ニハ、直ニ第一種炭ノ蓄積ヲ要ス可キヲ以テ、平時ヨリ相當ノ設備ヲ施シ、若干ノ炭量ヲ貯藏シ置クコトヲ必要トシ、當時蓄積シアル炭量ヲ標準トシテ、各地ニ石炭庫ヲ建設スルノ企畫ヲ爲セリ、即チ左ノ如シ、

	建設スヘキ炭庫容積	現在炭庫容積	總炭庫容積	第一種炭現在量
竹敷若クハ尾崎	二三、〇〇〇 <small>噸</small>	二、〇九二 <small>噸</small>	二五〇、〇九三 <small>噸</small>	二五、〇六四 <small>噸</small>
函館	七、〇〇〇	一、三一一	八、三一一	八、一三五
馬公	二、〇〇〇	二、七五〇	四、七五〇	四、二〇九

又在仁川元露國海軍石炭庫ハ、其ノ敷地ト共ニ之ヲ我カ海軍ノ所屬トナシ、該炭庫ニハ時機ヲ得ハ直ニ第一種炭ヲ貯藏スルコト、シ、尙現ニ基隆臨時貯炭所、及ヒ大島需品支庫ニ貯藏シ置カシコトヲ希望シ、共ニ海軍大臣ニ商議スル所アリシカ、同大臣ハ竹敷若クハ尾崎ニ多大ノ炭量ヲ貯藏スル設備ヲ爲スコト、又函館ニ炭庫ヲ設備スルコトハ、追テ詮議ヲナスコト、爲シ、差當リ現在ノ第一種炭ハ、直ニ他ニ轉送セサルコト、在仁川元露國海軍用石炭庫ヲ、其ノ敷地ト共ニ收用シテ、我カ海軍ノ所屬トナスハ、事情ノ許サ、ルモノアルヲ以テ、時機ヲ見テ詮議スルコト、基隆及ヒ大島ニ在ル第一種炭ハ、當分其ノ儘存置スルコト、爲シ、獨リ馬公ニ於ル炭庫ハ、其ノ商議ニ基キテ増築ヲ爲スニ決シ、幾モナクシテ同所ニ二千噸ノ英炭ヲ收容シ得ヘキ、假炭庫ノ建設ヲ訓令セリ、

本戰役中、各鎮守府需品庫及ヒ支庫等ニ於ル、各種石炭ノ月別貯藏額ヲ示スコト左表ノ如シ、

戰役中各需品庫支庫月末ニ於ル貯炭量 (其一)

炭種 庫名 年別	炭 (噸)																	
	横須賀	吳	佐世保	舞鶴	竹要港敷	馬要港公	長貯炭崎	函支館庫	大水雷團	兵支庫庫	門支司庫	基貯炭隆	仁支川庫	釜支山庫	元支山津庫	大連防備隊	旅順工作廠	計
37—1	29,797	23,838	78,291	2,361	4,903	0	0	0	0	0	0	0	0	26	100	—	—	139,316
2	14,357	20,683	59,074	2,305	4,208	0	0	485	0	0	0	0	600	26	100	—	—	101,838
3	23,972	14,343	84,286	3,805	1,352	0	0	480	0	0	0	0	395	26	100	—	—	128,759
4	24,145	13,032	136,073	13,315	2,441	0	0	480	0	0	0	0	369	26	100	—	—	189,981
5	26,699	13,032	182,946	13,315	5,525	0	0	480	0	0	0	0	369	26	100	—	—	242,492
6	46,950	19,113	206,557	13,315	2,751	0	0	480	1,033	0	0	0	369	26	100	—	—	290,694
7	65,612	24,890	241,524	13,315	1,835	0	29,671	456	1,033	0	0	0	369	26	100	—	—	378,831
8	66,101	53,009	227,009	23,540	3,130	0	29,871	1,150	1,033	0	0	0	369	26	100	—	—	405,338
9	69,500	52,542	209,455	23,190	2,415	0	38,517	1,048	1,033	0	0	0	260	26	100	—	—	398,086
10	69,356	52,535	188,505	23,190	4,318	0	38,425	1,088	1,033	0	0	0	260	26	100	—	—	378,836
11	68,454	51,427	171,006	23,190	1,325	0	38,425	1,560	1,563	0	0	0	260	26	100	1,280	—	358,616
12	67,679	48,389	138,294	23,190	3,412	0	32,895	1,557	1,563	0	0	0	260	26	100	10,458	—	327,823
38—1	60,441	48,069	138,759	23,190	6,414	4,637	32,895	2,287	1,563	0	0	0	260	26	100	10,125	—	328,766
2	55,590	45,753	157,727	22,930	11,288	4,637	31,344	3,387	1,563	0	0	0	260	26	100	10,552	—	345,157
3	55,223	45,671	205,300	22,703	9,616	4,637	31,293	4,487	1,563	0	0	0	260	26	60	10,652	54,450	445,941
4	52,564	38,907	245,484	22,476	16,370	4,823	59,063	4,172	1,556	0	0	3,000	260	17	60	10,652	54,450	513,854
5	48,985	38,567	283,879	22,155	5,132	4,523	59,063	5,490	1,556	0	0	3,000	260	112	442	10,641	54,450	538,255
6	45,065	44,984	309,244	21,537	4,679	4,209	59,063	8,785	1,556	0	0	3,000	260	112	442	10,206	54,450	568,027
7	42,061	44,699	314,028	21,038	25,687	4,209	68,059	9,947	1,526	0	0	3,000	260	112	442	10,206	54,450	599,724
8	40,669	44,630	307,039	21,038	25,425	4,209	68,059	8,342	1,497	0	0	3,000	260	112	442	10,641	54,450	589,813
9	40,519	46,056	306,631	21,727	24,777	4,209	68,059	8,541	3,600	0	0	3,000	260	112	442	10,206	53,940	592,079
10	41,605	46,170	305,739	21,732	24,848	4,209	68,059	8,613	3,316	0	0	3,000	260	112	442	10,206	53,540	591,851

戰役中下ニ掲記スル各炭庫ノ貯炭量ハ甚シキ變動アラサリシヲ以テ本表ニ加ヘス

留別,根室,室蘭,大島,中城灣及ニ各水雷艇炭庫

戰役中各需品庫支庫月末ニ於ル貯炭量 (其二)

炭種 庫名 年月別	煉炭 (噸)																	計
	横須賀 需品庫	吳 需品庫	佐世保 需品庫	舞鶴 需品庫	竹要 港部	馬要 港部	長貯 炭場	函支 館庫	大水 雷園	兵支 庫庫	門支 司庫	基貯 炭場	仁支 川庫	釜支 山庫	元支 山津	大防 備隊	族工 作廠	
37—1	10,663	15,401	6,809	7,257	836	0	0	0	926	0	349	0	0	0	0	—	—	42,241
2	9,639	14,747	9,297	6,878	826	0	0	491	894	0	339	0	0	0	0	—	—	43,111
3	9,500	14,475	10,796	6,609	713	0	0	414	915	0	332	100	0	0	0	—	—	43,854
4	9,435	13,864	14,705	6,599	126	0	0	309	906	0	332	100	0	500	0	—	—	46,876
5	10,558	12,814	12,459	6,599	1,233	0	0	356	906	0	332	100	0	500	0	—	—	45,857
6	12,533	13,624	6,913	6,599	7,285	0	3,202	319	956	0	252	100	0	500	0	—	—	52,285
7	14,969	13,414	6,813	6,599	7,156	0	3,202	284	956	0	134	100	0	500	0	—	—	54,127
8	14,407	13,309	6,958	9,810	7,042	0	3,202	600	906	0	80	100	0	500	0	—	—	56,914
9	14,407	13,259	9,782	11,521	8,466	1,900	3,202	552	892	0	80	100	0	500	0	—	—	64,661
10	14,926	13,273	7,396	12,646	8,466	1,900	3,402	489	883	0	2,885	100	0	500	0	—	—	66,866
11	14,914	13,243	5,789	12,646	8,466	2,150	3,402	405	874	0	3,005	100	0	500	0	1,000	—	66,494
12	14,732	13,117	9,382	12,646	8,466	2,150	2,102	323	877	0	3,000	100	0	500	0	1,000	—	68,395
38—1	14,213	12,970	11,221	12,646	8,301	1,940	2,102	210	877	0	2,995	100	0	500	0	1,000	—	69,075
2	18,412	12,464	10,761	13,800	8,193	1,950	2,102	577	871	0	3,982	100	0	500	0	842	—	73,554
3	18,308	9,979	12,186	14,454	9,027	1,950	2,102	492	871	1,950	2,965	100	0	479	70	933	10,880	86,746
4	16,737	9,786	13,811	14,454	8,609	1,950	2,102	453	1,873	1,916	2,929	100	0	479	20	880	10,880	86,961
5	18,271	9,622	16,062	16,451	8,524	1,950	2,102	948	1,938	1,830	2,723	100	0	534	363	912	10,880	93,210
6	18,282	9,502	17,625	16,058	8,905	1,950	2,102	888	888	1,800	2,696	100	0	534	363	742	10,880	93,315
7	17,814	9,267	19,504	15,393	8,572	1,950	2,102	1,045	1,928	1,789	2,696	100	0	534	363	697	10,880	94,634
8	16,435	9,208	24,106	15,067	8,925	1,950	2,102	801	1,851	1,738	2,696	100	0	534	363	557	10,880	97,313
9	15,319	8,876	27,027	14,847	5,025	1,950	2,102	117	1,692	1,690	2,683	100	500	534	363	546	10,120	93,491
10	13,827	8,508	36,901	14,852	4,782	1,950	2,042	93	1,612	1,383	2,683	100	500	534	363	546	9,846	100,522

戰役中各需品庫支庫月末ニ於ル貯炭量 (其三)

炭種 庫名 年月別	第 二 種 炭 (噸)																	
	橫須賀需品庫	吳需品庫	佐世保需品庫	舞需品庫	竹要港敷	馬要港公	長貯炭崎	函支館庫	大水雷園	兵支庫庫	門支司庫	基貯炭隆	仁支川庫	元支山津庫	大防備灣隊	工工作廠	釜支山庫	計
37—1	8,763	11,758	13,286	14,829	2,094	1,971	0	1,100	0	2,360	59	180	1,589	254	—	—	2,196	60,439
2	5,663	11,511	18,532	14,586	2,429	1,971	0	1,084	0	2,360	59	180	1,474	254	—	—	1,937	62,040
3	5,013	10,463	16,318	14,106	2,552	1,971	0	914	0	2,274	763	180	1,474	254	—	—	1,692	57,974
4	7,302	9,463	17,766	14,104	2,354	1,971	0	801	0	2,274	746	178	1,454	254	—	—	1,692	60,359
5	7,762	9,323	12,282	14,024	2,209	1,971	0	681	0	2,274	746	178	1,454	244	—	—	1,392	54,540
6	7,473	9,023	10,009	13,904	1,877	1,971	0	397	0	2,184	671	178	1,454	244	—	—	1,362	50,747
7	7,385	10,023	21,044	13,824	1,862	1,971	0	117	0	2,184	671	178	1,454	244	—	—	1,192	62,149
8	7,365	10,995	23,489	13,824	987	1,971	0	1,046	0	2,160	599	178	1,454	244	—	—	1,572	65,884
9	6,684	12,743	23,248	12,164	1,242	1,971	0	837	0	2,160	599	178	1,454	244	—	—	962	64,486
10	6,850	13,901	18,439	12,149	887	1,971	0	998	0	2,095	529	178	1,374	244	—	—	526	60,141
11	6,590	15,901	23,642	12,049	1,187	1,971	0	2,034	0	2,095	278	178	1,204	244	2,502	—	712	70,587
12	6,604	15,831	38,210	11,949	1,922	1,971	0	3,891	0	2,067	459	178	1,204	244	9,647	—	712	94,889
38—1	5,454	16,591	53,526	11,739	2,038	1,971	0	3,299	0	1,867	459	178	1,084	244	10,174	—	712	109,303
2	2,716	14,361	56,178	11,329	3,430	1,971	0	2,191	0	1,712	459	178	1,024	244	9,974	—	712	106,479
3	2,210	13,181	69,166	11,067	3,382	2,911	0	1,246	0	1,135	689	178	964	136	9,973	0	712	116,950
4	1,709	10,411	79,018	11,052	3,364	2,911	0	1,000	0	1,102	689	178	944	38	9,973	0	712	123,101
5	1,722	10,811	93,409	14,063	3,592	3,234	0	3,761	0	1,087	522	178	944	291	9,815	0	712	144,141
6	3,235	5,316	98,582	13,468	3,423	3,207	0	3,586	0	1,037	522	178	944	187	8,795	0	712	143,192
7	3,102	7,010	96,929	13,354	2,549	3,297	0	342	0	1,037	527	178	944	135	8,679	0	712	138,795
8	4,357	6,526	92,470	12,534	2,642	3,207	0	2	0	1,037	447	178	944	0	8,400	0	712	133,456
9	5,351	8,680	92,057	12,399	3,701	3,207	0	242	0	977	447	178	944	435	8,275	0	712	137,575
10	3,830	7,096	97,489	11,825	639	3,207	0	4,197	0	796	447	178	944	260	8,275	0	712	139,895

戰役中各需品庫支庫月末ニ於ル貯炭量 (其四)

炭種 庫名 年月別	第三種炭 (噸)																	
	横須賀 需品庫	吳 需品庫	佐世保 需品庫	舞鶴 需品庫	竹 要港部 敷	馬 要港部 公	長 貯炭場 崎	函 支 館庫	大 水 雷團	兵 支 庫庫	門 支 司庫	基 貯 炭場 隆	仁 支 川庫	釜 支 山庫	元 支 山津庫	大 防 備隊 連	旅 工 作廠 順口	計
37—1	256	380	2,165	879	479	1,000	0	0	1,000	0	0	0	0	0	0	—	—	6,159
2	933	3,101	3,847	822	710	1,000	0	0	885	0	0	0	0	0	0	—	—	11,298
3	6,550	5,544	138	3,540	362	559	0	9	805	0	0	482	0	0	0	—	—	17,989
4	6,947	4,613	2,904	2,839	1,393	0	0	236	805	0	0	347	0	0	0	—	—	20,084
5	6,687	4,702	6,033	3,714	501	0	0	685	805	0	0	340	0	0	0	—	—	23,467
6	6,217	3,402	1,060	3,521	1,398	0	0	380	605	0	0	340	0	0	0	—	—	16,923
7	6,362	3,924	1,335	3,593	789	0	0	330	455	0	0	340	0	0	0	—	—	17,128
8	5,592	3,269	1,200	3,407	574	0	0	205	455	0	0	340	0	0	0	—	—	15,042
9	4,857	2,288	8,960	2,697	1,348	0	0	77	455	0	0	340	0	0	0	—	—	21,022
10	4,197	5,187	24,941	2,544	621	800	0	37	455	0	0	240	0	0	0	—	—	39,022
11	3,417	4,678	17,807	2,662	5,554	2,000	0	95	255	0	0	240	0	0	0	250	—	36,958
12	3,956	4,815	15,425	3,692	4,827	2,000	0	245	1,255	0	0	111	0	0	0	1,356	—	37,682
38—1	3,923	6,377	16,984	3,963	4,213	1,940	0	245	1,000	0	0	111	0	0	0	1,649	—	40,405
2	7,413	9,234	13,642	5,062	3,585	1,971	0	195	1,000	0	0	0	0	0	0	2,488	—	44,590
3	7,335	9,264	10,185	6,088	3,618	2,640	0	145	600	0	0	400	0	0	0	2,298	23,473	66,046
4	6,885	8,759	885	6,796	3,170	2,138	0	395	560	0	0	250	0	0	0	3,344	22,538	55,720
5	5,569	7,451	7,330	6,186	1,602	1,688	0	295	560	0	0	250	0	0	173	3,262	21,788	56,154
6	4,023	5,133	6,899	5,706	1,602	3,719	0	195	560	0	0	170	0	0	60	2,117	20,504	50,688
7	3,259	5,402	19,889	5,241	925	4,202	0	342	560	0	0	830	0	0	49	2,452	8,066	51,223
8	2,332	4,615	15,934	4,531	258	3,319	0	22	1,190	0	0	590	0	0	23	2,066	7,440	42,320
9	721	4,391	17,041	4,241	3,186	4,404	0	407	1,455	0	0	590	0	0	566	1,403	7,090	45,495
10	0	3,685	16,165	3,536	3,078	3,457	0	357	1,220	0	0	590	0	0	0	0	0	27,362

第二節 石炭及ヒ液體燃料等ニ關スル講究

第一目 内地産無煙炭等ニ關スル講究

抑戰時ニ於ル艦艇ノ燃料トシテ、其ノ實勢力ヲ顯表スルニ足ル無煙炭ヲ、我カ國土内ニ發見セシコトハ、帝國海軍ノ宿望ニシテ、年來各地炭坑ノ出炭ニ就キ、調査試験ヲ怠ラス、而テ採掘炭ヲ天然ノ儘之ヲ燃料ニ供スルコトヲ得サルモ、艦艇ノ實力ヲ發揮セシムルニ足ル煉炭ノ原料タルヘキモノヲ我カ國土内ニ發見セハ、是ニテモ満足セント欲シ、常ニ其ノ調査ヲ怠ラサリシカ、本戰役中モ亦海軍艦政本部ニ於テハ、各種ノ石炭ニ就キ講究ヲ重ネタリ、明治三十七年二月、旭礦山組合ヨリ、後志國岩内炭坑ヨリ産出スル無煙炭五噸ヲ、我カ海軍ニ獻納シタルニ依リ、海軍艦政本部ハ、海軍造兵廠ヲシテ之カ分析試験ヲ爲サシメシニ、左ノ成績ヲ得、灰分及ヒ硫黃分共ニ甚タ多クシテ、到底軍用ニ不適當ナルヲ證セリ、

後志國岩内無煙炭分析成績

揮發分	固定炭素	灰分	硫黃	計算上ノ蒸發力	揮發分	固定炭素	灰分	硫黃	計算上ノ蒸發力
七、二三	六八、〇二	二四、八五	〇、九四	六、〇〇 _新	七、二九	七三、八二	一六、四	二、五二	六、五 _新

同年四月、越後國頸城郡春日村小瀧炭坑主森本直照ハ、同炭坑ヨリ採掘シタル無煙炭少量ヲ添附シ、海軍ニ於ル煉炭製造ノ原料トシテ、炭坑ノ買上ケヲ出願シタルニ依リ、海軍艦政本部ハ、海軍造兵廠ニ於テ之ヲ分析セシメタルニ、左ノ成績ヲ得嘗テ三十四年二月、海軍艦政本部ニ於テ

調査シタル、同炭ノ成績ト大同小異ニシテ、到底海軍所用ノ煉炭原料ト爲スニ足ラス、後チ其ノ趣ヲ出願人ニ通牒セリ、

越後國小瀧無煙炭分析成績

揮發分	固定炭素	灰分	炭素	水素	酸素及窒素	硫黄	比重	計算上ノ蒸發力
一八、〇七	六六、四	一五、五三	七四、七五	四、五四	四、六七	〇、五二	一、六〇	七、三

同月又後備海軍機關大監宇橋爲久ハ、美濃國武儀郡船伏山ヨリ産出スル所ノ無煙炭ヲ提供シタルニ依リ、海軍艦政本部ハ、海軍造兵廠ヲシテ其ノ分析試験ヲ爲サシメタルニ、左ノ成績ヲ得タリ、本炭ニ就テハ、海軍艦政本部ニ於テ嘗テ三十五年十二月ノ頃、數回分析試験ヲ爲シタルモノニシテ、硫黄分ヲ含ムコト甚タ多ク、到底軍用ニ適セサルヲ以テ、排斥シタルモノニシテ、今回ノ供試品モ、亦著シク多量ノ硫黄分ヲ含有シ、到底軍用煉炭ト爲スニ足ラサルモノト認定セリ、

美濃國船伏山無煙炭分析成績

種別	揮發物	固定炭素	灰分	「コークス」ノ性状	炭素	水素	酸素及窒素	硫黄	比重	計算上ノ蒸發力
第一坑	一一、二八	七二、五八	七、二八	不形成	七七、五五	三、八〇	一、五一	一〇、〇四	一、四八	七、四
第二坑	一〇、六二	七三、四一	六、一七	同	七九、一二	三、三八	一、五三	一〇、〇二	一、四五	七、三

同月又熊本縣人山浦久太郎ナル者、無煙煉炭ノ製造法ヲ發明シ、特許局ノ特許ヲ得テ、是カ製法ヲ我カ海軍ニ於テ採用セラレンコトヲ出願セリ、而テ其ノ願書ノ要領ニ依レハ、山浦久太郎ハ、煉炭ノ原料トシテ無煙炭ヲ使用スルモ、其ノ固結資料トシテ「ピッチ」若クハ樹脂等ノ有煙質ノモノヲ使用セハ、無煙炭本來ノ性質ヲ失ヒ、有煙質ノ煉炭ト化成スルニ至ルヲ以テ、他ノ無煙質ノ固結資料ヲ選ヒテ之ヲ用ヒナハ、完全ナル無煙煉炭ヲ製出スルニ至ルヘシト思考シ、數年間苦辛慘憺ノ後、漸ク是カ製造法ヲ發明シタリト云フニアリ、是ニ於テ海軍艦政本部ハ、海軍造兵廠ヲシテ、先ツ其ノ供試品ニ就テ分析試験ヲ行ハシメ、更ニ出願人ヲシテ、長門國大嶺無煙炭及ヒ肥後國天草島ノ枅ノ水、竝ニ同茂串無煙炭ノ洗濯シタルモノ、及ヒ以上三種ヲ平分混合シタルモノヲ原料トシテ、煉炭ヲ試製セシメ、之ヲ試験シタルニ、左ノ成績ヲ得タリ、是ニ依リテ之ヲ見ルトキハ、煉炭トシテ更ニ何等ノ特異ナル點ヲ發見セサルノミナラス、所謂固結劑トシテ使用スルモノハ、鑛物性ニ非ス、植物ノ液汁若クハ果汁ノ類ニシテ、之ヲ粉炭ニ混和シテ塊狀ト爲シ、煉瓦的ニ蒸熱シテ、煉炭ト爲スカ如ク、到底軍用ト爲スニ足ラサルモノナリシヲ以テ、之ヲ排斥セリ、

山浦久太郎製煉炭分析表

種別	揮發物	固定炭	灰分	「コークス」ノ有様	炭素	酸素及窒素	水素	硫黃	比重	計算上ノ發酸力
提供シタル煉炭	一六、二	六九、八	一四、〇	不形成	七五、二	五、一	四、三	一、四	一、五	七

種別	揮發物	固定炭素	灰分	炭素	酸素及 窒素	水素	硫黄	比重	計算上ノ 蒸發力
山浦製長門煉炭	一四五	七三、〇	一二、五	七七、一	六、三	三、五	〇、六	一、五	六、八
同 柝ノ水煉炭	一五、〇	八九、四	五、七	八二、七	六、一	三、六	二、〇	一、四	七、二
同 茂串煉炭	一五、〇	八一、一	四、〇	八六、一	四、八	四、三	〇、八	一、四	七、八
同三種混合煉炭	一四、八	七九、〇	六、二	八五、六	三、一	三、八	一、三	一、四	七、七

同年五月海軍艦政本部ハ、紀伊國東牟婁郡三津村ヨリ産出スル尾頭無煙炭ノ供試品ヲ得、海軍造兵廠ニ於テ、是カ分析試験ヲ爲サシメタルニ、其ノ成績ハ左ノ如クニシテ、固定炭素甚タ多ク、灰分少量ニシテ、頗ル有望ナルカ如シト雖モ、燃燒不良ニシテ硫黄分甚タ多ク、決シテ優等ナル炭種ニアラサルヲ知レリ、

紀伊國尾頭無煙炭分析成績

揮發物	固定炭素	灰分	炭素	水素	酸素及 窒素	硫黄	比重	計算上ノ 蒸發力
八、六四	八〇、五九	一〇、七七	八三、〇八	二、六九	〇、七九	二、八九	一、五四	七、五

同月高田商會主高田慎藏ハ、羽後國北秋田郡七日市ヨリ産出スル無煙炭ヲ提供シテ、其ノ試験ヲ出願シタルニ依リ、海軍艦政本部ハ、海軍造兵廠ヲシテ是カ分析試験ヲ爲サシメタルニ、左ノ成績ヲ得、稍良好ナルモノト認メラレシヲ以テ、横須賀海軍工廠所屬ノ試験罐ニ於テ、之ヲ試焚セシメタルニ、點火スルコト甚タ容易ナラス、之ヲ燃燒シツ、アル爐内ニ投スルモ、容易ニ著

火セス、漸ク受熱スルニ從ヒ、爆音ヲ發シテ細粒ト爲リ、點々火床ノ棧下ニ落下シ、火力ヲ維持スルコト甚タ困難ナルノミナラス、「クリンカー」ハ溶解性ノモノニシテ、容易ニ火床ノ棧上ニ粘著シ、通風ヲ妨ケ、之ヲ剝脱スルニ困難ヲ感セリ、而テ其ノ量ハ灰分ト併セハ二一%五ニ及ヒ、到底艦艇ノ燃料トシテハ、不適當ナルモノト認メタリ、

羽後國七田市無煙炭分析成績

揮發分	固定炭素	灰分	「コークス」ノ有様	炭素	水素	酸素及窒素	硫黄	比重	計算上ノ蒸發力
一一、二七	八三、〇三	四、七〇	不形成	八八、五三	三、一二	二、七八	〇、八七	一、四四	八、一

同年七月辰巳芳三ナル者、京都府加佐郡岡田下村志高炭坑ヨリ産出セル無煙炭(五尺)ヲ提供シタルニ依リ、海軍艦政本部ハ、海軍造兵廠ヲシテ之ヲ分析セシメタルニ、左表ノ成績ヲ得、灰分量ニシテ、海軍用トシテ到底不適當ナルヲ知レリ、

京都府志高無煙炭分析成績

揮發分	固定炭素	灰分	「コークス」ノ有様	炭素	水素	酸素及窒素	硫黄	比重	計算上ノ蒸發力
一三、〇〇	六六、九八	二〇、〇二	不形成	七一、三五	三、四八	四、四二	〇、七三	一、五一	六、四

而テ三十八年一月、再志高炭坑事務所ヨリ、志高無煙炭ノ粉炭ヲ提供シ來リタルニ依リ、更ニ分

析試験ヲ爲サシメタルニ、塊炭ニ比シ、遙ニ劣等ナル成績ヲ顯セリ、

同年九月尾道市安部政造ナル者、備中國川上郡大賀炭坑ヨリ産出スル無煙炭ヲ提供シタルニ依リ、海軍艦政本部ニ於テハ、海軍造兵廠ヲシテ之カ、分析試験ヲ爲サシメタルニ、左ノ成績ヲ得、比較的佳良ナル炭質ナルヲ知リシヲ以テ、其ノ成績ヲ海軍煉炭製造所ニ交附シ、煉炭原料ヲ講究スルノ資料ニ供セシモ、該炭坑ハ未タ何等ノ設備ヲ爲スニ至ラザリシヲ以テ、戦役中ハ更ニ其ノ講究ヲ進ムルコト能ハザリキ、

備中國大賀無煙炭分析成績

種別	揮發分	固定炭素	灰分	炭素ノ有様	炭素	水素	酸素及窒素	硫黄	比重	計算上ノ蒸發力
第一坑	一四、二三	八三、八六	一、九二	半成「ゴークス」	八八、九七	四、三八	三、八四	〇、八九	一、三二	八、〇
第二坑	一四、七八	八二、四九	二、七三	同	八七、五九	四、四三	四、四三	〇、八二	一、三三	八、〇

是ヨリ先キ三十七年四月在横濱合名會社「エム、ラスベ」商會ハ、英國製煉炭二種（一ハ「アトランチック」印ナリ）各約五噸ヲ提供シ、之ヲ試験シテ軍用ニ供セラレンコトヲ出願シタルニ依リ、海軍艦政本部ハ、之ヲ横須賀海軍工廠ニ回送セシメ、同廠所屬ノ試験罐ニ於テ試験セシメタルニ、次ノ成績ヲ得タリ、

炭種	石炭一噸ニ於テ攝氏百度ニ於テ蒸發水量	灰	「クリンカー」	炭種	石炭一噸ニ於テ攝氏百度ニ於テ蒸發水量	灰	「クリンカー」
「アトランチック」印	一〇、七	七、四	六、六	「アンカー」印	一一、二	八、八	四、〇

即ち兩種共灰及ヒ「クリンカー」ノ量ハ、稍多量ノ感アリト雖モ、發煙稀少ニシテ、蒸發力ハ普通ノ英炭ト比較シテ殆ト大差ナク、大體ニ於テ良好ナル燃料タルヲ失ハサルカ如シ、然ルニ戰役中艦艇ヲシテ實地ニ之ヲ試焚セシムルノ機會ナク、又戰役中之ヲ購買スルノ必要ヲ認メザリシヲ以テ、單ニ試焚ノ成績ヲ「ラスベ」商會ニ交附シ、且我カ海軍ニ於テハ之ヲ購入スルノ希望ナキ趣ヲ通告セリ

第二目 滿韓及ヒ樺太ニ産出スル石炭ノ講究

海軍艦政本部ハ、本戰役中、滿韓及ヒ樺太方面ニ於テ、我カ軍ノ占領地區ニ在ル炭礦ヨリ産出スル石炭ニ就テ、怠ラス調査ヲ爲セリ、

第一款 煙臺炭

明治三十七年九月、我カ陸軍ハ遼陽附近ニ激戰シテ、煙臺炭礦ヲ占領スルヤ、海軍艦政本部ハ、同炭坑ヨリ産出スル石炭ノ性狀ヲ調査セント欲シ、同年十月十六日、大連灣防備隊司令官海軍大佐坂本一ニ依囑シテ、煙臺炭ヲ上下兩層ニ區別シ、各種約十疋宛ヲ送附セシコトヲ求メタリ、然ルニ同炭坑ハ占領當時坑内ニ侵水シアリテ、容易ニ採掘ニ著手スルコトヲ得ス、嘗テ上下兩層ニ區別シテ供試品ヲ採ルコト能ハス、止ムナク嘗テ敵側ニ於テ採掘シテ、坑外ニ堆積シタルモノヨリ採取シテ、送附シ來レリ、是ニ於テ海軍艦政本部ハ、海軍造兵廠ヲシテ其ノ分析試験ヲ爲サシメシニ、左ノ成績ヲ得タリ、

煙臺炭分析試験 (海軍造兵廠試験)										
揮發物	固定炭素	灰分	「コークス」ノ模様	炭素	水素	酸素及窒素	硫黄	比重		
一三、六四	七四、七四	一一、八九	非生「コークス」	七九、九〇	三、七九	三、七九	〇、四三	一、五〇		

此ノ後武田臨時海軍煉炭製造所長ハ、同煉炭製造所ニ於テ、煙臺炭ヲ分析シ、左ノ成績ヲ得タリ、

煙臺炭分析試験 (臨時海軍煉炭製造所試験)										
種別	揮發物	固定炭素	灰分	「コークス」ノ性状	硫黄					
煙臺大礮炭	一五、八三	七一、九五	一一、二二	生「コークス」	一、二二					
同手洗セシ分	一四、九一	七六、一四	八、九五	同						
同比重分セシ分	一四、八四	七七、三一	七、八五	同						〇、九九

元來灰分多キ長門炭ノ調合用トシテ、煙臺炭ヲ用フルハ到底不適當ナリト爲シタリト雖モ、元ト恰好ノ稀煙炭ニシテ、可ナリ餅塊性ヲ有シ、單獨之ヲ煉炭ニ製造セハ、相當ノ製品ヲ得ヘキモノト認メ、三十八年九月七日、同炭約千噸ヲ以テ煉炭ヲ試製センコトヲ、岩崎海軍艦政本部第二部長ニ提言セリ、蓋我カ陸軍ニ於テ、煙臺炭坑ヲ占領シタル以來、汽車用トシテ之ヲ採掘セシモ、燃燒困難ニシテ、同用炭トシテハ甚タ不適當ナリトノ評ヲ受ケ、後手撫順炭坑ヲ占領スルニ

及ンテ、其ノ採掘ニ著手シ、遙ニ優良ナル石炭ヲ得ルニ至リシヲ以テ、前ニ採掘シタル煙臺炭約千噸ハ、徒ラニ坑外ニ堆積シテ、陸軍ニ於テハ、差當リ何等ノ用途ナキモノニ屬セリ、是ニ於テ海軍艦政本部ニ於テハ、在大連鐵道提理部等ニ交渉シテ、其ノ讓受ヲ求メシモ、時將ニ還送陸軍兵ノ大輸送ヲ開始セントスルニ際シ、到底多額ノ同炭ヲ輸送スル能ハス、辛ウシテ同炭約十四噸ヲ得タルヲ以テ、海軍艦政本部長ハ、同年十月十三日臨時海軍煉炭製造所ヲシテ、先ツ之ヲ以テ煉炭ヲ試製セシメタリ、而テ武田同所長ハ其ノ製出シタル煉炭ニ關シ、左ノ如ク其ノ所見ヲ報告セリ、

煙臺炭ヲ以テ製シタル煉炭ニ就キ武田臨時海軍煉炭製造所長ノ所見

此ノ試験ニ供シタル煙臺炭ハ粉末多ク其ノ全部ハ殆ト粉炭ニ近キモノニシテ揮發物百分ノ十五有餘ヲ有スル稀煙炭ナリ是恐ラクハ同炭坑中ノ大礫炭ト呼稱スルモノナラン本炭ハ餅塊性良好ニシテ灰ノ耐火性亦可ナルヲ以テ塊炭ノ儘燃料ニ適シ煉炭製造材料トシテ成績佳良ナルヘシト思惟セシカ灰分豫想外ニ多クシテ篩分シタル小粒炭ト雖モ試焚ノ灰分ハ百分ノ二十三ニ達シ(但分析ノ灰分ハ百分ノ十二ニ)單獨煉炭トシテ試焚シタル灰分ハ實ニ百分ノ三十二、六ニ及ベリ此ノ故ニ甚シク固定炭素ノ量ヲ減却シ蒸發力ノ點ニ於テ大ニ劣レルヲ見ル蓋此ノ種ノ粉炭ハ之ヲ洗淨セハ或ハ灰分除却ノ成績良好ニシテ其ノ面目ヲ一新スルニ足ランカト思考スレトモ當所ヘ受納シタル量額僅少ナリシカ爲メ尙進ミテ諸種ノ試験ヲ實施シ得サリシハ遺憾トスル所ナリ

第二款 撫順炭

明治三十八年三月、我カ陸軍ハ奉天附近ニ激戦シテ、撫順炭礦ヲ占領スルヤ、海軍艦政本部ハ同炭坑ヨリ産出スル石炭ノ性状ヲ調査セント欲シ、坂本大連灣防備隊司令官等ニ交渉シテ、是カ供試品ノ送附ヲ求メタリ、而テ同年五月、一ハ陸軍省ヨリ、一ハ大連灣碇泊場司令部ニ在ル海軍中佐山口九十郎ヨリ、供試品ヲ得タルヲ以テ、海軍造兵廠ヲシテ之ヲ分析セシメタルニ、左ノ成績ヲ得タリ、

撫順炭分析成績		(海軍造兵廠試験)						
揮發物	炭固定素	灰分	炭素	水素	酸素及窒素	硫黄	比重	計算上ノ熱發力
陸軍省ヨリ同附ノ分	三九、八	五七、二三	二、九七	七四、七八	五、六三	一五、七四	〇、八八	一、二八
山口中佐同附ノ分	三九、五四	五八、〇二	二、四四	同	七五、七五	五、三三	一五、六五	〇、八三
								一、二七
								七、三

此ノ後武田臨時海軍煉炭製造所長ハ、同煉炭製造所ニ於テ、撫順炭ヲ分析シ、左ノ如キ成績ヲ得、灰分ハ極テ少量ニシテ、而モ其ノ性状ハ餅塊性ニ富ミ、長門無煙炭ヲ以テ製造スル煉炭ノ調合用トシテハ、無上ノ好材料ナル旨ヲ報告セリ、

撫順炭分析成績

(臨時海軍煉炭製造所試験)

種別	揮發物	固定炭素	灰分	「コークス」性状	硫黄
撫順硬炭	五六・五一	四〇・九三	二・五六	生「コークス」	〇・六四
同 盤上三尺層	四三・六七	五四・〇八	二・二五	同	〇・八八
同 硬炭下五尺	四八・四〇	四九・五二	二・〇八	同	〇・六〇
同 硬炭上層	四四・三六	五三・七六	一・八八	同	〇・六五

而テ武田臨時海軍煉炭製造所長ハ、灰分多キ長門炭ニ撫順炭ヲ混合シテ、先ツ煉炭ヲ試製セント欲シ、同年九月十七日同炭約三百噸ノ回附ヲ得シコトヲ、岩崎艦政本部第二部長ニ要請セリ、是ニ於テ海軍艦政本部ニ於テハ、在大連鐵道提理部等ニ交渉スル所アリシモ、時將ニ還送陸軍兵ノ大輸送ヲ開始セントスルニ際シ、到底多額ノ同炭ヲ輸送スル能ハス、辛ウシテ同炭約十三噸ヲ得タルヲ以テ、海軍艦政本部長ハ、同年十月十三日臨時海軍煉炭製造所ヲシテ、先ツ之ヲ以テ煉炭ヲ試製セシメタリ、而テ武田所長ハ、其ノ製出シタル煉炭ニ關シテ、左ノ如ク其ノ所見ヲ報告セリ、

撫順炭ヲ以テ製シタル煉炭ニ就キ武田臨時海軍煉炭製造所長ノ所見

撫順炭ハ炭質堅硬ナル有煙炭ニシテ揮發物比較的多ク餅塊性亦良好ナリト言フヲ得スト雖モ灰分ハ概シテ僅少ニシテ其ノ質耐火性ナルカ故ニ平壤炭若クハ長門炭ノ如キ無煙煉炭ノ調合用トシテハ洗炭ノ勞ヲ要セスシテ而モ依然灰ノ耐火性ヲ維持スル點ニ於テ頗ル良好ノ成績ヲ得ヘシ然レトモ前述ノ如ク揮發物多量ナル爲メ稍發煙ヲ多カラシムルト餅塊性ヲシテ甚シク増進セシムルコト能ハサルトハ本炭ノ瑕瑾トスル所ナリ

當製造所ニ於テハ四分ノ一乃至三分ノ一ノ撫順炭ヲ平壤炭ニ配合シテ煉炭ヲ製造シ分析
及ヒ焚火試験ヲ行ヒシニ第二種炭トシテハ優ニ艦艇ノ需用ニ適スヘキヲ認識セリ

第三款 樺太炭

明治三十八年七月、我カ北遣艦隊ハ陸軍樺太上陸軍ト相策應シテ、アレキサンドルフスキー一
帶ノ海岸ヲ占領スルヤ、第三艦隊司令長官海軍中將片岡七郎ハ、第三艦隊機關長海軍機關大監
下條於菟丸ヲシテ、露國「マコフスキー」會社ノ經營セルモカヂ炭坑ヲ視察セシメ、又第四艦
隊司令長官海軍中將出羽重遠ハ、第四艦隊機關長海軍機關大監伊東茂治ヲシテ、同會社ノ經營
セルウエードスカヤ炭坑ヲ視察セシメ、其ノ報告ヲ徵シテ共ニ之ヲ山本海軍大臣ニ進達セリ
(備考文書第一號)是ニ於テ海軍艦政本部ハ、此等樺太炭ニ就キ調査スル所アラントシ、北遣艦隊ニ
及ヒ第二號參照) 交渉シテ、新「ムカヂ」、下「ムカヂ」、「ジーエ」炭各一噸及ヒ「ウエードスカヤ」炭約一噸半ヲ得タル
ヲ以テ、同年九月横須賀海軍工廠ニ於テ試焚ヲ爲シ、且海軍造兵廠ニ於テ之カ分析試験ヲ施行
セシメ、左ノ成績ヲ得タリ、

樺太炭分析成績										
炭種	揮發物	固定炭	灰分	炭素	水素	酸素及窒素	硫黃比	比重	計算上ノ揮發力	「ゴークス」ノ模倣
新「ムカヂ」	三九、九二	五二、〇三	八、〇五	七一、八七	五、四四	一四、二七	〇、三七	一、二九	七、二	半生「ゴークス」
下「ムカヂ」	三九、七一	四九、四四	一〇、八五	六八、六五	五、五五	一四、五七	〇、四二	一、三四	六、九	同

「ツ」	三一、六三	六二、二八	六、〇九	八〇、〇八	五、八四	七、五三	〇、四六	一、三〇	八、一	同
「ウエードスカヤ」	二八、二八	六三、五一	八、二一	七七、九七	五、五五	七、五七	〇、七〇	一、二八	七、九	生 「ゴークス」

樺太炭試焚成績

炭種	蒸發力	灰	「クリンカー」	灰及ヒク リンカー 總量	炭種	蒸發力	灰	「クリンカー」	灰及ヒク リンカー 總量
新「ムカヂ」	七、二四〇	八、九〇	四、三〇	一三、三〇	「ツ」	九、六一六	三、三七	三、三七	六、七四
下「ムカヂ」	七、八九三	八、〇八	五、三三	一三、四一	「ウエードスカヤ」	七、八〇一	五、九〇	四、二〇	一〇、一〇

此ノ試験ノ結果ニ徴スルニ、アレキサンドルフスキー附近ニ産出スル石炭ハ、揮發分多量ナル有煙炭ニ屬シ、優良ノ炭種ト認メ難ク、其ノ蒸發力ノ如キモ、單ニ這般ノ成績ノミヲ以テ、其ノ優劣ヲ決定スル能ハスト雖モ、全般ヨリ之ヲ打算セハ、「ツ」エ炭ハ我カ小松炭ノ上ニ位シ、兩種ノ「ムカヂ」及ヒ「ウエードスカヤ」炭ハ、共ニ小松炭ノ稍下位ニアルモノト認定セラル、

第四款 平壤炭

韓國平壤ノ無煙炭田、及ヒ其ノ炭質ニ關シテハ、未タ十分精確ト認ムルニ足ルヘキ調査、及ヒ試験ヲ遂ケタルコトナク、從テ其ノ含量及ヒ採炭事業ノ難易、若クハ軍用第一種炭トシテノ適否ニ關シテハ、今後之ヲ精査研究シタル上ニアラサレハ、確言スルコトヲ得スト雖モ、曩ニ命ヲ受ケテ是カ概略ノ調査ヲ遂ケタル摩耶機關長ノ報告ニ據ルモ、又ハ海軍造兵廠ニ於テ爲シタ

ル各種平壤炭分析ノ成績ニ徴スルモ、之ヲ煉炭ニ製スレハ、精良ノ軍用燃料タラシムヘキ見込アリ、先年我カ海軍省ニ於テ、是カ採掘權ヲ取得スルノ詮議ヲ爲シ、當時支障アリテ之ヲ中止シタルコトアリ、然ルニ本戰役ニ於テ、大本營ヨリ派遣シタル専門技師ノ同炭田ニ關スル報告ニ據ルニ、炭量ニ就テモ亦頗ル有望ナルヲ以テ、齋藤海軍艦政本部長ハ、三十八年一月二十九日本海軍大臣ニ上申スルニ、平壤炭田全部ニ對シテハ時局ヲ利用シテ軍事的占領ヲ執行シ、採掘權ヲ我ニ收得スルト同時ニ是カ調査ヲ繼續シ、果シテ炭量モ豊富ニシテ、精良ナル煉炭ノ原料タルコトヲ確認セハ、永久之ヲ所有スルノ實效ヲ收メハ、國家ノ大ナル利益ナリトノ意見ヲ以テシ、且此ノ意見ニシテ採用セラルレハ、機關官一名、礦山技師及ヒ同技手各一名ヲ平壤ニ派遣シテ、占領スヘキ區域ヲ定ムルト共ニ、各坑ヨリ見本炭ヲ採取シ、之ヲ分析ニ附シタル後、其ノ成績ニ準シ、煉炭ヲ試製スルニ要スル原料ヲ採掘セシメ、之ヲ試驗シテ以テ將來ノ方針ヲ定ムヘク、或ハ第一種軍用炭ニ適セストスルモ、鐵道機關車用トシテ、十分適當ナル煉炭ヲ得ルノ見込アル旨ヲ副申セリ、

然ルニ平壤炭田ハ、曩ニ佛國政府、否ラサル迄モ少クトモ佛國人ノ或者ト韓國政府トノ間ニ一種ノ關係ヲ有スル趣ナリシヲ以テ、山本海軍大臣ハ、韓國公使館附武官海軍少佐吉田増次郎ヲシテ、其ノ關係ノ有無及ヒ程度、竝ニ我カ海軍ニ於テ軍事上必要地點トシテ、同炭田ヲ收容スルニ必要ナル條件等ヲ調査セシメ、且煉炭試製ノ原料トシテ、竊ニ平壤炭數噸ヲ購入シ、之ヲ内地ニ送附スヘキコトヲ同武官ニ命セリ、

三十八年九月、海軍艦政本部ニ於テハ、吉田韓國公使館附武官ヨリ、平壤古防山及ヒ石浦炭合シテ約十噸ノ送附ヲ得タルヲ以テ、臨時海軍煉炭製造所ヲシテ、之ヲ煉炭ニ試製セシメ、以テ其ノ成績ニ關スル報告ヲ徵セリ、即チ武田煉炭製造所長ノ提出シタル平壤炭ニ關スル報告ハ、左ノ如シ、

平壤炭ニ關スル武田臨時海軍煉炭製造所長ノ所見

韓國平壤炭中今回試験シタル古防山ノ如キハ灰分比較的僅少ニシテ固定炭素量多キモ餅塊性ニ乏シク天然ノ儘ニテハ燃燒困難ナリ然レトモ此ノ種無煙炭ニ適合スヘキ餅塊性ニ富メル石炭ヲ調合シテ煉炭ニ製造セハ或ハ最上英炭ニ比シ劣ル所アルヘキモ優ニ好良ノ稀煙燃料ヲ製出シ得ヘキモノト認ム而テ發煙及ヒ燃燒ノ狀態共ニ甚タ佳良ナリ

別紙試焚成績ニ於テ英塊炭及ヒ英粉炭製煉炭ニ比シ蒸發力ノ僅少ナルハ調合炭ノ未タ以テ適良ナラサルト且不洗ノ儘製造シタルニ起因スルモノニシテ若シ之ヲ洗滌シタル上層其ノ製法ニ研究ヲ加ヘ最適合シタル調合炭ヲ發見スルニ至ラハ尙其ノ品質ヲ改良スルノ餘地アルヲ信ス

今回供試ノ爲メ下附セラレタル炭量ハ其ノ量過少ニシテ細密ナル各種ノ試験ヲ施行スル能ハサリシヲ遺憾トス而テ僅ニ一二回ノ試焚ノ成績ヲ以テ細密ニ英炭ニ比較シ數字上ノ效力ヲ示ス能ハスト雖モ所見ノ大要ハ上陳ノ如シ

本職ノ所見ヲ以テスレハ上述ノ如ク其ノ英炭ニ比シ品質比較ノ程度ハ別トシテ優ニ良好

ノ燃料タラシムヘキ見込アルモノナルヲ以テ此ノ際之ヲ我カ海軍ノ所有ト爲シ長門無煙炭礦ノ豫備炭礦タラシムルヲ以テ最安全ニシテ策ノ得タルモノト信ス若シ夫之ヲ直ニ採掘スルト否トノ問題ニ至テハ其ノ成績非常ニ良好ニシテ英炭ヲ凌駕スル底ノモノナラサル以上ハ長門炭礦ノ經營ヲ創始セル今日急ニ其ノ必要ヲ見サルモノト思惟ス

石浦炭ハ分析ノ結果灰分稍多量ナルカ故ニ當所洗炭機械ノ不日完備スルヲ待テ煉炭ヲ試製シ試験ヲ行フヘシト雖モ其ノ品質ノ見込ニ至テハ之ヲ洗滌セハ古防山ト大差ナク煉炭原料トシテ良好ノモノト認ム

(別紙)

平壤炭ヲ以テ試製シタル煉炭ト英炭トノ比較成績

種 別	試 成		績		分 析		成 績
	石炭一冠ニテ攝氏百度ニ於ル蒸發水量%	「グリシカー」ノ量%	灰及ヒ「クリシカー」ノ量%	固定炭素	揮發物	灰	
平 壤 (古防山)	六六、六六六	七、六八	一、二三	七、三	七〇、五一	二〇、七八	八、七一
撫 順	三三、三三三	七、六八	一、二三	七、三	七〇、五一	二〇、七八	八、七一
「ピ」	一一、七六	七、六八	一、二三	七、三	七〇、五一	二〇、七八	八、七一
手 撰 英 炭	八、五九	〇、五九	五、五八	八〇、二八	一六、一三	三、六九	三、六九
「英」粉 炭	九二、八八	八、八八	一、七三	五、八五	七三、七〇	一九、三七	六、九一

編者曰ク平壤古防炭山ノ供試品ハ其ノ質軟弱ニシテ極テ細粉ト爲リ易ク普通量ノ「ピ」ヲ以テ之ヲ固結セシム

ルコト能ハス爲メニ稍多量ノ「ピッチ」ヲ使用シタリト云フ而テ此ノ試験ヲ爲シタル罐ハ煉炭製造所備附ノ百二十馬力宮原式水管罐ニシテ其ノ効率ハ良好ナラス爲メニ石炭ノ蒸發力ハ其ノ固有ノモノヨリモ稍低度ヲ示スヲ常トスト云フ

是ヨリ先キ吉田韓國公使館附武官ノ内偵シタル所ニ依レハ、平壤炭田ハ元來韓國帝室ノ所有ニ屬シ、内藏院ハ資本主トシテ、嘗テ佛國人某ニ其ノ採掘及ヒ煉炭製造等ノ事業ヲ一任シアリシモ、收支償ハサルヲ以テ、三十八年四月之ヲ解約シ、又韓人閔永喆ト稱スルモノ、組織シタル豐準會社ナルモノアリテ、三登附近ニ礦山採掘權ヲ有シ、米國人某ヲ雇聘シテ、石炭及ヒ石油ヲ採掘セント欲シ、之ニ要スル機械ヲ準備シ、土工ヲ起サントスト云フ、斯ノ如ク本炭坑ハ韓國帝室ノ所有ニ屬シ、且外國人トノ關係モアルヲ以テ、海軍大臣ハ暫ク其ノ形勢ノ成行ヲ觀望スルニ如カスト爲シ、齋藤海軍次官ヲシテ、外務次官ニ平壤炭田收用ニ關スル海軍ノ意嚮ヲ通牒セシメ、且將來其ノ成行ニ注意シテ、收用ノ機會ヲ逸セサル様、其ノ向ニ對シテ内訓セラレンコトヲ求メシメタリ、斯テ平和克復時ニ至ル迄、同炭田收用ニ關シテハ何等ノ發展ヲ見サリキ、

第三目 液體燃料ニ關スル講究

第一款 瓦素林

明治三十七年六月、帝國海軍ニ於テ、米國電氣艇會社製造ノ潛航艇ヲ採用スルノ議ヲ決スルヤ、同艇ハ、極テ蒸發シ易キ瓦素林ヲ其ノ機關ノ原動力トシテ使用スルモノナルカ故ニ、海軍艦政本部ニ於テハ、艦營需品ノ一トシテ、多量ノ瓦素林ヲ各軍港ニ貯藏セントスルニハ、極テ慎重

ナル調査ヲ爲シ、以テ之カ倉庫ノ設計ヲ爲サ、ルヘカラスト爲シ、直ニ各方面ニ就テ之カ調査ニ著手シタリ、乃チ三十七年十一月、同濟航艇ノ船材横須賀軍港ニ到着スルト同時ニ、之カ組立ノ監督トシテ、米國電氣艇會社ヨリ派遣シタル技師ニ就テ、米國ニ於ル瓦素林貯藏ノ方法ヲ調査シタルニ、米國「スタンダード、オイル」會社ノ製油所ニ於テハ、之ヲ鐵製「タンク」ニ容レ、外部ハ木板ヲ以テ包圍シ、日光ノ直衝ヲ防キテ、之ヲ冷涼ナル處ニ保有シ、地方ニ送ルニハ五十二「ガルロン」入ノ火酒樽ニ似タル「カスク」ヲ用ヒ、時トシテハ十「ガルロン」入ノ鐵製罐ヲ用フト云フ、而テ電氣艇會社ニ於テハ、嘗テ「タンク」内ニ瓦素林ヲ貯藏シタルコトアルモ、火災保險會社等ヨリ、其ノ貯藏法ノ不完全ナルヲ詰責セラレ、爾來平地ヲ約四尺ノ深サニ掘リテ、「カスク」ヲ容ル、ニ足ル幅ヲ有スル溝濠ヲ作り、上方ニ木板ヲ置キ、尙其ノ上ニ土塊ヲ掩ヒテ日光ノ直衝ヲ防キ、溝底ヲ斜面トシテ一方ニ入口ヲ置キ、五十二「ガルロン」入ノ「カスク」ヲ一列ニ竝置シ、常ニ五十乃至百樽ヲ貯藏スト云フ、而テ同技師ハ横須賀軍港ノ如キ、山腹ヲ掘鑿シタル所多キ場所ニ在リテハ、容易ニ穴倉ヲ構成シ得ヘキヲ以テ、瓦素林ノ貯藏所トシテハ、最適切ナル好地形ナリトシ、若シ又急ヲ要スル場合ニハ、既成ノ「トンネル」ヲ利用シ得ヘシト爲セリ、三十八年二月、海軍艦政本部ハ、在横濱「インターナショナル、オイル」會社ニ就キ、同社ニ於ル瓦素林ノ貯藏法ヲ調査シタルニ、同社ハ越後産油ヨリ瓦素林ヲ蒸溜シツ、アルモノニシテ、直江津製油所ニ於テハ、之ヲ「タンク」内ニ貯藏スルモ、同所ヨリ之ヲ輸出スルトキハ、十「ガルロン」入ノ亞鉛鍍ノ鐵罐(厚サ線斗二十乃至二十一、高サ二十七吋、直徑十吋ノ長圓筒形)ニ入レ、横濱ニ於テハ煉瓦造普通ノ石油倉庫内ニ之ヲ格

納セリ、
又三井物産會社ノ紐育支店ヲ介シテ、米國電氣艇會社ニ就キ、米國海軍ニ於ル瓦素林ノ貯藏法ヲ調査シタルニ、同海軍ニ於テハ氣密ナル「タンク」ニ容レテ、之ヲ船舶ノ上甲板ニ置クヲ常トシ、「タンク」ハ臺上ニ載セテ、上甲板トノ間ニ小間隙ヲ存セシメ、以テ萬一「タンク」ヨリ瓦素林ヲ漏洩スルコトアルモ、容易ニ之ヲ發見シ得ル様ニ爲シ、且火災起リタルトキ、容易ニ之ヲ海中ニ投棄シ得ルノ大サト爲セリ、

而テ又海軍艦政本部ニ於テハ、造船監督官トシテ英國ニ在リシ海軍機關中監藤井光五郎ヲシテ、同國海軍ニ於ル瓦素林貯藏法ヲ取調ヘシメタルニ、同海軍ニ於テハ、外面ニ水ヲ流通セシムルヲ得ル「タンク」ニ容レテ船舶内ニ貯藏シ、其ノ「タンク」ニ附屬スル入管及ヒ氣拔管ノ口端ニハ、微細ナル針金網數層(約四分ノ一時乃至二分ノ一時ヲ距テ、二三層ヲ展スルヲ良トス)ヲ展シテ、以テ安全燈ノ作用ニ等シク、火氣ノ「タンク」内ニ通スルヲ防カシムト云フ、而テ同海軍ニ於ル當事者ノ意見ニ依レハ、陸上ニ多量ノ瓦素林ヲ貯藏セントセハ、隔絶シタル地區ニ於テ、成ルヘク低地ニ通風佳良ナル家屋ヲ、鐵材及ヒ石材ヲ以テ建造スルヲ可トス、而テ萬一火災ニ罹リタルトキ、瓦素林ノ附近ニ氾濫スルヲ防禦スル爲メ、同倉庫ノ四圍ニ、貯藏量ノ全部ヲ入ル、ニ足ル溝濠ヲ掘鑿シ置クヲ、最安全ナリト爲セリ、

是ヨリ先キ三十八年二月十九日、齋藤海軍艦政本部長ハ、極テ危險ナル性質ヲ有スル瓦素林ヲ陸上ニ貯藏スル倉庫ヲ、永久的ニ設備セントスルニハ、從來我カ海軍ニ於テ、嘗テ經驗ヲ有セサ

ルトコロナルカ故ニ、是カ設計等ニ關シ、遽ニ斷案ヲ下シ難シト認メタルニ依リ、三十八年二月十九日、海軍大臣ニ向ヒテ、横須賀鎮守府司令長官ノ指揮下ニ、瓦素林貯藏法調査委員ヲ編成セシコトヲ稟申セリ、是ニ於テ海軍大臣ハ、横須賀海軍工廠長海軍少將伊東義五郎ヲ同委員長ニ任命シタルヲ以テ、海軍艦政本部長ハ、同委員長ニ、我カ海軍ニ採用スヘキ瓦素林ハ、米國若クハ本邦産原油ヨリ蒸溜セルモノニシテ、「ボーム」七十二乃至七十四ノ比重ヲ有スルモノナルコト、又格納ヲ要スル瓦素林ノ最大量額ハ約五萬「ガロン」ナルコトヲ指示シ、調査事項ヲ左ノ如クナリト通牒セリ、

調査事項

- 一、瓦素林格納ニ適應スル倉庫ノ構造及ヒ之ニ伴フ設備
- 二、右倉庫建設ノ位置選定ニ要スル條件(軍港内ニ建設スルモノトシ)
- 三、一個所ニ格納シ得ル瓦素林油ノ最大量額
- 四、危険ニ對スル豫防方法
- 五、瓦素林油容器ノ選定

同年三月二十日、伊東該調査委員長ハ委員會ノ決議ヲ經テ、第一回報告トシテ海軍大臣ニ復申セリ、其ノ要領左ノ如シ、

第一、格納ニ適應スル倉庫ノ構造及ヒ之ニ伴フ設備ノ調査

(一)十分ナル自然通風ヲ與ヘ且太陽ノ熱ヲ内部ニ及サ、ル爲メ墜道ヲ以テ倉庫ニ充ツル

コト

(二)山腹ニ横ニ穿テル穴倉ヲ造リ倉庫内部ノ周圍ニハ煉瓦ヲ積ミ其ノ空氣ノ流通ヲ十分ナラシムルコト

(三)煉瓦造リ(二重ニ四周ヲ圍ミタル)ノ倉庫ヲ建造シ屋根ハ「スレート」ヲ用ヒ空氣ノ流通ヲ十分ナラシメ成ルヘク太陽ノ熱ヲ内部ニ及サ、ル如クスルコト

右(一)(二)(三)ノ一ヲ選フコト、シ(一)ヲ最(長ト認ム)左ノ要領ニ基キ設備ヲ要ス

(c)庫内ニ瓦素林罐ヲ置ク所ニハ激衝ノ爲メ引火ノ恐れナキ木材ヲ以テ床ヲ設ケ又發生瓦斯ヲシテ床下ニ沈澱セシムル爲メ所々ニ適當ノ孔ヲ設クルコト

(b)各倉庫ノ中間ニ土塀ヲ設ケ又穴倉ノ場合ニ於テハ入口ニ直接太陽ノ熱ヲ射入セシメサル爲メ土塀ヲ設クルコト

(c)庫内ニハ防護シアリテ引火ノ恐れナキ電燈ヲ設クルコト

(d)庫内及ヒ附近ニ「レール」ヲ敷クコトヲ避ルコト

第二、倉庫建設位置ノ調査

(一)成ルヘク海岸ニ近ク運搬船ニ積入レノ便利ナル位置ヲ要シ又火氣ニ遠キ位置ヲ選ハサルヘカラス

(二)太陽ノ熱ヲ受クルコト強カラサル位置ヲ選フコト

(三)山火事ノ如キ出來事ヲ顧慮シ樹木ノ甚シク繁カラサル處ヲ選フコト

第三、一個所ニ格納シ得ル瓦素林ノ最大量額ノ調査

量額ヲ制限スルノ必要ナシト雖モ建築上ノ難易及ヒ費用ニ依リ制限セラレタル墜道ノ場合ニ於テハ依置ニ依リ或ハ二三ニスル必要アルヘシ
萬一爆發ヲ起シタル場合ノ損失ヲ顧慮セハ成ルヘク多數ニ分ツテ便トスルカ如シ

第四、危険ニ對スル豫防法ノ調査

- (一)倉庫附近ニ無用ノ者ヲ近ケサルコト
 - (二)近傍ニ於テ一切ノ火氣ヲ禁スルコト
 - (三)空氣ノ流通ヲ十分ナラシメ必要ニ應シテハ流通ヲ爲サシムル装置ヲ要ス
 - (四)倉庫内ノ溫度ヲ甚シク昇騰セシメサルコト位置及ヒ構造上必要ト認ムレハ水ヲ注流若クハ細噴出セシムルノ装置ヲ要スルコトモアルヘシ
 - (五)避雷針ヲ完全ナラシムルコト
 - (六)火氣ヲ發スヘキ虞アル装置ヲ避クルコト
 - (七)周圍ニ木柵ヲ設ケ番兵ヲ附スルコト
- 但木柵位置ノ距離ニ就テハ火藥庫ノ規定ニ準スルヲ可トス

第五、瓦素林容器選定ノ調査

容器ハ十「ガロン」入ノ小罐ヲ用ヒ貯藏スルコト但「インターナショナル、オイル」會社ヨリ供給セル容器ノ如キハ試験ノ結果長ク倉庫ニ貯フルニ適セサルヲ以テ海軍用トシテ新

ニ容器ヲ計畫スルヲ必要ト認ム

是ニ於テ齋藤海軍艦政本部長ハ、此ノ調査ニ基キ、瓦素林ヲ陸上ニ貯藏スルニハ、墜道設備ヲ以テ最良ト認メ、三十八年六月十九日、横須賀及ヒ吳ノ兩軍港ニ、五萬ガロン^一ヲ貯藏シ得ル墜道、竝ニ之ニ附屬スル必要ノ家屋ヲ至急建設セラレタキ旨上申セリ、

第二款 重油

明治三十三年九月、海軍艦政本部ニ於テハ、列國海軍ニ於テ、重油ヲ艦艇ノ燃料トナシツ、アルノ趨勢ニ鑑ミ、我カ海軍ニ於テモ、先ツ之カ試験ヲ爲スノ必要ヲ感シ、之ヲ海軍大臣ニ稟申シ、同大臣ハ時ノ石炭調査委員(委員長海軍機關大監重久篤行)ヲシテ、重油ノ焚燃竝ニ焚燃器ノ試験ヲ爲サシメタリ、但其ノ試験ノ方法等ニ關シテハ、總テ海軍艦政本部長ノ指示ニ依レリ、

三十六年九月、同調査委員ノ組織ヲ解カル、ヤ、海軍艦政本部長ハ、同調査事項ヲ横須賀鎮守府ニ於テ繼續セシメラレシコトヲ海軍大臣ニ稟申シ、同大臣ハ之ヲ横須賀鎮守府司令長官ニ訓令セリ、

是ニ於テ横須賀鎮守府司令長官ハ、麾下ノ人員ヲ以テ、燃料調査委員ナルモノヲ任命シ、以テ之ヲ試験セシメ、且本邦ニ産出スル重油ノ性状、竝ニ其ノ産額等ニ就キ調査スル所アリ、三十七年四月第一回報告ヲ提出セリ(備考文書第三號參照)

爾後本戰役中モ、亦横須賀鎮守府ニ於テ其ノ試験ヲ續行シ、且艦内ニ重油ヲ貯藏スルトキハ、敵彈ノ爆發ニ依リ、危険ヲ生スルコトナキヤ、又久シク之ヲ貯藏セハ、變質シ若クハ危険ナル瓦斯

等ヲ發生スルコトナキヤ、艦艇用トシテ採用スヘキ重油ノ規格如何等ヲ調査シ、平和克復後幾

モナクシテ、其ノ第二回ノ報告ニ接セリ、(備考文書第
四號參照)

是ヨリ先キ海軍艦政本部ニ於テハ、造船監督官トシテ英國ニ在リシ海軍機關中監藤井光五郎
ヲシテ、同國海軍ニ就キ、圓筒式罐及ヒ大管式水管罐、竝ニ小管式水管罐ノ孰レニ重油ヲ使用ス
ルモ、石炭ニ等シク全力ヲ發揮シ得ルカ、艦船ニ重油ヲ貯藏シテ危険ナキカ、重油ノ理化學的性
狀如何、重油ヲ噴射セシムルニハ、英國海軍ニ於テハ壓榨空氣ヲ用フルカ、又ハ蒸氣力ヲ用フル
カ、或ハ唧筒ニ依ルカ、石炭ト重油トヲ混燃シタル從來ノ成績如何、竝ニ戰鬪艦及ヒ巡洋艦等ニ
ハ重油ヲ専用スルカ、又ハ石炭ト重油トヲ混用スルカ等ノ諸要項ヲ調査セシメ、英國海軍ニ於
テハ、圓筒式罐及ヒ大管式水管罐、竝ニ小管式水管罐ノ孰レニ重油ヲ使用スルモ、石炭ニ等シク
能ク全力ヲ發揮シ得ルノ實驗ヲ有シ、密閉試驗ニ於テ、華氏二百度ノ引火點ヲ有スル重油ヲ艦
艇ニ貯藏スルモ、敢テ危険ナキモノト爲シ、近年製造スル艦艇ニ於テハ、重油ヲ噴射セシムルニ
ハ、器械的壓力ヲ以テスルノミニシテ、石炭ト重油トノ混燃成績ハ、極テ佳良ニシテ、石炭ノミヲ
以テスルヨリモ、重油ト石炭トノ消費總量ハ少額ナリ、而テ重油ノ消費ハ、通例燃料ノ總使用量
ノ三割ニ制限シ、戰鬪艦及ヒ大巡洋艦ニハ、重油ト石炭トヲ混燃シ、驅逐艦及ヒ水雷艇ノ二三ニ
ハ、重油ノミヲ使用セシメントシテ、當時艤裝中ナルモノアルヲ知レリ、

編者曰ク平和克復後モ尙引續キ横須賀鎮守府ニ於テ重油ニ關スル調査ヲ繼續シ水雷艇小鷹及ヒ軍艦八重山ニ重油焚
燃器ヲ裝備シ且引火點ヲ異ニスル重油各種ノ比較試驗等ヲ爲シ海軍艦政本部ニ於テハ新造艦艇ニ之ヲ採用スルノ議

ヲ決シ三十九年七月終ニ横須賀軍港ニ重油貯藏用タンクヲ設備スルニ至レリ

第三節 海軍煉炭製造所

第一目 海軍煉炭製造所ノ起源

抑艦艇ノ燃料トシテ、其ノ機關ノ實力ヲ發現スルニ適ス可キ無煙炭ヲ、我カ國內ニ發見スルコトハ、海軍多年ノ切望ニシテ、明治二十年頃ヨリ、已ニ其ノ調査ニ關スル端緒ヲ開ケリ、然ルニ我カ國內ニ産出スル無煙炭ハ、多クハ粉炭ニシテ、單獨ニ之ヲ艦艇ノ燃料ニ供スルコトヲ得ス、稀ニ塊炭ヲ出スモノアルモ、揮發物過少ニシテ餅塊性ニ乏シク、到底燃料ニ供スルコト能ハサルモノナリ、是ヲ以テ明治二十七年ノ頃、時ノ海軍石炭調査委員ハ、艦艇ノ好燃料ヲ得ントスルニハ、彼ノ佛國ノ例ニ倣ヒ、我カ國産出ノ無煙粉炭ヲ以テ、煉炭製造ノ業ヲ創始スルノ外、他ニ良策ナキ旨ヲ報告シ、進テ是カ調査ニ著手センコトヲ具申スルニ至レリ、然ルニ二十七八年戰役起ルニ及ヒ、此ノ調査ハ中絶シ、同戰役ノ初半ハ、止ムヲ得ス有煙和炭ヲ用ヒ、後半ニ至リテ漸ク英炭ヲ使用シタルモ、彼ノ九月十七日黃海々戰ノ如キハ、全ク有煙和炭ヲ使用シタルニ過キス、

二十七八年戰役ノ實驗ハ、愈々海軍ニ於テ無煙燃料ノ必要ヲ感シ、平和克復後、海軍石炭調査委員ハ、海軍大臣ノ訓令ニ依リ、更ニ進テ我カ國內ニ産出スル無煙炭ヲ以テ、艦艇ノ實勢ヲ顯表スルニ足ル煉炭ヲ製造シ得ルヤ否ヤヲ調査シ、或ハ日本煉炭合資會社(在東京月島)ニ託シテ之ヲ試製シ、或ハ民間ニ於テ製造シタル各種ノ煉炭ヲ試験シ、其ノ結果、同委員ハ我カ國內ニ於テ産出スル

石炭ヲ以テ、軍用煉炭ヲ製造シ得ルモノト認定シ、同時ニ海軍ニ於テ、先ツ小規模ノ煉炭製造所ヲ創設スルノ議ヲ提出シタルモ、時恰モ民間ニ於テハ、天草炭業株式會社(編者曰ク三十四年八月日本煉炭株式會社ト改稱ス)ナルモノ、創立成リ、天草島ニ産出スル無煙炭ヲ用ヒテ、煉炭製造ノ業ヲ營マントス、是ニ於テ我カ海軍省ハ、其ノ製品ヲ試験スルコト數回、比較的其ノ成績ノ良好ナルコトヲ確認シタルヲ以テ、國費多端ノ際ナルニ顧ミ、先ツ同會社ヲシテ煉炭ヲ製造セシメ、逐次其ノ製品々質ノ改良進歩ヲ企圖スルト共ニ、又會社事業ノ發達擴張ヲ促シ、徐ニ艦艇ノ燃料トシテ適良ナル煉炭ヲ得シコトヲ希ヘリ、

爾來該會社營業ノ經過ヲ見ルニ、其ノ發達ハ豫期ノ如クナラス、是ニ於テ有力ナル民間事業家ノ奮テ斯業ヲ企圖スルカ、否ラサレハ海軍ニ於テ之ヲ經營スルノ外、他ニ策ナキヲ感スルニ至レリ、

此ノ間海軍ニ於テハ、無煙煉炭製造ニ關スル調査ヲ怠ルコトナク、殊ニ出炭豐富ナル無煙炭田ノ調査ヲ繼續シタリシカ、明治三十三年ノ頃、長門無煙炭礦株式會社ナルモノアリ、長門國美禰郡及ヒ豊浦郡ニ跨ル廣大ナル礦區ヲ有シ、是ヨリ産出スル無煙炭ヲ原料トシテ、海軍用及ヒ一般船舶用ノ無煙煉炭ヲ製造シ、且是カ販賣業ヲ開始セントシ、其ノ試験ヲ出願セリ、

是ニ於テ海軍省ハ、同年十二月天炭炭業株式會社ニ交渉シテ、長門國美禰郡産出ノ無煙炭ヲ以テ、煉炭ヲ試製セシメ、三十四年六月、先ツ有煙炭ノ配合ヲ異ニシタル同煉炭數種ヲ試焚シ、爾後石炭調査委員ヲシテ、屢陸上試験罐、軍艦高雄、磐手及ヒ驅逐艦階等ニ於テ、同煉炭ヲ試焚セシ

メ、三十五年二月、其ノ終末報告ニ徴シテ、同煉炭ハ自然通風ヲ以テハ第二種炭ニ相伯仲シ、強壓通風ヲ以テハ英炭ニ及ハサルモ、第二種炭中ノ精選和炭ハ勿論、天草産ノ無煙炭ヲ以テ製造シタル煉炭ニ比スレハ、稍優ル所アルヲ知レリ、

試験ノ成績ハ此ノ如ク良好ナリシヲ以テ、長門無煙炭礦株式會社ハ、其ノ採掘及ヒ煉炭製造業ヲ創始セントスルノ議ヲ起シ、株主タル男爵澁澤榮一、淺野總一郎、其ノ他毛利公爵家關係ノモ等盡力スル所アリ、我カ海軍ニ於テモ、煉炭製出ノ上ハ、其ノ價格一噸ニ付九圓乃至九圓貳拾錢ノ範圍ナラハ、一箇年約十萬噸ノ需要アル旨ヲ示シ、會社ヲシテ據ル所アラシメ、以テ事業ノ開始ヲ勸誘シタリシト雖モ、如何セン 同炭礦ハ 山陽鐵道株式會社最近ノ鐵道本線ヲ去ルコト、十三哩餘ニ在ルヲ以テ、同社ハ山陽鐵道株式會社ヲシテ、此ノ間ニ支線ヲ敷設セシメント欲シ、數回交渉スル所アリシモ、議協ハスシテ、之カ爲メ長門無煙炭礦株式會社ハ創業ニ一頓挫ヲ來セリ、

三十六年十月、東亞ノ風雲已ニ穩ナラス、戰時ニ當リ艦艇ヲシテ焚用セシムヘキ燃料問題ヲ解決スルノ必要、頗ル急ナルノ時、海軍艦政本部第二部長海軍大佐坂本一ハ、既ニ過去數年間ニ於ル既設煉炭會社ノ進歩發達共ニ遲々タルニ鑑ミ、又多年我カ海軍ニ於テ研究調査シタル結果、長門無煙炭ハ明ニ軍用煉炭ノ原料ニ適スルニ拘ラス、之ヲ採掘搬出スルニハ、鐵道ヲ敷設スルノ必要アリ、爲メニ多額ノ費用ヲ要スルヲ以テ、民間ニ於テ是カ經營ニ當ルモノナク、荏苒此ノ儘ニ經過センカ、果シテ何時ニ至リテ燃料供給ノ獨立ヲ期シ得ヘキヤ測ル可カラス、宜シク此ノ

際海軍ニ於テ、長門無煙炭礦株式會社所有ノ礦區ヲ買收シ、自ラ煉炭製造事業ヲ開始スヘシト上申セリ、是ヨリ先キ、我カ常備艦隊ノ諸艦艇ヲシテ、出師準備トシテ、常用炭以外ノ別區劃ニ英炭ヲ搭載セシムルヤ、常備艦隊機關長海軍機關大監山本安次郎ハ、我カ艦艇ニ供給スル英炭ハ粉末多量ニシテ、到底艦隊ヲシテ最大速力ヲ發現セシムルコト頗ル困難ナルヘキヲ論シ、塊炭ヲ選別シテ供給スルノ必要ナルヲ主張シ、三十六年十二月、常備艦隊司令長官ノ電請ニ依リ、海軍艦政本部ハ、終ニ各海軍工廠ニ通牒シテ、之ヲ艦艇ニ供給スルニハ、陸上ニ於テ先ツ八分目角篩ヲ通シテ粉炭ヲ除去セシムルコト、セリ、

由來我カ海軍ニ於ル英炭購買規定ニ據レハ、其ノ購買スル英炭ハ、多クニ一回篩ノ「カーヂフ」炭ニシテ、各軍港ニ於テ之ヲ陸揚ケスルニ際シ、八分目角篩ヲ以テ選別シ、之ヲ脱シタル粉末ハ、二割五分ヲ超過セサルモノナリ、而テ多年ノ實驗上、本邦ニ輸入スル英炭ノ多クハ、二割五分ノ粉炭ヲ有スルヲ以テ、之ヲ陸揚庫納シテ、更ニ艦艇ニ供給セラル、迄ニハ、一層多量ノ粉末ヲ生スルニ至ル、蓋出師準備トシテ、艦艇ニ供給スル英炭ヲ選別スルハ、洵ニ止ムヲ得サルニ出テタルノ策ナリトス、斯ノ如ク塊粉ヲ區別スルニ於テハ、粉末ハ全ク廢物ニ歸シ、一モ用途アルコトナキモ、若シ之ヲ煉炭ニ化製セハ、英塊炭ニ比シテ、效力毫モ讓ラサル精良ノ燃料ヲ得ルニ至ルヘク、是經濟上廢物利用ノ目的ヲ達スルモノナリト雖モ、如何セシ當時民間ニハ煉炭製造業ヲ營ムモノ、只一ノ日本煉炭株式會社(天草炭業株式會社ノ改稱)アルノミニシテ、同社ハ「オーブン、モールド」式ノ煉炭機械一基ヲ有スルニ過キサルヲ以テ、到底英粉炭ヲ以テ、完全ナル煉炭ヲ製出スルノ餘力

ヲ有セサルナリ、是ニ於テ我カ海軍省ハ、自ラ煉炭事業ヲ開始シ、戰役ノ繼續スル限り、彼ノ英粉炭ヲ煉炭ニ化製シ、更ニ進テ長門無煙炭礦株式會社所有ノ無煙炭田ヲ買收シ、之ヲ採掘シテ以テ煉炭ヲ製造シ、不幸ニシテ戰役數年ノ久シキニ彌リ、英炭ノ輸入杜絶スルコトアルモ、之ヲ出征艦隊ニ供給シ、以テ軍用燃料獨立ノ基礎ヲ建テント欲シ、海軍大臣ハ、臨時軍事費金百〇六萬餘圓ヲ割キテ、之カ經營ノ費用ニ當テシコトヲ閣議ニ提出シ、三十七年四月一日終ニ其ノ決定ヲ見ルニ至レリ、蓋戰時ニ際シ我カ海軍ニ於テ購買スル英炭ヲ、極テ消極的ニ積算シテ、約五十萬噸ト見做シ、是ヨリ出ル所ノ粉炭ヲ假ニ一割弱トセハ、約五萬噸ニシテ、其ノ價格ハ金百貳拾五萬圓ニ相當スルカ故ニ、單ニ此ノ金高ヲ以テモ、優ニ煉炭製造所ノ經營費ヲ償ウテ餘アルヲ見ルヘキナリ、是ニ於テ同月十八日海軍大臣ハ、海軍艦政本部長海軍中將有馬新一ヲ海軍煉炭製造所設立委員長トシ、同第二部長海軍大佐岩崎達人、同部員海軍機關大監武田秀雄、同海軍機關大監市川清次郎、海軍採炭所長海軍少佐稻葉宗太郎、海軍省經理局々員海軍主計少監名倉良三、臨時海軍建築部々員海軍技師工學博士渡邊讓、及ヒ海軍採炭所々員海軍技師石橋政信ヲ同委員ニ任命シテ、各般ノ事務ニ當ラシメ、同委員長ハ武田委員ヲシテ、主トシテ煉炭部ノ設備ニ關スルコトヲ掌ラシメ、稻葉委員ヲシテ採炭部ノ設備ヲ、名倉委員ヲシテ經費ニ關スルコトヲ、渡邊委員ヲシテ兩部營造物ノ事ヲ掌理セシムルコト、爲セリ、是ヨリ先キ海軍煉炭製造所設立ノ省議決スルヤ、海軍大臣ハ海軍省經理局長海軍主計總監村上敬次郎ヲシテ、長門無煙炭礦株式會社取締役淺野總一郎ヲ召喚シ、同社所有ノ無煙炭田ヲ買

收スルノ協商ニ當ラシメ、軍國多事ノ今日、會社ハ須ラク國民ノ義務トシテ、所有炭田ヲ政府ニ獻納スヘシト勸誘シタルニ、淺野ハ多數株主ノ到底此ノ如キ條件ニ應ス可カラサルヲ陳辯シ、左ノ同會社三十六年度下半季分營業報告書ニアル財産目錄ヲ提供シ、少クトモ株金ノ拂込金額ニテ買上ケラレンコトヲ希望シ、彼此交渉ノ結果、終ニ同會社所有無煙炭田ノ全部、現存營業物所有器具機械及ヒ礦區圖等一切ヲ、金貳拾萬圓ヲ以テ買收スルノ協商成リ、同年三月二十四日、先ツ有馬艦政本部長ト同社取締役淺野總一郎トノ間ニ、假契約ヲ締結シ、四月六日一切ノ授受手續ヲ結了セリ、長門無煙炭礦株式會社三十六年度下半季營業報告中、財産目錄ハ左ノ如シ、

財産目錄

- | | |
|---------------------|-------|
| 一、金貳拾五萬六千貳百參拾四圓拾錢七厘 | 炭 礦 |
| 一、金貳拾參萬八千四百貳拾圓 | 未拂込株金 |
| 一、金壹千五百參拾圓七拾九錢六厘 | 鐵道豫測費 |
| 一、金壹千七百六拾參圓八拾四錢六厘 | 興業費 |
| 一、金壹千〇六拾圓參拾四錢四厘 | 器具機械 |
| 一、金壹百八拾五圓貳拾九錢六厘 | 什 器 |
| 一、金貳百〇五圓六拾八錢壹厘 | 礦業所 |
| 一、金拾四圓六拾五錢六厘 | 現 金 |

一、金壹百參拾九圓貳拾壹錢

株式二十七七銀行

一、金七拾壹圓七拾六錢五厘

山元石炭

一、金九拾圓

賣殘石炭代

一、金貳拾六圓拾四錢壹厘

貯藏品

一、金六百貳拾圓七拾五錢

受取未濟

合計金五拾萬參百六拾貳圓五拾九錢貳厘

長門無煙炭礦株式會社所有礦區ノ中央ニ介在セル二礦區アリ、一ハ一万五千七十四坪ニシテ高取伊好ノ所有ニ係リ、他ハ二十六万三千百七十八坪ニシテ魚住惣左衛門ノ所有ニ屬ス、我カ海軍ニ於テハ、先ツ此ノ二礦區ヲモ買收スルノ必要ヲ認メ、海軍採炭所長稻葉海軍少佐ヲシテ交渉セシメ、前者ハ參千八百圓、後者ハ參千圓ヲ以テ買收ノ約成リ、三十七年四月十二日、前所有者ト同所長トノ間ニ契約ヲ締結シ、同日農商務省告示第九一號ヲ以テ、前記諸礦區ハ海軍省ノ所屬タル旨ヲ公布セリ、其ノ礦區左ノ如シ(第一圖參照)

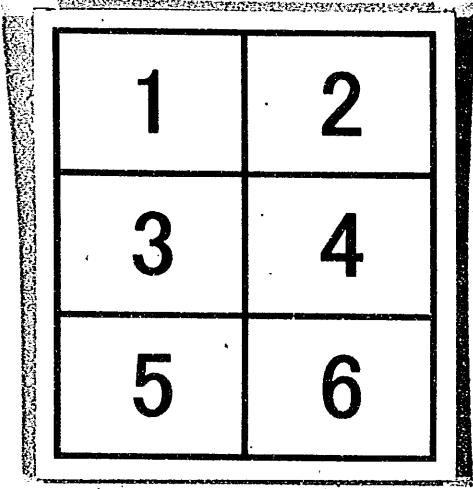
登錄第一號海軍礦區	五九八、六三一	試掘地
同 第二號海軍礦區	二六三、一七八	同
同 第三號海軍礦區	五五〇、〇一六	同
同 第四號海軍礦區	四四三、六五二	同
同 第五號海軍礦區	一五、〇七四	同

同 第六號海軍礦區	五九六、四四七	同
同 第七號海軍礦區 <small>(荒川、櫛ヶ谷、桃ノ木、草井川)</small>	二、九五八、〇九九	採掘地
同 第八號海軍礦區	五五〇、一二三	試掘地
同 第九號海軍礦區	五五八、三六六	同
合計	六、五三三、五八六	

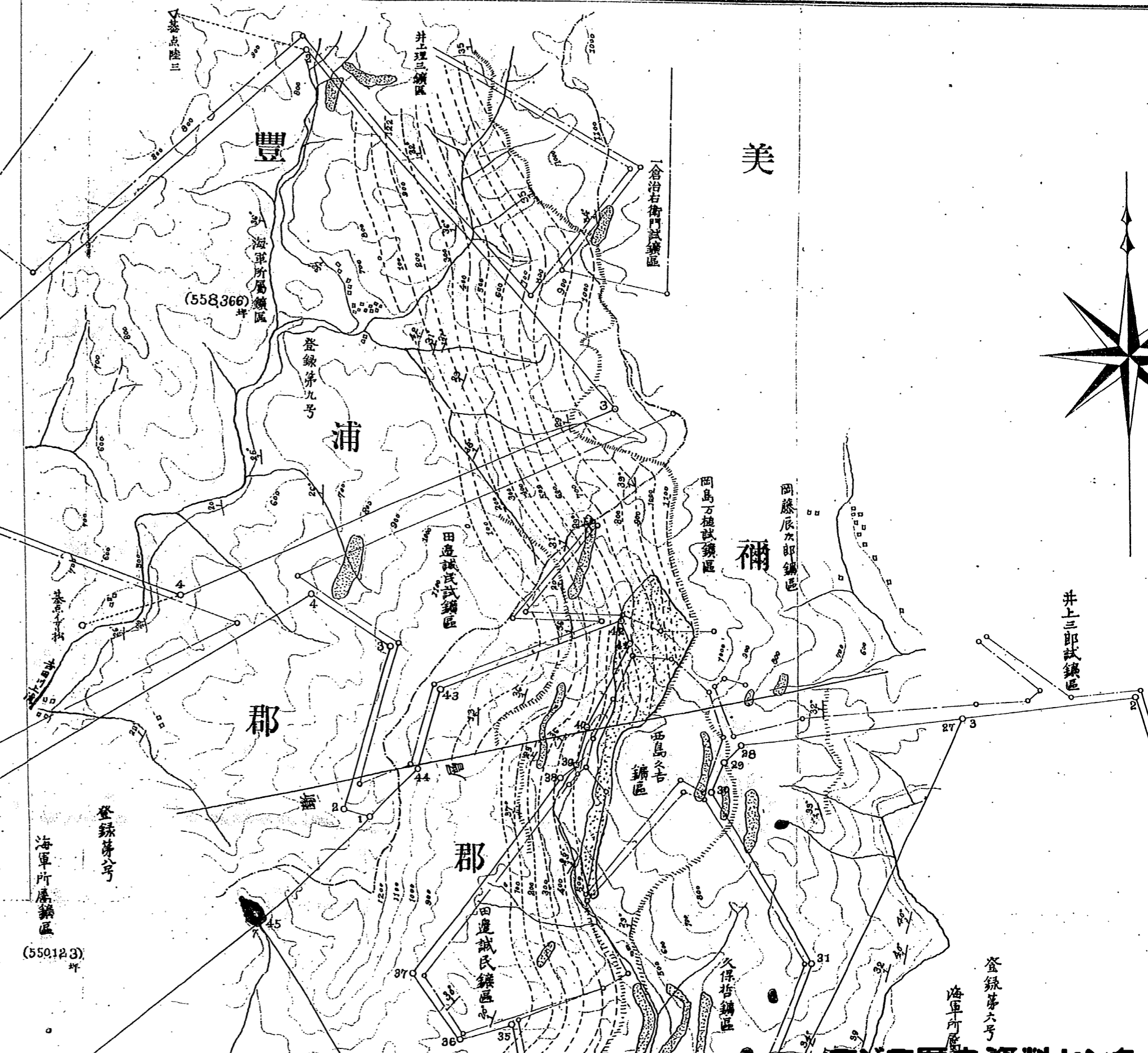
第二目 海軍煉炭製造所開設ノ準備

我カ海軍ニ於テ、長門無煙炭坑ヲ買收シ、自ラ其ノ採掘事業ヲ經營スルニ決スルヤ、採掘シタル石炭ヲ搬出スルニハ、固ヨリ鐵道ノ便ニ倚ラサルヘカラサルヲ以テ、山陽鐵道株式會社ヲシテ厚狹及ヒ大嶺間ニ支線ヲ敷設セシムルニ決シ、同鐵道會社ト交渉ヲ重ネ、終ニ三十七年四月十八日海軍大臣ハ同鐵道會社ニ對シテ、之ニ關スル命令書ヲ交附セリ、(備考文書第(五號參照))是ニ於テ同鐵道會社ハ急速其ノ工事ニ著手シ、三十八年九月十三日開通セリ、三十七年四月下旬、煉炭製造所設立委員武田海軍機關大監、同稻葉海軍少佐、渡邊海軍技師及ヒ石橋海軍技師等ハ、長門無煙炭礦ノ所在地タル美禰郡大嶺村ニ出張シ、開坑ノ位置等ニ就テ踏査スル所アリシモ、由來同炭田ハ、今日ニ至ル迄正當ノ採掘ヲ爲シタルコトナキ新礦ニシテ、其ノ地質等ニ就テハ從來嘗テ經驗ナク、從テ主要坑道ノ位置如何、及ヒ初度ニ於ル各種ノ設備ヲ決定スルニハ、最慎重ナル調査ヲ要シ、然シテ其ノ設計ノ適否ハ、永久ノ利害ニ關係スルコト重大ナルヲ以テ、海軍艦政本部ニ於テハ、學術經驗共ニ豊富ナル斯道知名ノ専門家ヲ雇聘シテ、設

分割撮影ターゲット

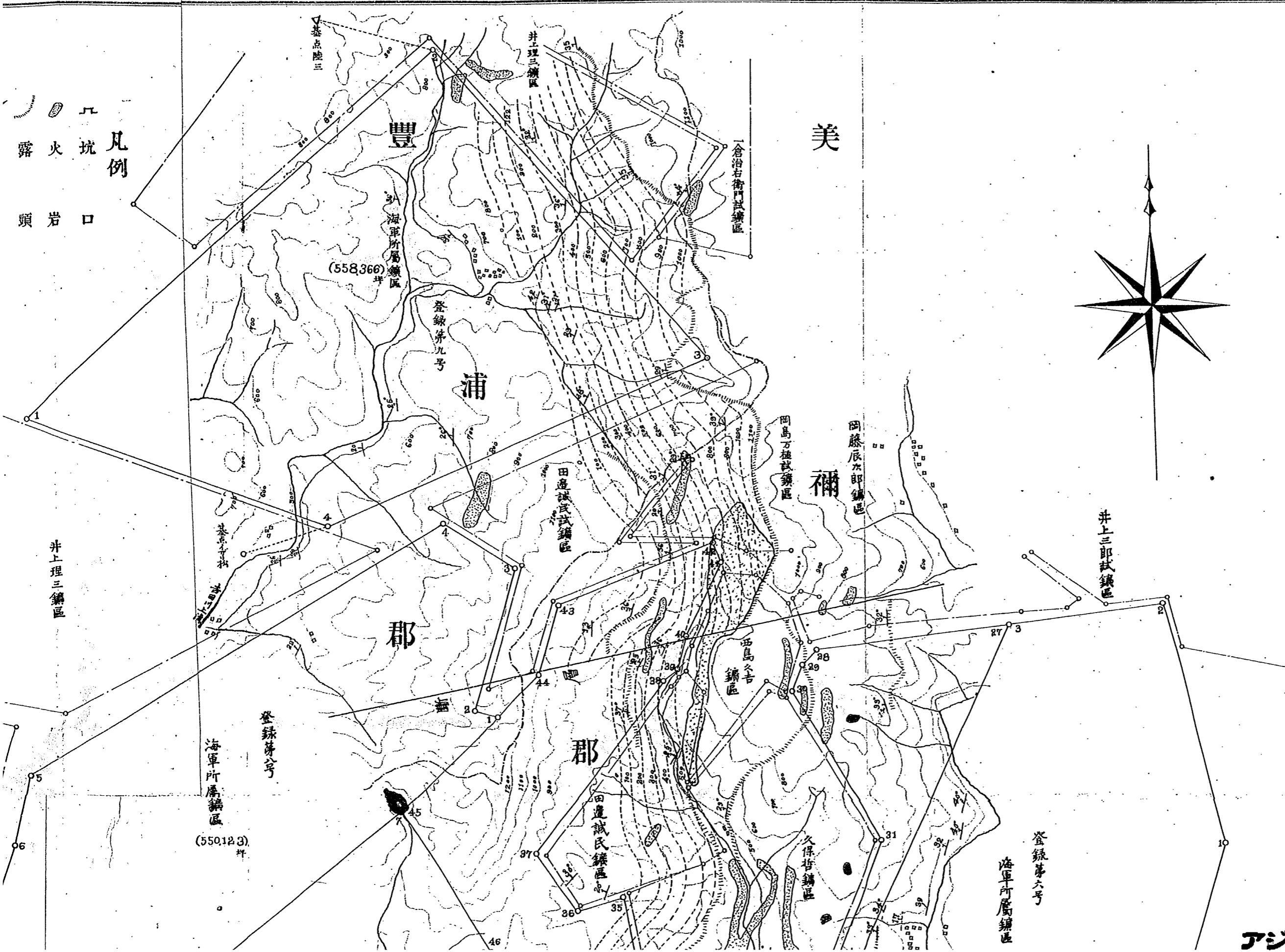
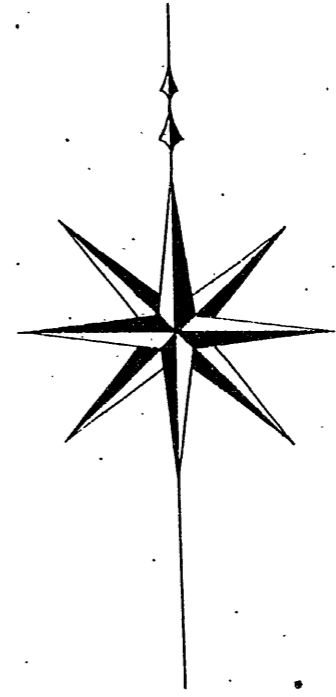
分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

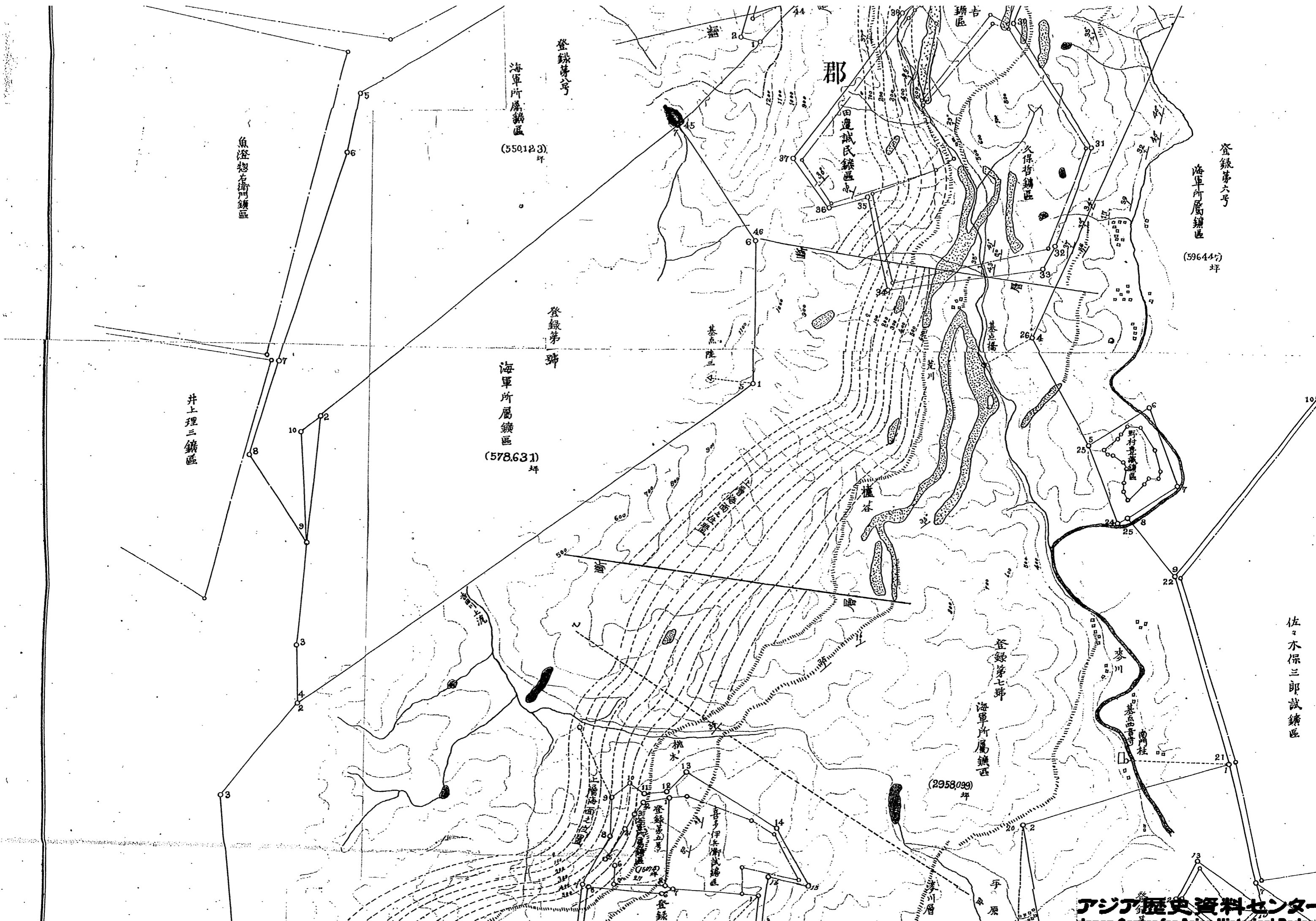
- 凡例
- 坑口
 - 火岩
 - 露頭
 - 川路
 - 道路
 - 高低線
 - 郡界
 - 人家
 - 溜池
 - 炭層高低線
 - 鑛區界線
 - 隣鑛區界線



海軍長門無煙炭鑛鑛區圖

壹万貳千分之壹





魚澄惣右衛門鑛區

海軍所屬鑛區
(550123)坪

登錄第一號

海軍所屬鑛區
(578.631)坪

井上理三鑛區

郡

田邊誠民鑛區

久保持鑛區

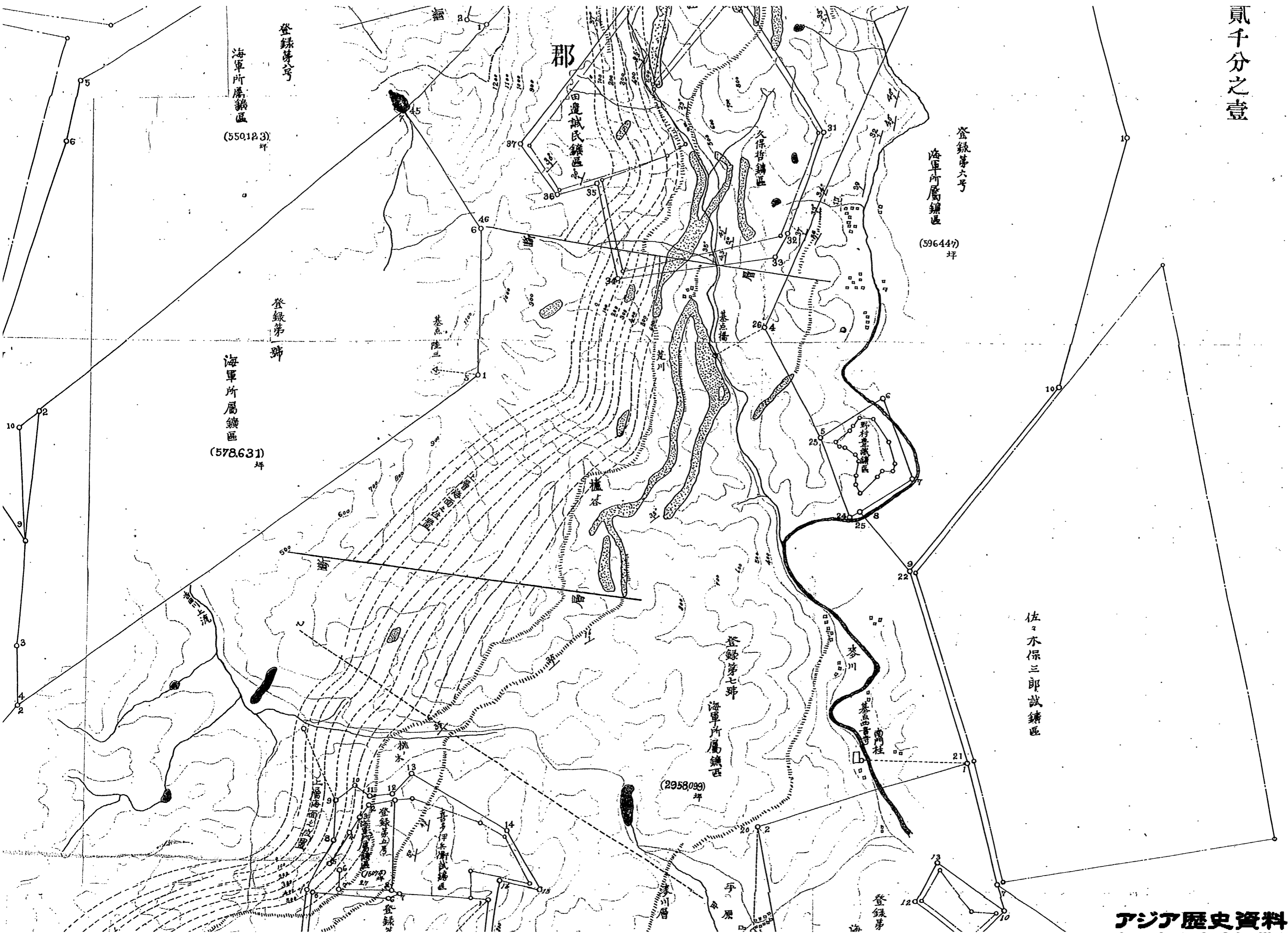
登錄第六号
海軍所屬鑛區
(596447)坪

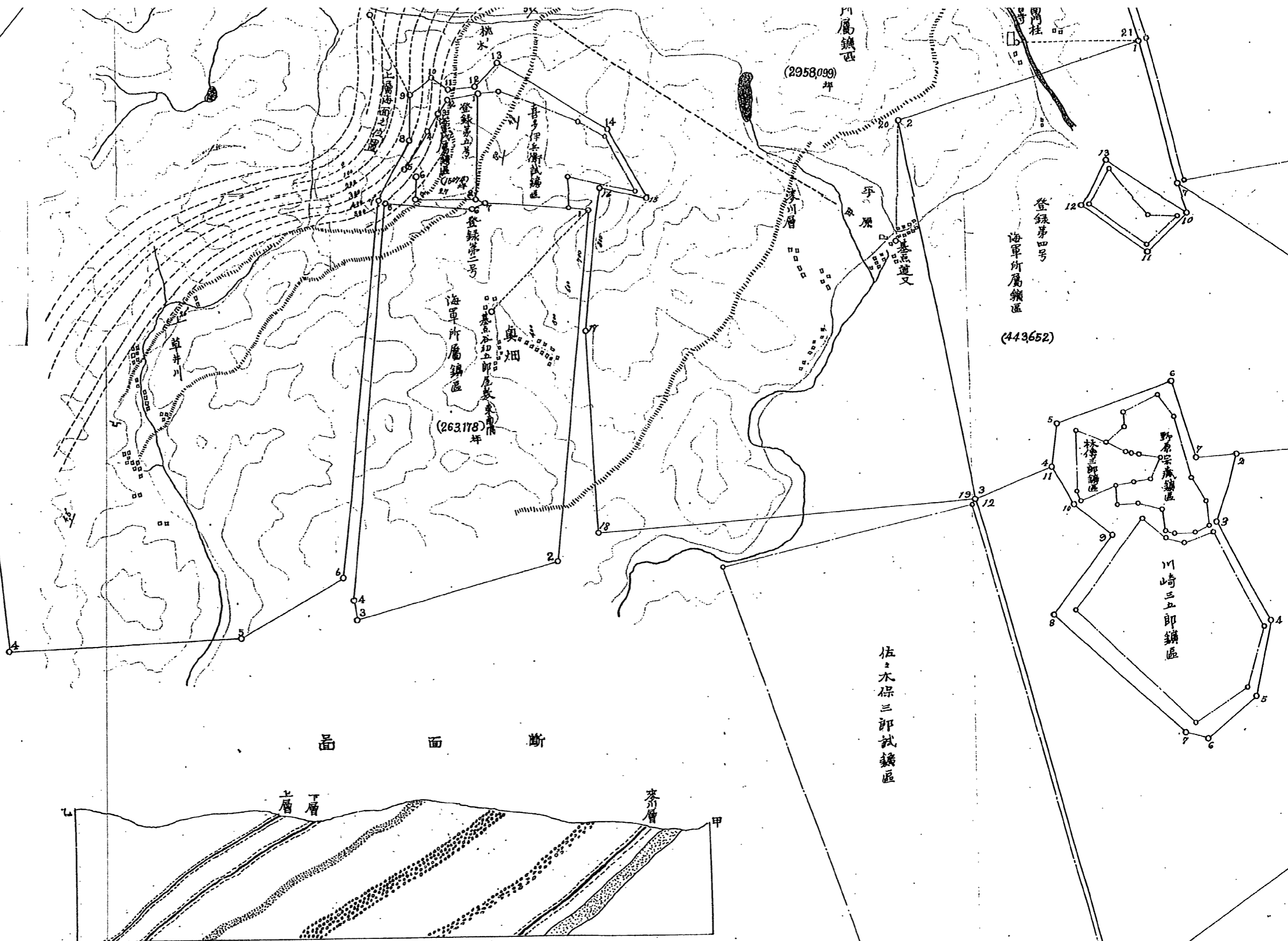
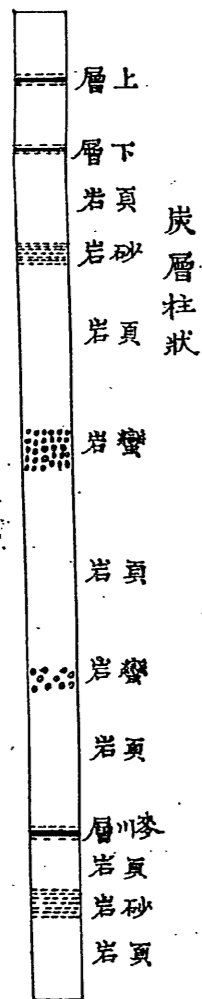
基点陸三

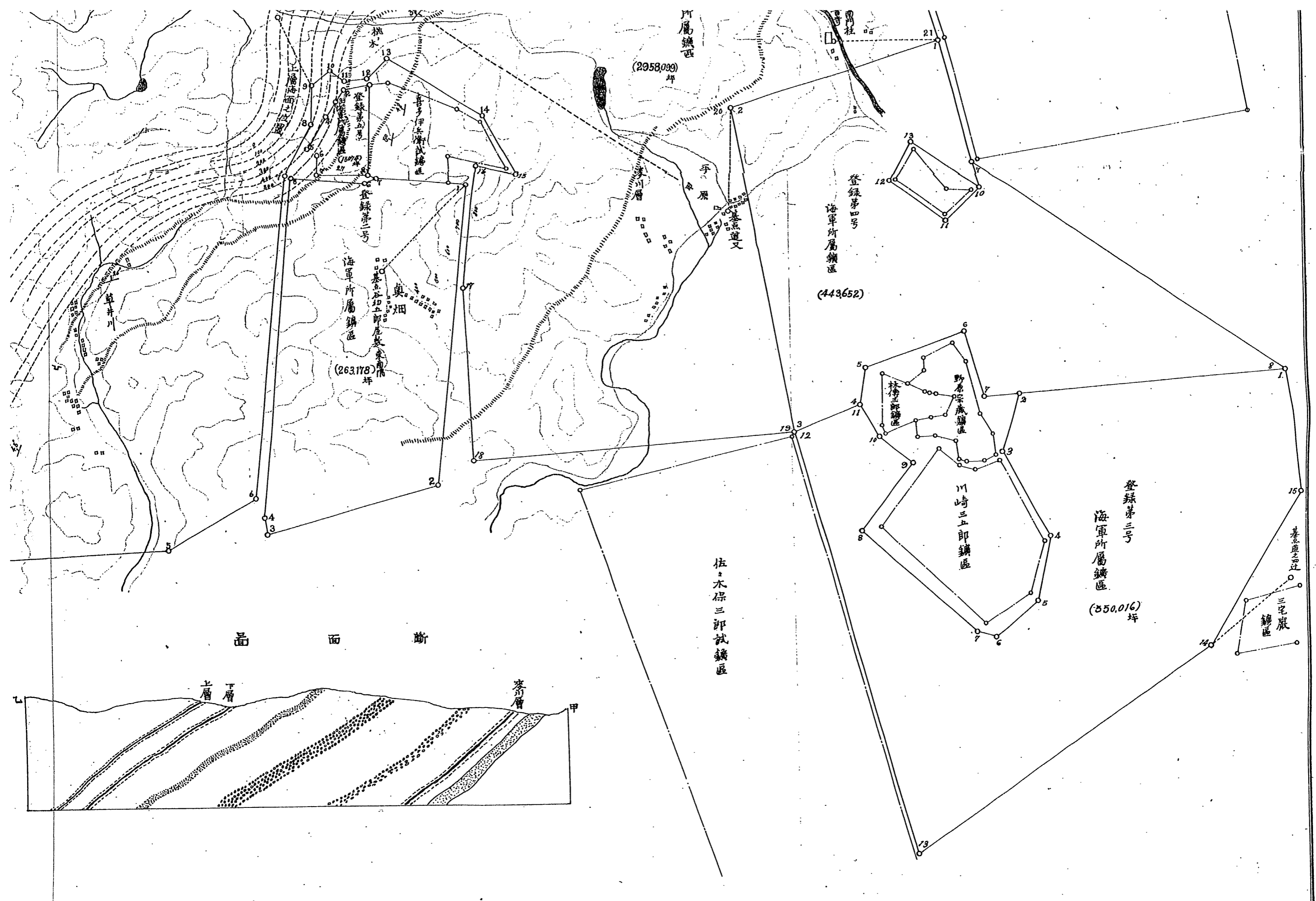
登錄第七號

海軍所屬鑛區
(2958.099)坪

佐々木保三郎試鑛區







計ノ當否其ノ他各般ノ重用問題ヲ調査セント欲シ、同年六月海軍大臣ノ認許ヲ得テ、工學士石田收ヲ聘シ、同炭礦開坑ノ設計調査ヲ囑託セリ、而テ同囑託調査ノ結果、大嶺村字桃ノ木及ヒ櫃ヶ谷ノ兩所ニ開坑採掘シタル石炭ハ、架空鐵索裝置ニ依リ之ヲ麥川ニ運搬スルコトニ決シタルヲ以テ、終ニ麥川ヲ採炭本部ト定メ、主ナル營造物ハ此ノ地ニ建設スルコト、爲シ、桃ノ木、櫃ヶ谷及ヒ麥川等ニ於テ、之ニ要スル敷地ヲ購入セリ、煉炭工場ハ之ヲ原料ヲ採掘スル炭坑ノ附近ニ設クルトキハ、最便利ナルハ勿論ナリト雖モ、之ヲ港灣ト隔絶シタル大嶺ニ設クルトキハ、煉炭ヲ製造スルニ當リテ要スル調合用有煙炭及ヒ「ピッチ」等ヲ運送スルカ爲メ、無益ノ費用ヲ要スルノ不利アルノミナラス、洗炭事業ハ大ニ河流ヲ濁スヲ以テ、出來得ヘクシハ海灣ニ近キ河流ヲ利用セサル可カラス、是ヲ以テ煉炭工場ハ成ルヘク原料炭坑ニ近ク、亦港灣ニモ近キ所ヲ選ヒテ之ヲ設置スルヲ要ス、山陽鐵道厚狹驛附近ハ厚狹川ノ水流ヲ控ヘ、豐浦郡小月村ハ吉田川ノ水流ヲ有シ、共ニ水量豊富ニシテ洗炭用ト爲スニ足リ、且原料炭坑ニ遠カラスシテ、好個ノ候補地タルヲ失ハスト雖モ、惜イ哉兩地共ニ利用シ得ヘキ港灣ナキヲ以テ、止ムヲ得ス之ヲ周防國徳山ニ設置スルニ決セリ、徳山ハ原料炭坑ヲ去ルコト稍遠ク、爲メニ原料炭ヲ輸送スル運賃ハ、著シク増加スルノ不利アルモ、灣内水深ク浪靜ニシテ、製出シタル煉炭ヲ搬出スルニ、頗ル便利ナルヲ以テ、得失相償ウテ餘アルナリ、由來徳山ノ地タルヤ、舊藩政時代ヨリ用水ニ乏シク、水田灌溉ノ用水スラモ、往々缺乏ヲ告クルコトアリシト雖モ、幸ニ徳山町長貴族院議員野村恆造ハ、東川水源ニ於ル灌溉用水ヨリ、煉炭製

造事業ニ要スル水量一晝夜七百噸ヲ分與スヘキコトヲ提供シタルニ依リ、水利事業ニ通曉スル佐世保海軍經理部建築課長海軍技師吉村長策ヲシテ、同水源地ヲ踏査セシメタルニ、東川本流ノ水量ハ一晝夜七千五百噸ニ上ルカ故ニ、是ヨリ分水センニハ、一晝夜七百噸以上ノ用水ヲ得ルコト、敢テ難キニ非スト爲シタルヲ以テ、終ニ煉炭工場ヲ德山ニ設置スルニ決シタルモノトス、而テ德山町ヨリ同敷地トシテ、二万二千四百三十四坪ヲ政府ニ獻納セリ、

煉炭工場設備ノ程度ハ、一時間二十五噸ヲ製出スル煉炭機械一臺ヲ裝備シ、其ノ他ノ附屬裝置ハ、總テ準シテ設備スルニアリシヲ以テ、有馬設立委員長ハ、先ツ其ノ購買セントスル煉炭機械ノ制式ヲ決定スル當リ、曩ニ海軍機關大監武田秀雄カ、命ヲ受ケテ歐洲ニ使シ調査シタル結果ヲ基礎トシテ、煉炭機械ハ佛國サンタチエン市「ピエトリツクス、ルフレエーヴ」機械製造會社ノ專賣ニ係ル兩面壓榨式ノモノヲ採用シ、洗炭機械ハ獨國ドルトマン市「シユツテルマン、クレエマー」會社製造ノモノヲ採用スルニ決シ、二十七年六月二十七日、之ヲ「ピエトリツクス、ルフレエーヴ」會社代理人アドギーニ注文セリ、

「ピエトリツクス、ルフレエーヴ」會社ノ平素廣告スル所ニ依レハ、煉炭機械一臺ノ製造ニハ、約五ヶ月乃至六ヶ月ヲ要スト稱スト雖モ、我カ海軍省ニ於テ煉炭製造所ヲ創設スルハ、時局ノ必要上之ヲ設クルニアルヲ以テ、成ルヘク短時日内ニ、煉炭機械ヲ竣成セシメサル可カラズ、是ヲ以テ屢該會社ニ交渉シ、遂ニ五ヶ月内ニ、同機械一基ヲ製作セシムルコト、爲セリ、而テ原動蒸氣機械ハ、最初本邦ニ於テ之ヲ製造セシムルノ豫定ナリシモ、官私各工場共ニ、陸海軍ヨリノ注

文多クシテ餘力ヲ有セス、到底希望ノ期限内ニ於テ是カ製造ヲ請負フモノナカリシヲ以テ、之
ヲモ「ビエトリツクス、ルフレエーブ」會社ニ注文セリ、

煉炭製造所ヲ我カ海軍ニ於テ創設スルノ事實ハ、始メヨリ外界ニ對シ祕密トシ、此ノ注文ヲ爲
スニ當テモ、海軍大臣ハ之ヲ競争入札ニ附セスシテ、隨意契約ト爲サシメタリ、然レトモ佛國ト
露國トハ其ノ同盟關係ノアルアリ、「ビエトリツクス、ルフレエーブ」會社カ、果シテ契約期限内
ニ注文品ヲ納附スルヤ否ヤヲ懸念シ、數々會社ニ勸告スルニ、商業上ノ德義トシテ、一度請負ヲ
諾シタル曉ハ、之ヲ無難ニ注文者ニ達セシムルニ、深ク意ヲ用フヘキコトヲ以テシ、且佛國ヨリ
之ヲ本邦ヘノ輸送中、敵艦ニ捕獲押收セラル、コトヲ避ケンカ爲メ、高田商會ニ命シテ、故ヲニ
一度之ヲ英國ニ送附シ、又其ノ發送人ハ某外人ノ名義ヲ用ヒシメ、發送貨物ノ名稱ハ、當時造船
監督官トシテ英國ニ在リテ煉炭機械ノ製造監督ニ從事シタル海軍機關中監藤井光五郎ニ命シ、
表面上ハ煉炭機械ト爲サス、鑛物洗淨及ヒ其ノ煉結機械(銅鑛又ハ金銀鑛用)トシテ、之ヲ取扱ハシメタリ、
斯テ煉炭機械、洗炭機械及ヒ原動機械全部ハ、幸ニ豫定通り竣工シ、同年十月五日製造地ニ於テ
授受ヲ了シ、將ニ本邦ニ向ヒテ之ヲ發送セントスルニ當リ、時恰モ敵ノ第二太平洋艦隊出動ノ時
機ニ際會シ、遠ク南米ヲ迂回セシムルノ止ムヲ得サルニ至リシヲ以テ、三十八年三月上旬、漸ク
徳山ニ來著セリ、是ニ於テ直ニ基礎工事ニ著手シ、「ビエトリツクス、ルフレエーブ」會社派遣ノ技
師監督ノ下ニ、各機械ノ据附ケヲ爲シ、同年四月二十四日、第一號煉炭機械ノ据附ケヲ了セリ、
是ヨリ先キ桃ノ木及ヒ樅ケ谷ノ兩所ニ開坑シ、前者ハ主要坑トシテ一ケ年十萬噸(一日三)後者

ハ補助坑トシテ一ケ年三万五千噸(一日百噸)迄ヲ採掘シ得ルノ設備ヲ爲シ、荒川坑ハ曩ニ舊長門無煙炭礦株式會社ニ於テ開鑿シタル百八十餘間ノ坑道アルモ、火山岩ニ遭ヒテ之ヲ休止シアルヲ以テ、同坑ハ之ヲ試掘シテ、後日増掘ヲ要スル時ノ豫備ニ充テ、麥川ニハ石炭積出場、貯炭場及ヒ工作場ヲ附屬セシメ、又發電所ヲ此處ニ設ケテ、各坑ノ卷揚機械等ニ送電シ、又桃ノ木、櫛ヶ谷兩坑ハ麥川ヲ距ルコト七百間以上ニシテ、其ノ間山岳起伏シ、高低約三百尺餘ノ差アルニ依リ、兩坑ト麥川ニ於ル鐵道線路ノ終點ニ達スル間ニ、二條ノ架空鐵索ヲ設ケテ電動機ヲ運轉シ、一直線ニ險嶽ヲ越エテ、炭車ヲ滑走セシムルノ計畫ヲ爲セリ、而テ有馬設立委員長ハ開坑及ヒ試掘ノ事業經營ニ關シテハ、海軍採炭所ニ在勤スル設立委員海軍少佐稻葉宗太郎等ヲシテ、之ヲ擔當セシムルヲ以テ、事業ノ進行上便利ナリトシ、三十七年八月一日、同委員監督ノ下ニ官役人夫ヲシテ、桃ノ木ニ於テハ其ノ上層坑ノ開坑、櫛ヶ谷ニ於テハ北向坑ノ開坑ニ著手セシメタリ、而テ煉炭工場ノ作業ヲ開始スルニ先タチ、三十七年度ニ於テ、此ノ兩坑ヨリ約七千噸ノ無煙炭ヲ採掘シ、煉炭ノ製造ヲ開始スルニ際シ、操業ニ支障ナカラシメント欲シ、同年十一月二十五日、請負人内田鼎ヲシテ、第一回開鑿工事トシテ、桃ノ木南北兩向ノ上層坑及ヒ南向下層坑ニ於テ、採炭坑道及ヒ風坑各百十間、目拔三十二間ヲ開鑿シ、櫛ヶ谷南北兩向坑ニ於テ、採炭坑道及ヒ風坑各八十間、目拔二十四間、疏水坑道二十間ヲ開鑿セシメ、後チ又同人ハ第二回開鑿工事トシテ、三十七年度内ニ其ノ各坑道ヲ延長シ(其ノ延長間數五百二十三間)且切込炭七千噸ノ採掘ヲ請負ヘリ、斯テ三十七年十二月十六日、徳山ニ於ル廳舎ハ落成シ、三十八年三月十一日麥川ニ於ル廳舎亦

落成シ、煉炭工場ハ四月下旬ヨリ操業ヲ開始スルノ準備略成リシニヨリ、同月十四日海軍大臣ハ、内令第二二一號ヲ以テ、臨時海軍煉炭製造所條例ヲ發布シ、同日又官房第一四一四號ヲ以テ、其ノ本部及ヒ煉炭部ヲ徳山ニ、採炭部ヲ大嶺ニ置キ、同月二十五日ヨリ本條例ヲ實施スルコト、定メ、其ノ日ヲ以テ左記諸員ノ任命ヲ爲セリ、

所長兼煉炭部長

海軍機關大監

武田 秀雄

煉炭部部員

海軍機關中監

水谷 千萬吉

採炭部長

海軍機關少監

貞永 勘五郎

煉炭部部員

海軍大機關士

高津 黃薇男

軍醫長

海軍大軍醫

矢野 恭三

主計長

海軍主計少監

石本 久萬男

採炭部部員

海軍 技師

間宮 伊賀治郎

第三目 海軍煉炭製造所ノ戰役中ニ於ル作業

三十八年四月十七日艦政本部長ハ、三十八年度ニ於ル臨時軍事費艦營費支辨ヲ以テ、長門炭山ヨリ石炭凡三万三千噸ヲ採掘シ、三十七年度内ニ採掘ノ豫定タル同炭七千噸ヲ合セテ、合計四万噸ヲ煉炭ニ製造シ、尙英炭ヨリ生シタル粉炭約六万噸ヲ煉炭ニ改造スルノ必要ヲ認め、豫メ海軍大臣ノ認可ヲ受ケ、同月二十五日臨時海軍煉炭製造所設立ノ日ヲ以テ、武田同所長ニ先ツ英粉炭ヲ以テ第一種煉炭約三万噸ヲ製造スヘキ旨ヲ通達セリ、時恰モ第一號煉炭機械ノ

据附ケヲ了シタルヲ以テ、同所長ハ翌二十六日ヨリ操業ヲ開始セリ、而テ第二號ノ煉炭機械ハ同年七月一日其ノ運轉ヲ見ルニ至レリ、茲ニ兩々相俟チテ多クハ夜業ヲ課シ、少クモ四時間ノ殘業ヲ爲シテ事業ヲ督勵セリ、

然ルニ戰役中、臨時軍事費ヲ以テ購入シタル英炭ハ八十万噸以上ニシテ、是ヨリ生シタル粉末ハ約十萬噸ニ上リ、其ノ内六萬噸ハ、曩ニ之ヲ煉炭ニ改造スルノ認許ヲ得タルモ、猶四萬噸ヲ存シ、各軍港ニ之ヲ山積シ在ルニヨリ、三十八年九月十四日海軍艦政本部長ハ、之ヲモ煉炭ニ改造スルノ必要ヲ認メ、海軍大臣ノ決裁ヲ仰キタル後、臨時軍事費金參拾四萬圓ヲ以テ、英粉炭約四萬噸ヲ第一種煉炭ニ改造スヘキ旨ヲ、煉炭製造所長ニ通達セリ、而テ又其ノ範圍内ニ於テ、英粉炭ト他種炭トノ混合シタルモノ、及ヒ煉炭ノ碎片等ヲ用ヒテ、第二種煉炭ヲ製造スヘキ旨ヲ通達セリ、

三十八年四月煉炭事業ノ開始以降、同年十月末日迄ニ製造シタル煉炭ノ量ハ左ノ如シ、

自三十八年四月事業開始 至同年七月	第一種煉炭			第二種煉炭		計
	英粉炭	米炭	炭	雜粉炭	炭	
同年八月	七、〇二〇			〇	〇	七、〇二〇
同年九月	七、五〇〇			〇	〇	七、五〇〇
同年十月	六、一二六		一、六一五	一、三五〇		九、〇九一
計	三三、一〇七		一、六一五	二、六四六		三七、三六八

因ニ言フ洗炭機械ハ煉炭機械ト殆ト同時ニ其ノ組立ニ著手シタリシモ構造上建築物モ之ニ伴ウテ建築スルヲ要スルヲ以テ平和克復時ニ至ル迄終ニ之ヲ竣工スルニ至ラス三十九年一月漸ク完成シ二月十五日ヨリ其ノ運轉ヲ開始セリ

由來煉炭ノ製造ヲ爲スニ當リ、其ノ煉結劑トシテ使用スル「ピッチ」ハ、其ノ品質ハ、最良好ナルヲ要スルニ依リ、戰役中ハ總テ海外ヨリ之ヲ輸入シタリト雖モ、其ノ價格ハ一噸約金五拾圓ニシテ、頗ル不廉タルヲ免レス、而テ煉炭製造所現在設備ノ程度ニ於テハ、一ケ年約八千噸以上ノ「ピッチ」ヲ要シ、到底近キ將來ニ於テ、我カ邦民間ニ此ノ需用ヲ充スモノナキヲ以テ、海軍大臣ハ農商務省所管ノ製鐵所ニ於テ骸炭ヲ製造スルニ當リ、「ピッチ」ヲ副産物トシテ製造セシメ、以テ之カ需用ヲ充サント欲シ、三十八年四月農商務省ニ交渉セリ、然ルニ同製鐵所ニハ從來數多ノ骸炭製造爐ヲ有スルモ「ピッチ」ヲ副産スル装置ヲ有セス、是ニ於テ海軍省所管臨時軍事費金百〇參萬五千八百圓ヲ分割シテ、同製鐵所内ニ一ケ年約四千噸ノ「ピッチ」ヲ副産シ得ル骸炭工場ヲ新設シ、以テ我カ海軍ニ其ノ「ピッチ」ヲ供給スルコトヲ協定シ、同年五月之ヲ閣議ニ提出シ、次テ其ノ決裁ヲ得タリ、而テ三十九年度内ニ其ノ設備ヲ完成シ、翌年度ヨリ一ケ年四千噸ヲ供給シ、且萬一民間ニ於テ海軍所要ノ殘額ヲ供給スルコト能ハサルトキハ、製鐵所ニ於テハ其ノ所要ノ骸炭量ヲ最高標準トシテ、骸炭爐ヲ増設シ、以テ「ピッチ」ノ副産量ヲ増加スルコトニ豫メ協商シ、且價格ハ德山渡ニテ一噸金拾五圓ト協定セリ、

是ヨリ先キ德山ニ於テ煉炭事業ヲ開始スルノ嚆ニ其ノ原料ニ當テント欲シ、三十七年度内ニ於

テ長門炭礦ノ桃ノ木及ヒ樫ヶ谷兩坑ヨリ石炭七千噸ヲ採掘スルノ豫定ヲ以テ、請負人内田鼎ヲシテ、三十七年八月一日ヨリ開坑ニ著手セシメタルニ、坑道開鑿工事ノ進捗スルニ從ヒ、桃ノ木及ヒ樫ヶ谷南向坑ニ於テハ、屢斷層ニ會シ、或ハ坑道ニ下磐石ノ出現スルアリテ、工事意ノ如クナラス、而モ其ノ坑道ハ共ニ運搬坑道ニ充ツヘキモノナルヲ以テ、急激ナル屈曲ヲ爲スヲ許サス、之カ爲メ斷層ノ擴大區域、竝ニ其ノ方向ヲ調査シ、終ニ之ヲ貫通スルニ決シ、爲メニ多數ノ日子ヲ費シ、從テ開鑿附帶工事ハ豫定期限タル三十七年度内ニ之ヲ終了スルコト能ハス、止ムナク其ノ竣工期ヲ三十八年六月二十五日ニ延期シ、又同年度内ニ採掘セントシタル七千噸ノ石炭ハ一モ採掘シ能ハサリシヲ以テ、五月二十七日迄ニ其ノ契約量ヲ採掘セシムルコト、爲セリ、是ヨリ先キ海軍艦政本部長ハ、海軍大臣ノ認可ヲ經テ、三十八年度ニ於テ臨時軍用費ヲ以テ長門無煙炭坑ヨリ石炭約三万三千噸ノ採掘ヲ爲サント欲シ、之カ命令ヲ下シタリ、因テ武田所長ハ同年六月下旬、三十九年三月十五日ヲ期限トシ、切込炭三万三千噸ノ採掘（一噸壹圓拾六錢）及ヒ之ニ附帶スル其ノ他ノ諸工事ヲ、内田鼎ニ請負ハシメ、三十八年七月一日之ニ著手セシメタリ、而テ戰役中ニ於ル採掘成績ハ左ノ如シ、

長門無煙炭礦出炭月次表

年 月	坑 名	桃ノ木坑	樫ヶ谷坑	合 計
三十八年四月		一、二二三、九三四 <small>噸</small>	一、〇四一、二三七 <small>噸</small>	二、二五五、一七一 <small>噸</small>

同	五	月	一、八五二、八六一	三、一八二、五四六	五、〇三五、四〇七
同	六	月	五八七、四〇三	九四八、四〇六	一、五三五、八〇九
同	七	月	一、〇四〇、三一八	五六三、四一九	一、六〇三、七三七
同	八	月	一、四八九、五二二	六二五、八五六	二、一一五、三七八
同	九	月	二、六八六、〇三七	一、二三四、二二七	三、九二〇、二六四
同	十	月	二、八三四、七四六	一、一六六、四二五	四、〇〇一、一七一
計			一一、七〇四、八二一	八、七六二、一一六	二〇、四六六、九三七

備考 開坑以來三十八年三月迄ハ出炭ナシ

三十八年十月ニ於テハ、長門無煙炭坑ノ開坑セルモノ、桃ノ木ニ於テ六ヶ所、櫛ヶ谷ニ於テ二ヶ所、合計八ヶ所ノ多キニ達シ、各本坑ノ延間數ハ六百二十八間五ニ及ヒ、孰レモ相應ノ出炭ヲ見タリ、就中櫛ヶ谷北向坑ハ、平和克復時ニ至ル迄ニ、其ノ主要部分ノ採炭ヲ終レリ、(第二圖及ヒ、第三圖參照)然レトモ麥川ニ於ル諸設備ハ、猶未タ整ハス、平和克復ノ當時、僅ニ基罐ノ据附ケヲ了シ、架空鐵索式ノ運炭裝置ハ、製造會社派遣技師ノ監督ノ下ニ、組立中ニ屬セリ、

因ニ言フ發電機ハ三十九年一月ニ至リテ漸ク運轉ヲ開始シ坑外運炭裝置及ヒ坑内排水唧筒等ハ同年二月ヨリ又坑内運炭機械ハ同年三月ヨリ運轉ヲ開始セリ

第四節 海軍採炭所

海軍採炭所ハ、福岡縣筑前國粕屋郡須惠村ニ在リテ、同國粕屋郡ノ新原海軍炭山(百七十八万九千七百七十六坪)

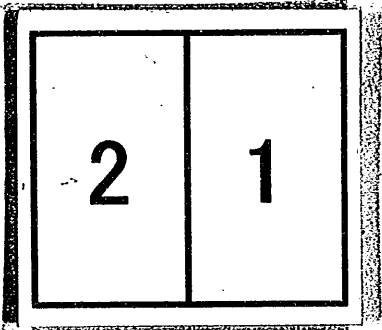
鞍手郡ノ御徳海軍炭山(四十六万坪)嘉穂郡ノ漆生海軍炭山(三十九万餘坪)ヲ管理スル所トス、而テ此ノ中、漆生炭山ハ無煙炭ヲ産出スルモ、其ノ質堅硬ニシテ、單獨ニ之ヲ燃燒セシムルコト能ハス、到底艦艇ノ燃料トシテ不適當ナルヲ以テ、敢テ之ヲ採掘セス、單ニ我カ海軍ノ豫備炭山トシテ之ヲ保有シ、三十七八年戰役中ニ於テモ、特ニ何等ノ施設ヲ爲スニ至ラザリキ、新原及ヒ御徳ノ兩炭山ハ、共ニ第二種炭タル有煙炭ヲ産出スルヲ以テ、開戰以來銳意其ノ出炭ニ努メタルノ結果、平和克復當時ニ在リテハ、兩炭山ニ於ル坑内外ノ經營、大ニ其ノ面目ヲ改メタリ、

第一目 新原炭山

抑新原炭山ト稱スルハ、福岡縣筑前國粕屋郡ノ内、宇美村、須惠村及ヒ仲原村ニ跨ル礦區ニシテ、其ノ面積百七十八万九千七十六坪ヲ有シ、(第四圖 參照)之ニ含存スル炭層ハ、三重炭及ヒ五重炭ヲ主ナルモノトシ、岩下炭、「ピリ」筋炭、一重炭及ヒ「ボク」炭等アリ、而テ此等各炭層ノ内、三重炭及ヒ五重炭ハ、第二種炭トシテ從來之ヲ採掘シ、岩下炭以下ノ各炭層ニ至リテハ、其ノ品質甚シク劣等ナルヲ以テ、嘗テ之カ出炭ヲ計畫セシコトナシ、

新原炭山ニ於ル既往ノ採炭方針ハ、平時ニ在リテハ敢テ出炭ヲ目的トセス、單ニ豫備炭山トシテ其ノ礦區ヲ保有シ、一朝事アルニ臨ミテハ、年額十二万噸ノ出炭ヲ爲シ得ルノ設備ヲ、常ニ完成シ置カントスルニアリタリ、是去明治三十三年元ノ新原採炭所ヲ廢シ、新ニ海軍採炭所官制ヲ發布セラレシ當時定メラレタル方針ニシテ、爾來此ノ目的ニ向ヒテ、毎年開鑿事業ヲ進メ來リシモノナルカ、經費豐ナラスシテ、其ノ經營未タ半ニモ達セサルニ、此ノ戰役ニ會セリ、

分割撮影ターゲット

分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

三十七七八年戰役中海軍長門無煙炭鑛
桃ノ木坑内狀況

千八百分之壹

凡例

豫定斷層線



自三十七年九月
至三十八年十月 坑内採掘跡



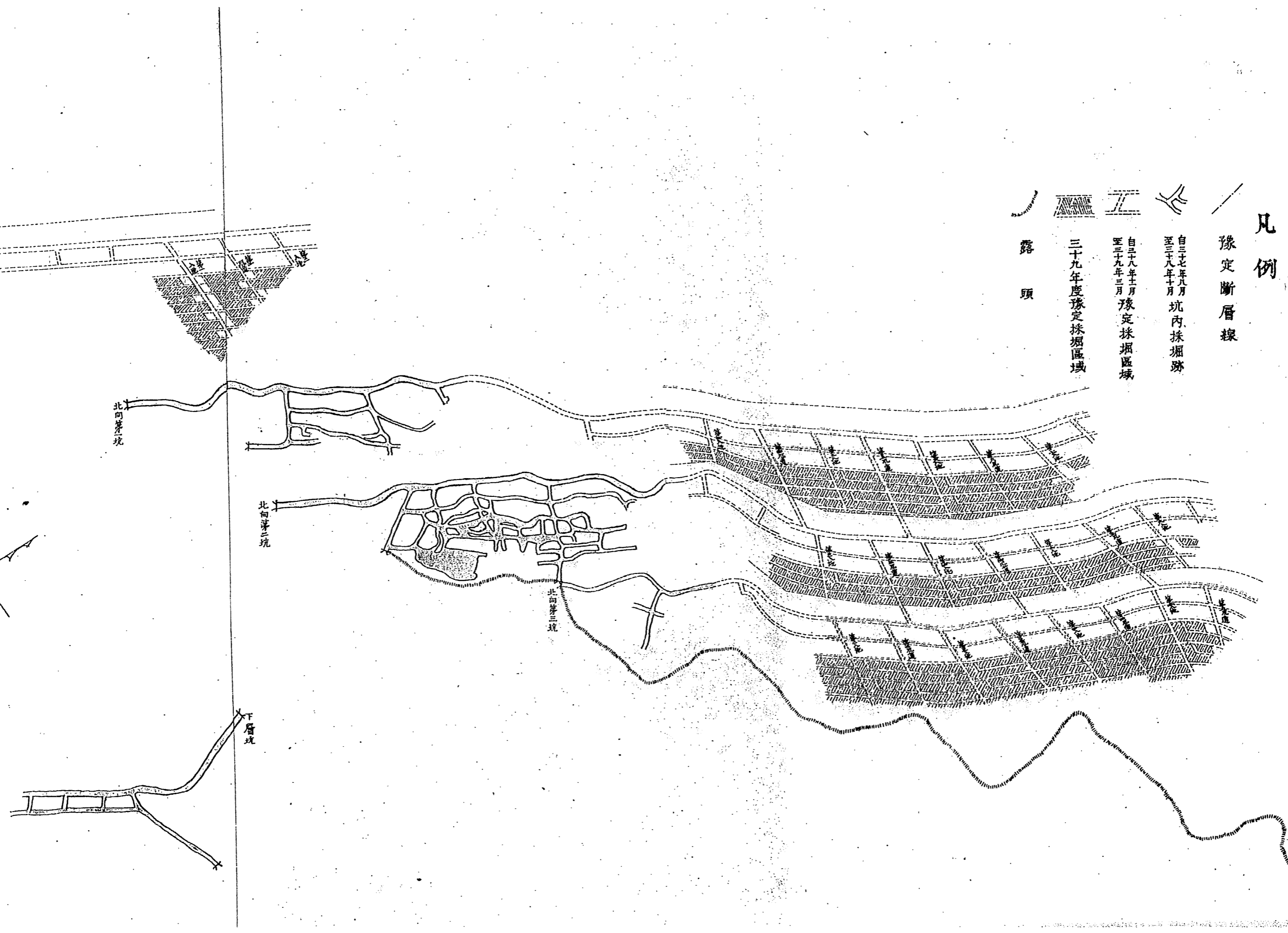
自三十八年十一月
至三十九年三月 豫定採掘區域

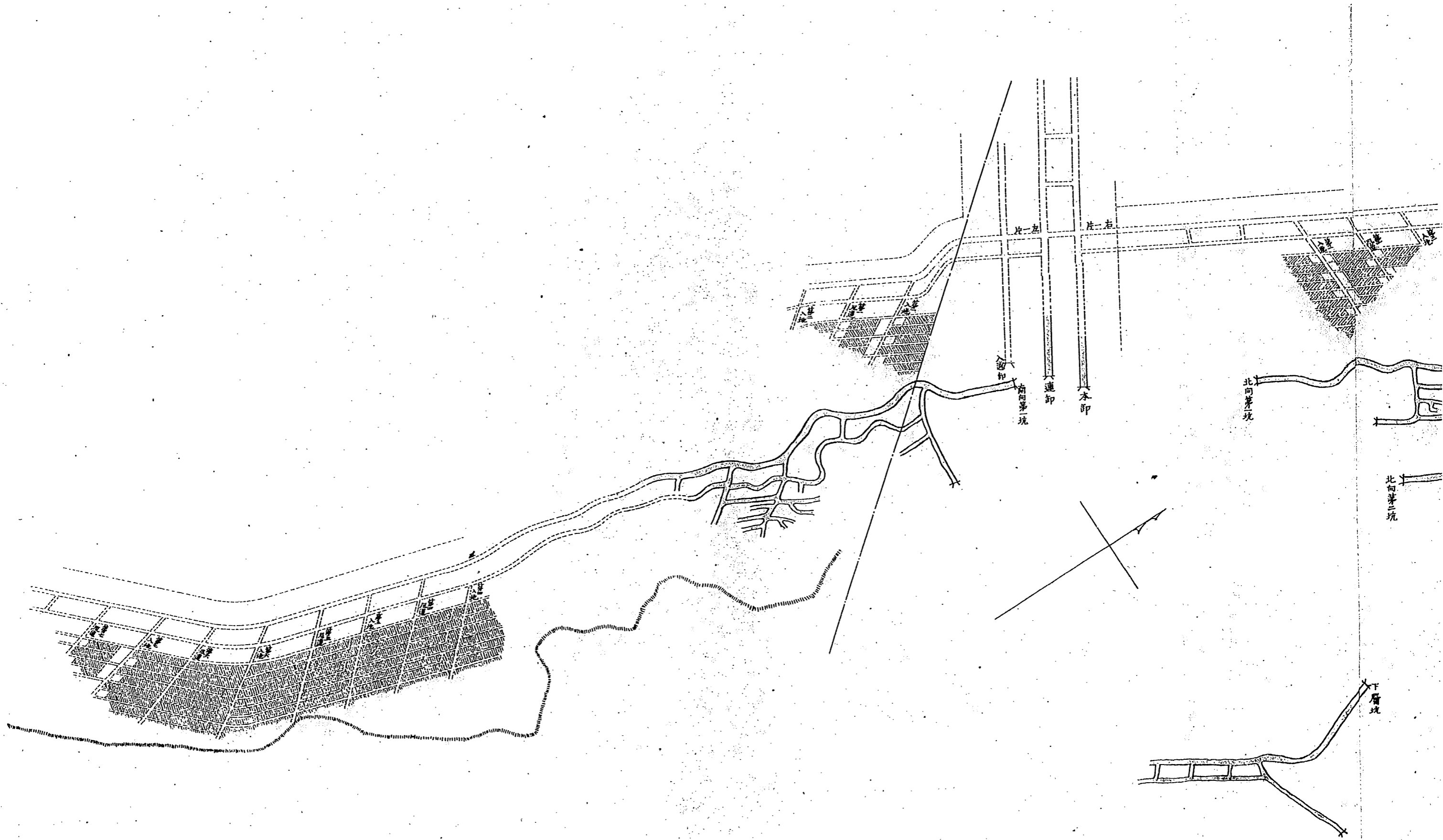


三十九年度豫定採掘區域

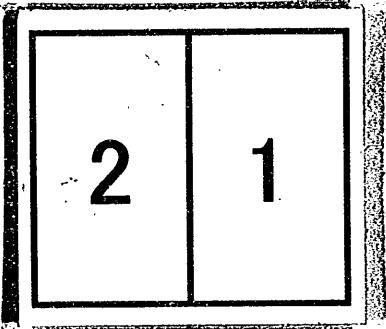


露頭





分割撮影ターゲット

分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

第三圖
 三十七八年戰役中海軍長門無煙炭鑛
 櫃ヶ谷坑内狀況

千八百分之壹

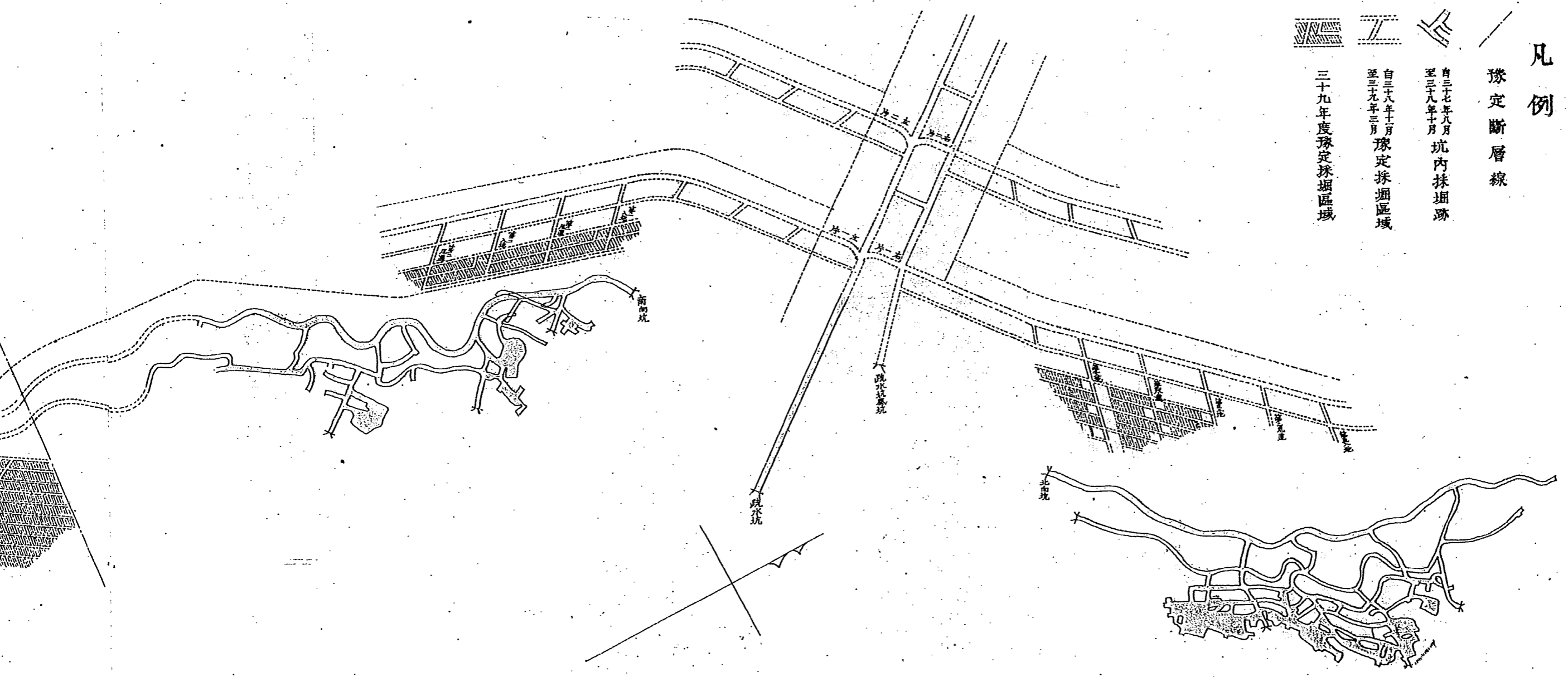
凡例

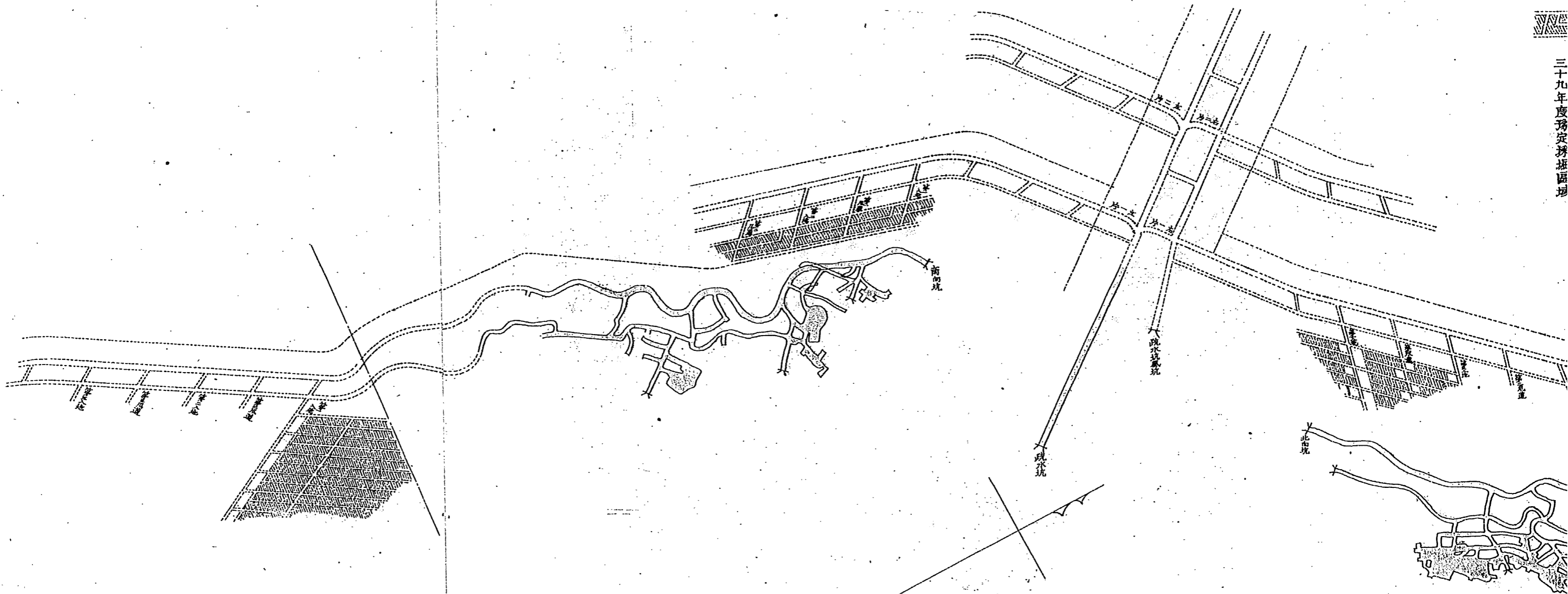
豫定斷層線

自三十七年八月坑内採掘跡
 至三十八年十月

自三十八年十月豫定採掘區域
 至三十九年三月

三十九年度豫定採掘區域



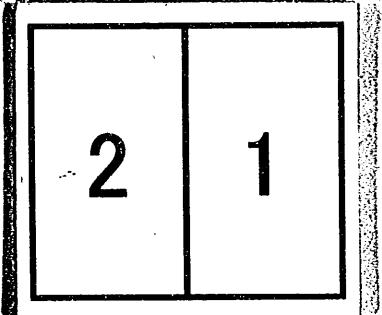


本炭山ニ於テ第一坑第二坑ト稱スルモノハ、(第四圖 参照)明治二十二年始テ新原村ニ開坑シタルモノナリト雖モ、第一坑ハ坑道ヲ開鑿スルニ際シ、數多ノ斷層ニ遭ヒテ之ヲ廢坑ト爲シ、又第二坑ハ開坑以來石炭ヲ採掘スルコト約十年、終ニ其ノ大部分ヲ掘盡シタルヲ以テ、三十三年五月之ヲモ廢坑ト爲シタルカ故ニ、開戰當時ニ於テ採炭シ得ヘキモノハ、獨リ櫻原ニ於ル第三坑(本坑ハ二十五年中往時ノ掘跡ヲ浚掘シテ採炭ニ著手シタルモノ)ト官ノ前ニ於ル第四坑トノ二坑アリシノミ、而テ後者ハ三十五年ノ開坑ニ屬シ、地表ノ設備ハ完備セス、只僅ニ其ノ本連兩卸坑道ニ於テ漸ク採炭シ得ルノミナリシヲ以テ、一朝一夕ニシテ多量ノ出炭ヲ望ム可カラス、因テ徐ニ第三坑ニ於ル坑内ノ開鑿事業ヲ増進シ、一面ニハ第四坑内外ノ諸設備ヲ整備シ、以テ出炭量ノ増大ヲ圖ラントセリ、而テ開戰後三十六年度末ニ至ル間ハ、既定ノ計畫ヲ以テ採炭ヲ終リシカ、三十七年三月二十八日、有馬艦政本部長ハ、三十七年度ニ於テ、新原炭山ヨリ艦船用トシテ切込炭二万噸ヲ採掘スルノ必要ヲ認メ、海軍大臣ノ決裁ヲ仰キテ、之ヲ稻葉採炭所長ニ訓令セリ、而テ之ト同時ニ、吳海軍工廠ニ於ル工業用トシテ、同年度ニ於テ、同炭一万五千噸ヲ採掘スヘキ旨ヲ訓令セリ、是ニ於テ同所長ハ、同年四月一日其ノ採掘及ヒ之ニ伴フ坑道ノ開鑿ヲ、請負人太田清藏ト契約シ、開鑿跡ノ粹入及ヒ坑道ノ修補工事等ハ、從來ノ如ク官ニ於テ之ヲ施行スルコト、爲シ、即日ヨリ事業ニ著手セシメ、急速採炭シテ、一面ニハ艦船用トシテ佐世保需品庫ニ輸送シ、他面ニハ工業用トシテ吳海軍工廠ニ回漕セリ、然ルニ採炭ノ急速ナルヲ期シ、之ニ伴ウテ坑道ノ開鑿ヲ進行セシムルコト能ハサリシヲ以テ、艦政本部長ハ戰局ノ發展ニ鑑ミ、三十八年度ニ於テモ、引續キ約三万五千噸

ノ採掘ヲ爲サシメントセハ、更ニ坑道ヲ進鑿セシメ置クノ必要ヲ認メ、同年七月海軍大臣ノ決裁ヲ仰キテ、臨時軍事費艦營費金參萬圓以內ヲ以テ、豫メ坑道ヲ進鑿セシメタリ、蓋新原炭ハ燐素及ヒ硫黃ノ含有量甚タ少ク、純一無雜ナルニ依リ、製鋼用トシテ最適當ナルカ故ニ、例ヒ戰局ノ進行上、三十八年度内ニ於テ艦船用トシテ需用少キモ、之ヲ製鋼用トシテ吳海軍工廠ニ輸送セハ、多々益、辨スルヲ以テナリ、

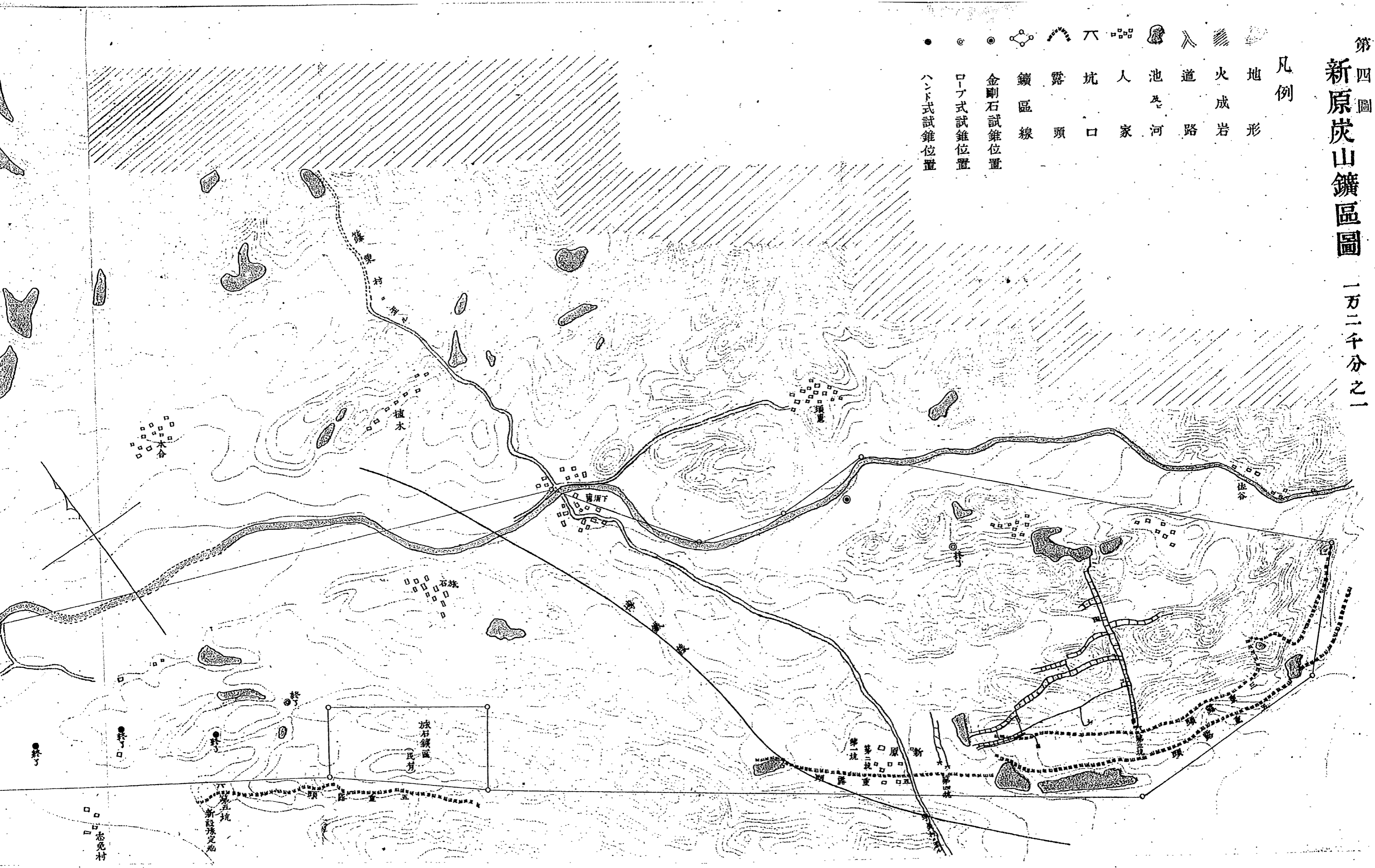
抑從來本炭山經營ノ方針ハ、已ニ前記スルカ如ク、平時ハ單ニ豫備炭田トシテ保存シ、戰時ニノミ大ニ採掘スル目的ナリシト雖モ、之ヲ既往ノ實績ニ鑑ミ、且其ノ炭質有煙ニシテ、戰時艦艇ノ燃料ト爲スニ足ラサルヲ以テ、寧ロ本炭山ノ經營ヲ積極的トシ、平時ト戰時トヲ間ハス、大ニ採掘シテ艦船ノ燃料ニ供シ、且工業用トシテ之ヲ各海軍工廠ニ供給スルニ如カスト爲セリ、蓋吳海軍工廠ニ於テ、裝甲鋳ノ製造事業漸ク緒ニ就キ、石炭ヲ消費スルコト年額八萬噸以上ニ達シ、其ノ大部分ハ裝甲鋳ノ製造用トシテ消費スルモノナルカ故ニ、炭質ハ燐素及ヒ硫黃分稀少ニシテ純一無雜ナラサル可カラス、然ルニ之ヲ普通ノ市場ニ需ムルトキハ、如何ニ其ノ檢査ノ法ヲ嚴格ニスルモ、往々劣等炭ヲ混入シ、爲メニ裝甲鋳ノ製造事業ヲ阻害スルコトアリ、是同工廠ニ於テ、純一無雜ナル新原炭ノ供給ヲ望ム所以ニシテ、他ノ工廠ニ於テモ、亦需用甚タ少カラサルナリ、是ニ於テ三十七年十二月、艦政本部長ハ海軍大臣ノ認可ヲ經テ、工學士石田收ニ囑託シ、海軍採炭所附海軍技師石橋政信ト相協力シテ、年額約八萬噸ヲ採掘スルノ計畫ヲ調査セシメタリシト雖モ、(調査報告書ハ備考文書第六號參照)經費ノ點ニ於テ、三十八年度ヨリ直ニ之ヲ實施セシムルコト

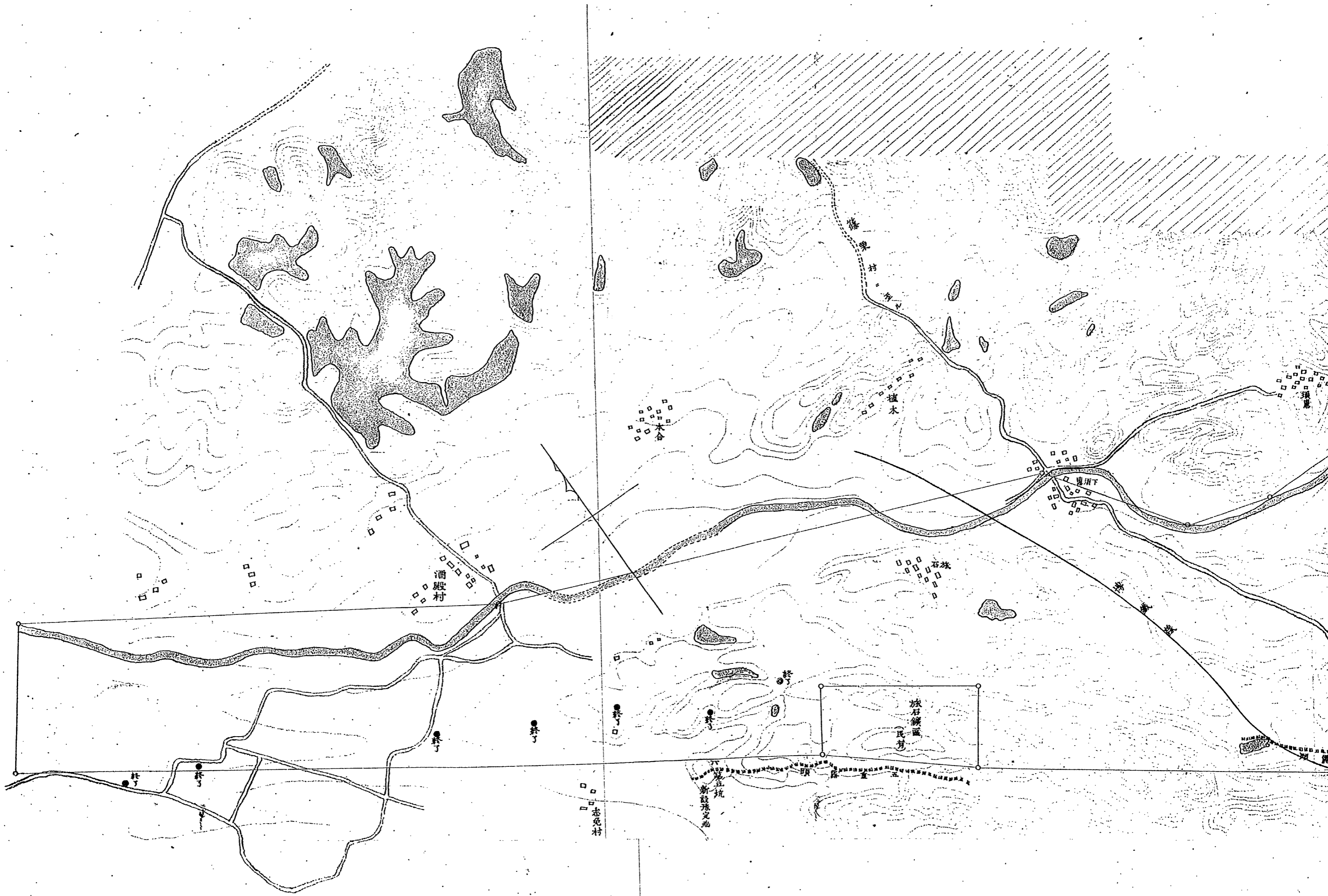
分割撮影ターゲット

分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

第四圖 新原炭山鑛區圖 一万二千分之一

- 凡例
- ハンド式試錐位置
 - ロフ式試錐位置
 - 金剛石試錐位置
 - ◊ 鑛區線
 - ⌒ 露頭
 - ⌒ 坑口
 - 人家
 - ⊕ 池及河
 - ⌒ 入道路
 - ▨ 火成岩
 - ⌒ 地形





能ハサルノ事情アリ、因テ同月更ニ右兩人ヲシテ、三十八年度ニ於テ徒費濫掘ヲ爲サス極力採掘ヲ爲スモノトセハ、果シテ若干ノ炭額ヲ採掘シ得ルヤ否ヤヲ調査セシメタル結果、優ニ切込炭五万噸ヲ採掘シ得ルコト明ニナリシヲ以テ、三十八年二月二十四日、艦政本部長ハ海軍大臣ノ決裁ヲ經テ、臨時軍事費ヲ以テ、三十八年度ニ於テ艦船用トシテ、新原炭三万噸ヲ採掘シ、之ヲ佐世保海軍工廠ニ送附スルコトヲ命シ、且同年度ニ於テ工業用トシテ同炭二万噸ヲ採掘シ、之ヲ吳海軍工廠ニ送附スヘシト訓令セリ、而テ採炭所長ハ請負人内田鼎ヲシテ、同年四月一日ヨリ其ノ採掘ニ從ハシメタリ、

編者曰ク新原炭ノ積極的採掘ヲ企畫シタル起源ハ主トシテ吳海軍工廠ニ於テ之ヲ製鋼用ニ供セントスルニ在リシモ爾後ノ經驗ニ徴スルニ新原炭ハ瓦斯ノ發生力比較的少ク爲メニ製鋼爐ノ瓦斯發生用トシテハ不適當ナルヲ以テ同工

廠ニ於テハ製鋼爐用トシテハタ張炭ヲ専用シ新原炭ハ之ヲ基燻ノ燃料ニ供スルニ至レリ

戰役開始以來、一般ノ壯丁ハ兵役ニ徵集セラル、モノ多ク、又幾多ノ軍用事業ニ使役セラル、ヲ以テ、坑夫ノ募集ニ影響ヲ來シ、加フルニ開戦以來、市場ノ炭價ハ、急激ナル暴騰ヲ來シ、爲メニ小炭坑ヲ經營スルモノ續出シ、延テ一層坑夫ノ缺乏ヲ感スルニ至リ、殊ニ三十八年度ニ於テハ、戦局ノ進行ニ伴ヒ、著シク坑夫ニ缺乏ヲ告ケ、之ヲ近村ニ求ムルコト難ク、爲メニ三十八年度ニ於テ採掘セシメタル請負賃額ハ、三十七年度ニ比シ、約一割ノ増加ヲ見ルニ至レリ、由來新原炭ヲ搬出スルニハ從來炭坑ヨリ一旦千代村炭庫(炭坑ヲ去ルニ里半)ニ送り、同所ヨリ川船ニ依リテ、之ヲ博多灣ニ出スカ、又ハ九州鐵道株式會社雜餉限驛(炭坑ヲ去ルニ里)ニ送り、同所ヨリ鐵道便ニ

三十七七八年戰役中ニ於ル新原炭山坑内之狀況

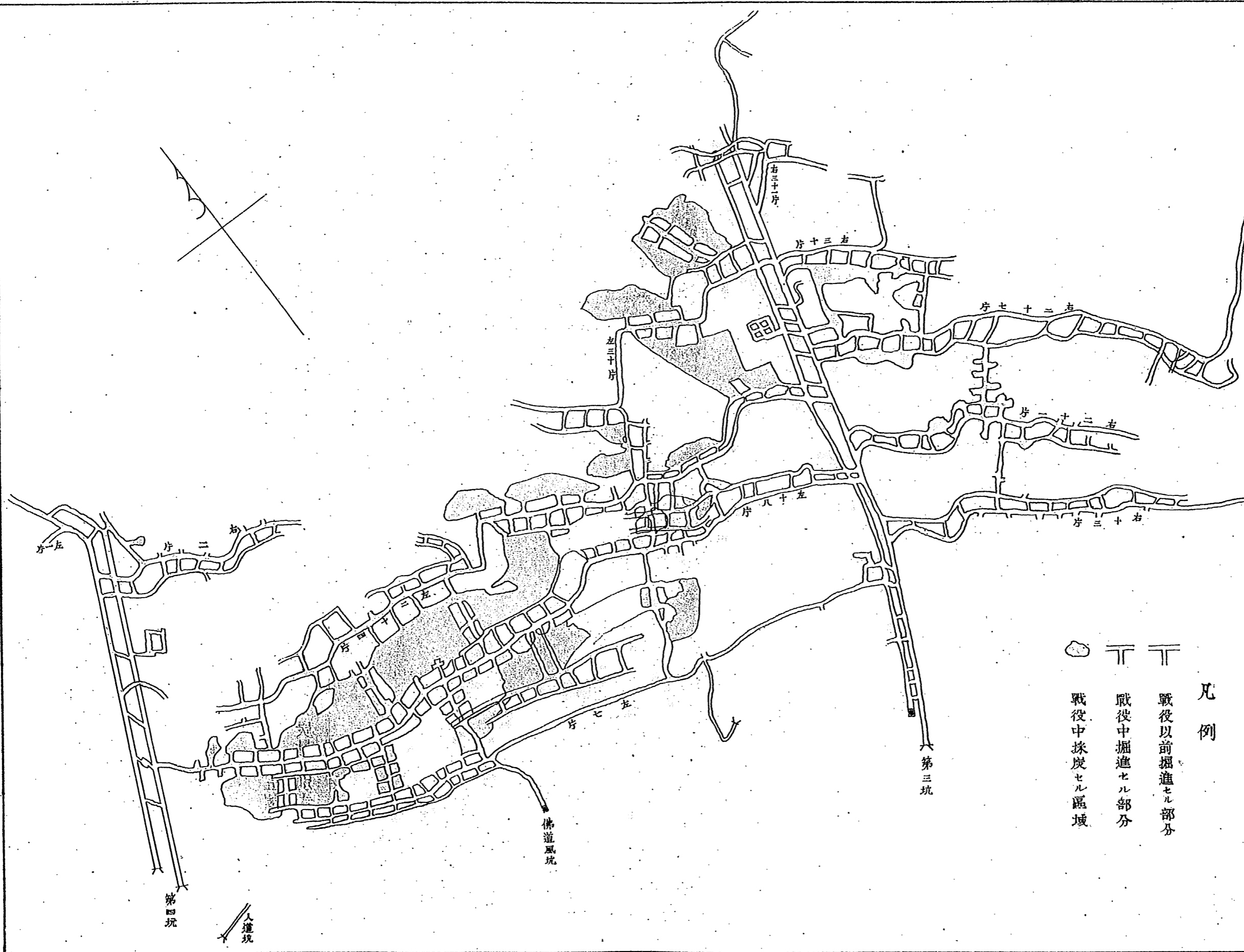
三千六百分之壹

凡例

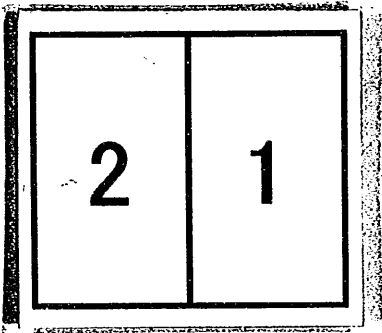
戰役以前掘進セル部分

戰役中掘進セル部分

戰役中採炭セル區域

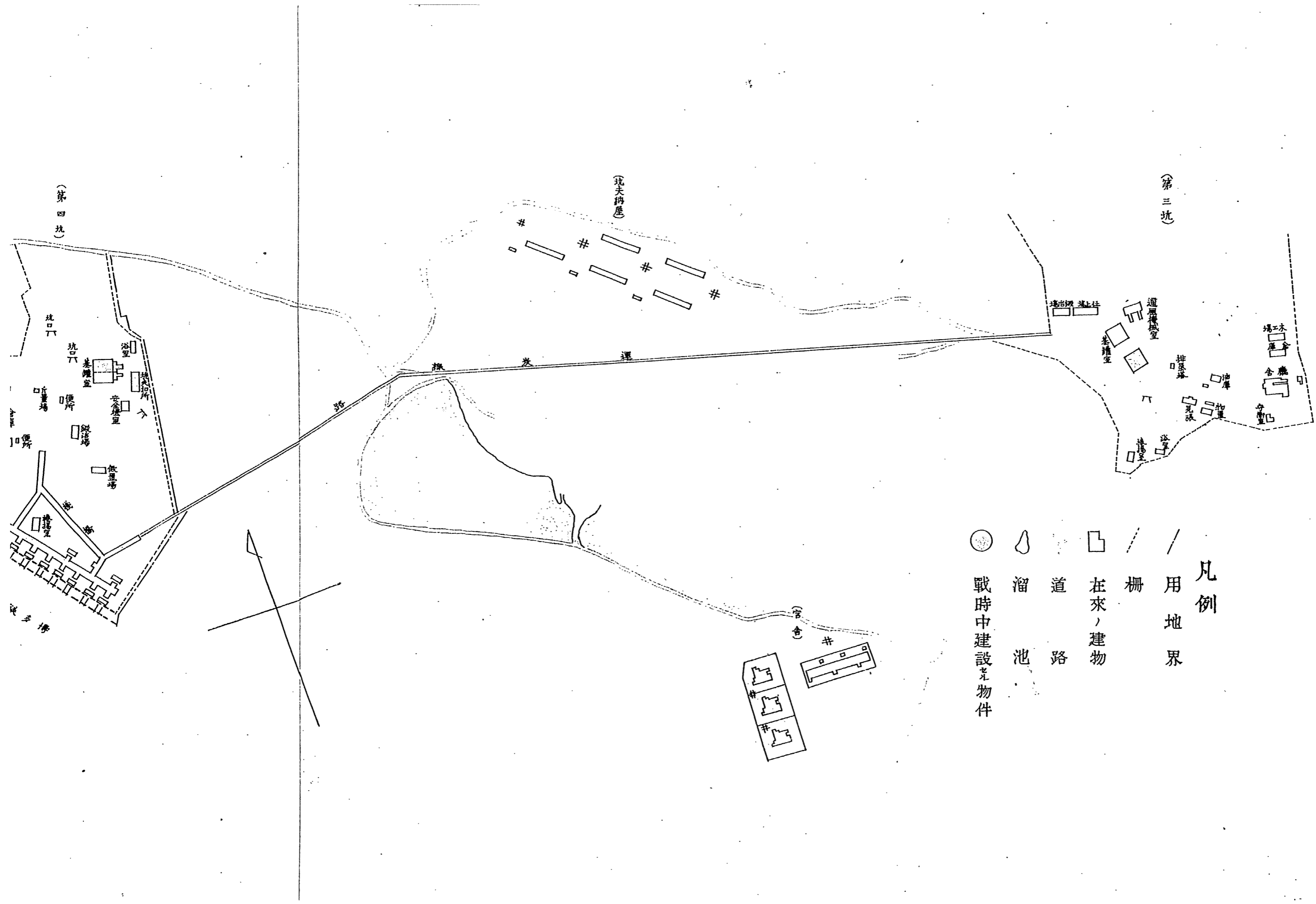


分割撮影ターゲット

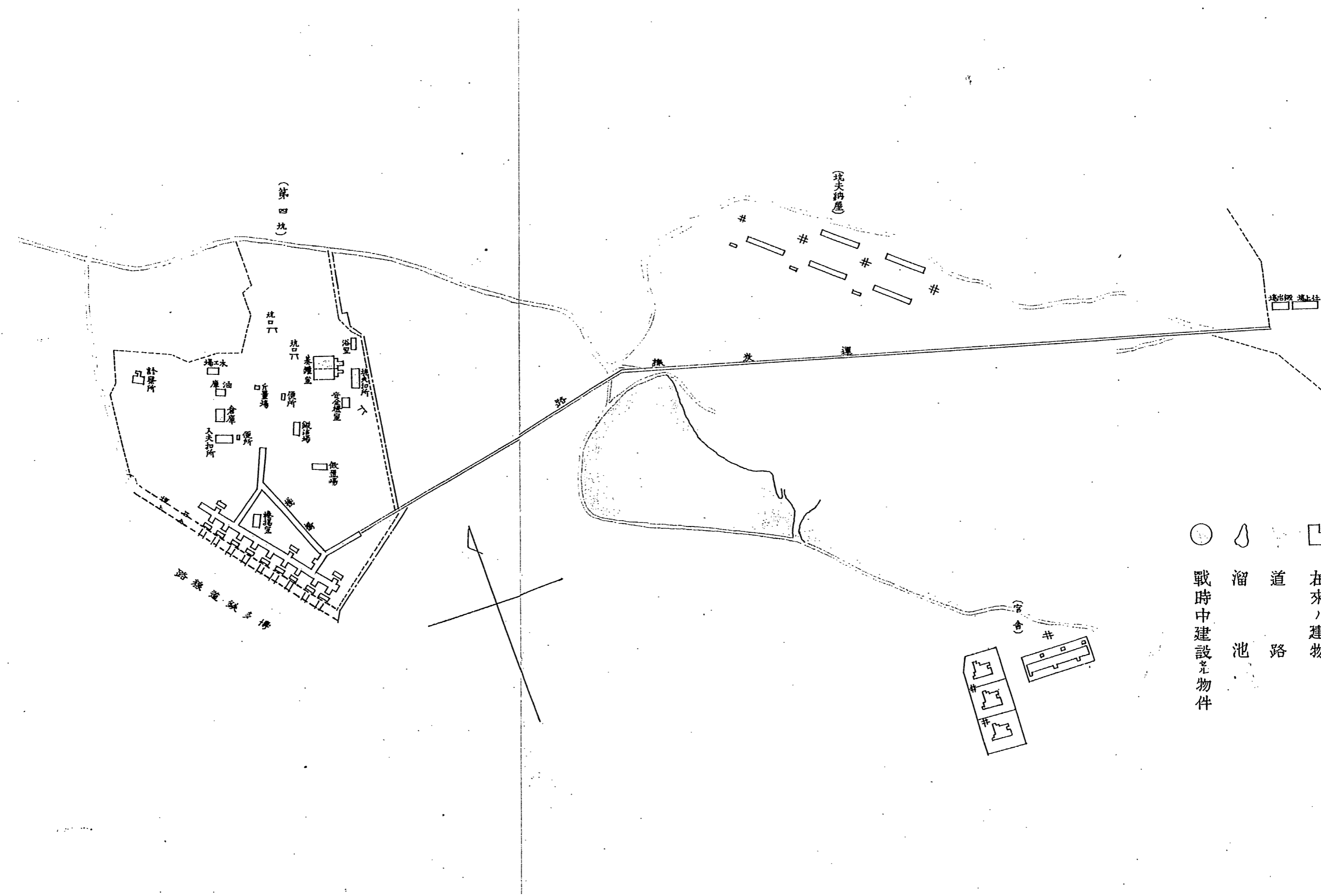
分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

第六圖
三十七七八年戰役中ニ於ル新原炭山坑外建物

貳千四百分之壹



- 凡例
- / — / 用地界
 - / — / 柵
 - 在來ノ建物
 - / — / 道路
 - ◊ 溜池
 - 戦時中建設物



- 戦時中建設物件
- ◡ 溜池
- ⋯ 道路
- 在来ノ建物

依リテ、之ヲ佐世保軍港ニ送ルノ二途ニシテ、孰レニシテモ二里若クハ二里半ノ里道ヲ、荷車ヲ以テ運搬セサル可カラズ、隨テ頗ル高價ナル運賃ヲ要セシト雖モ、戰役開始前、博多灣鐵道株式會社ナルモノ起リ、粕屋郡一圓ノ出炭ヲ吸集シテ、之ヲ博多灣口西戸崎ニ送り、同地ヨリ各地ニ回漕セントノ計畫ヲ立テ、三十七年一月、先ツ西戸崎及ヒ須惠間（此ノ距離十四哩）ノ鐵道ヲ敷設開通シタルニヨリ、之ヲ利用シ本炭山ト須惠間（距離一哩餘）トハ輕便鐵道ニ依テ馬力ニ託セリ、後チ三十八年六月、須惠及ヒ新原間ノ鐵道亦開通シ、茲ニ始テ輸送上大ニ便益ヲ得ルニ至レリ、

由來炭礦ヲ經營スルニハ、常ニ試錐探炭ノ法ヲ講スルノ要アルヲ以テ、戰役開始前ニ於テ、ロープ式機械ニ基ヲ用ヒテ、常ニ試錐ヲ忘ラサリシト雖モ、後來大ニ出炭ノ量ヲ増大スルノ計畫ヲ爲サントセハ、全礦區ニ互リテ廣ク試錐ノ法ヲ講スルノ必要アリ、是ニ於テ採炭所長ハ、戰役中金剛石試錐機一基ヲ購買シ、大ニ試錐ノ速成ヲ圖ルト同時ニ、手動試錐法ヲ礦區内數ヶ所ニ試

ミタリ、（第四圖參照）

戰役中本炭山ニ於テ石炭ヲ採掘シタルハ、主トシテ第三坑及ヒ第四坑ニシテ第五圖ニ示スカ如ク、而テ戰役中設備シタル建造物ハ第六圖ニ示スカ如シ、又採掘シタル炭量ハ別表ニ示スカ

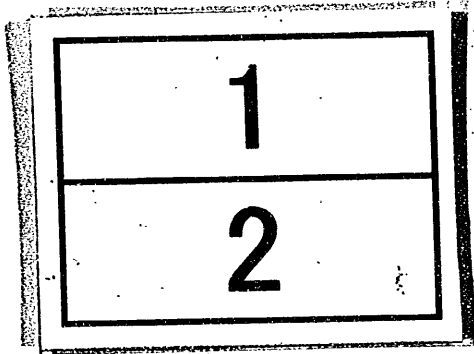
三十七八年戰役中新原出炭配附表																
炭種	上等炭		雜用炭		切 込				炭		粉及粗炭 炭ヒ悉		合 計			
	配炭 年 月	佐世保	海軍工	廠需品	庫	吳工海軍	品廠需	計工海軍	計工海軍	(全業用)	計	佐世保		海軍工	廠需品	庫
37—2	744000	386000	—	—	—	—	—	—	—	—	1130000	—	—	—	—	1130000
3	1415000	407000	—	—	—	—	—	—	—	—	1822000	—	—	—	—	1822000
4	—	—	—	—	0	—	—	—	—	—	0	—	—	—	—	0
5	—	—	—	—	0	—	—	—	—	—	0	—	—	—	—	0
6	—	—	—	—	2520000	—	—	—	—	—	2520000	—	—	—	—	2520000
7	—	—	—	—	2480000	—	—	—	—	—	2480000	—	—	—	—	2480000
8	—	—	—	—	0	—	—	—	—	828060	828060	—	—	—	—	828060
9	—	—	—	—	0	—	—	—	—	577380	577380	—	—	—	—	577380
10	—	—	—	—	291900	—	—	—	—	1565100	1857000	—	—	—	—	1857000
11	—	—	—	—	1722250	—	—	—	—	1576260	3298510	—	—	—	—	3298510
12	—	—	—	—	805800	631380	—	—	—	—	1437180	2546115	—	—	—	3983295
38—1	—	—	—	—	2043600	631380	—	—	—	—	2674980	—	—	—	—	2674980
2	—	—	—	—	3672465	757080	—	—	—	—	4429545	—	—	—	—	4429545
3	—	—	—	—	6463985	8066400	—	—	—	—	14530385	—	—	—	—	14530385
4	—	—	—	—	0	—	—	—	—	—	0	—	—	—	—	0
5	—	—	—	—	0	—	—	—	—	—	0	—	—	—	—	0
6	—	—	—	—	0	—	—	—	—	—	0	—	—	—	—	0
7	—	—	—	—	677000	—	—	—	—	—	677000	—	—	—	—	677000
8	—	—	—	—	2316300	—	—	—	—	1713540	4029840	—	—	—	—	4029840
9	—	—	—	—	3088200	—	—	—	—	2492880	5581080	—	—	—	—	5581080
10	—	—	—	—	3941100	—	—	—	—	484000	4425100	—	—	—	—	4425100
合計	2159000	793000	30022600	10086240	9237220	52298060	2546115	54845175								

第二目 御徳炭山

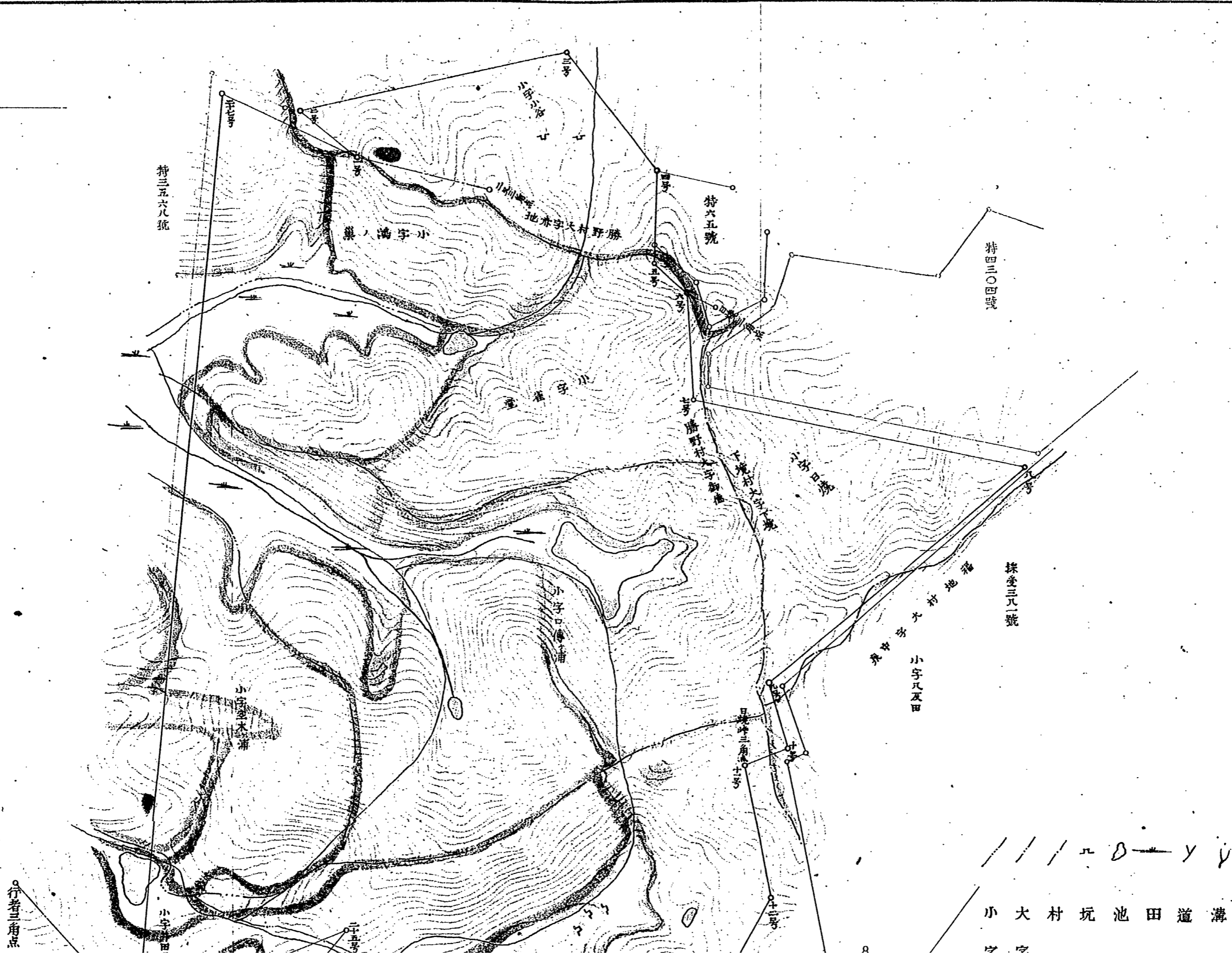
御徳炭山ハ福岡縣鞍手郡ノ内勝野村、下境村及ヒ福地村ノ三村ニ跨リ、礦區四十六万八百二十七坪ヲ有ス、(第七圖 参照)

本炭山ハ元ト海軍豫備炭山トシテ、單ニ其ノ礦區ヲ保有スルニ過キサリシカ、明治三十三年以來、千早正次郎ナルモノニ命シ、海軍採炭所長監督ノ下ニ、同炭山ニ於ル開坑、其ノ他採炭ニ要スル一切ノ設備ヲ爲サシメ、年々我カ海軍ニ於テ要スルトコロノ炭量ヲ、請負ヲ以テ採掘セシメ來リシカ、戰役以前ニ在テハ、同炭山ニ於ル出炭量、一ケ年約五六万噸ニ過キサリシト雖モ、戰役開始以降、我カ海軍ニ於テ雇入レタル船舶ノ燃料トシテ、巨額ノ石炭ヲ要スルヲ以テ、之ヲ市場ニ需ムルヨリモ、海軍ニ屬スルトコロノ炭山ヨリ採掘セハ、品質ハ比較的優等ニシテ、然モ遙ニ廉價ナルヲ得ヘキカ故ニ、御徳炭礦ニ於ル出炭額ヲ増大スル爲メ、請負人ヲシテ同炭坑ノ内外ニ於ル設備ヲ増營セシメ、三十七年度ニ於テ、艦船用トシテ切込炭十萬噸、舞鶴海軍工廠用トシテ同炭二萬噸、又吳海軍工廠用トシテ雜用炭八分目篩ノモノ三千噸ヲ採掘セシムルニ決シ、同年四月一日稻葉採炭所長ト千早正次郎トノ間ニ其ノ契約ヲ締結シ、同日ヨリ直ニ採掘ニ從事セリ、由來御徳炭礦ニ含存スル炭層ハ、其ノ數十數層ノ多キニ達シ、其ノ中海軍用トシテ使用ニ適スルモノハ、「カンカン」層、三尺層、尺無層及ヒ五尺層ノ四層ニシテ、就中三尺層及ヒ五尺層ハ、品質最優良ナルヲ以テ、開戰前ニ於テハ、此ノ二層ヨリ出ツル塊炭ヲ選別シテ、之ヲ艦艇用ニ供シ、尺無層及ヒ「カンカン」層ハ、之ヲ工業用ニノミ供シ居リシモ、戰役開始以來、海軍艦政本部ハ

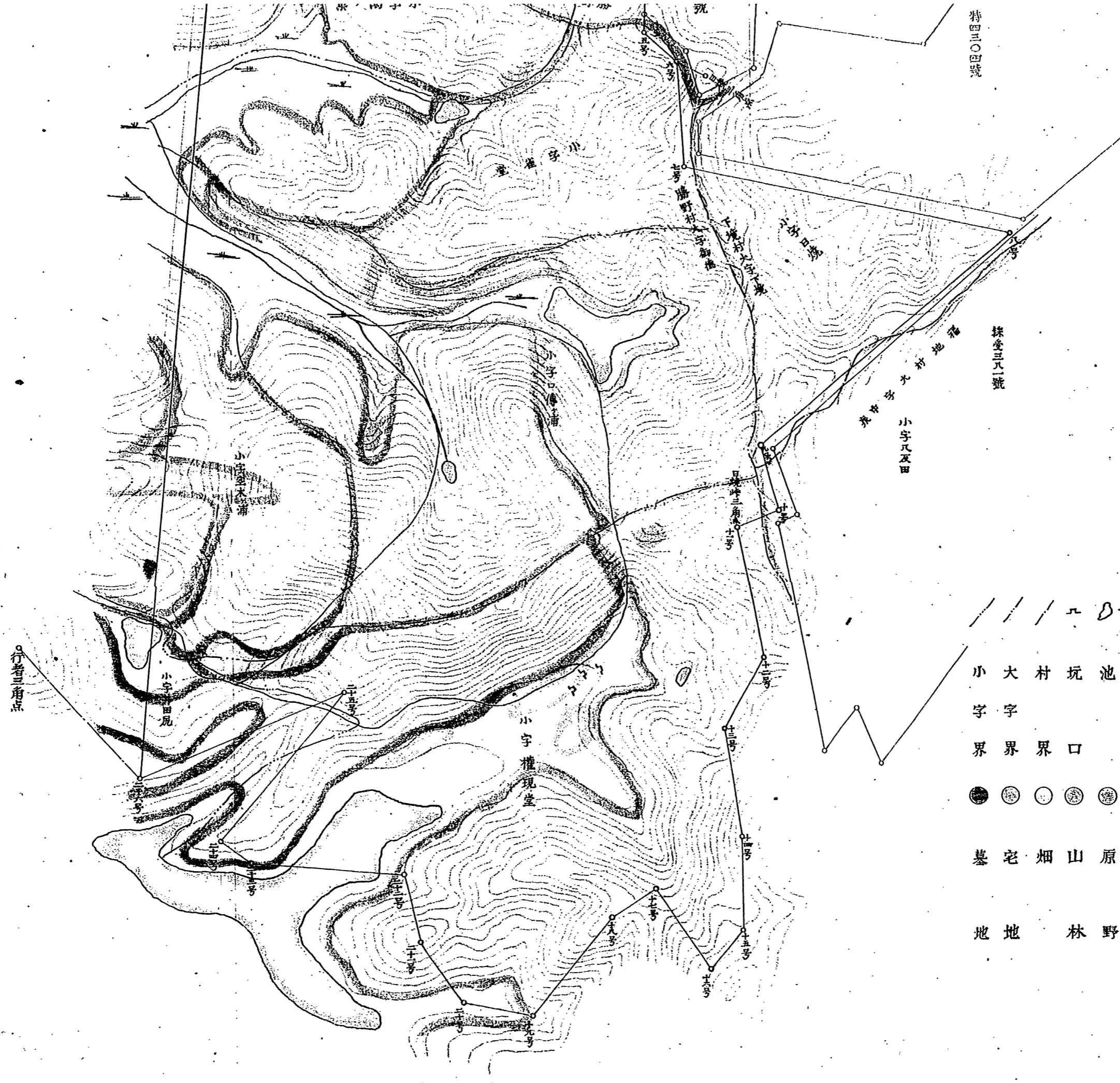
分割撮影ターゲット

分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

第七圖
御徳炭山鑛區圖
六千分之壹



山鑛區圖 六千分之壹



特四三〇四號

株壹三二一號

小字八反田
小字地
小字地

行者三角点

溝 道 田 池 坑 村 大 小

凡例
溝 道 田 池 坑 村 大 小
字 界 界 界 口 路

墓 宅 畑 山 原 鑛 隣
地 地 林 野 區 鑛

墓 宅 畑 山 原 鑛 隣
地 地 林 野 區 鑛

本炭山ヨリ採掘シタル石炭ヲ以テ、主トシテ海軍運送船ノ燃料ニ供スルノ方針ヲ取リシニ依リ、前記四層ヨリ採掘セシモノハ選別ヲ爲サス、共ニ相混シテ出炭セシメタリ、即チ選別炭ト區別シテ之ヲ切込炭ト稱セリ、

然ルニ三十七年六月二十五日夜來降雨甚シク、御徳炭山ノ西方ニ流ル、嘉麻川ハ、漸次其ノ水量ヲ増加シ、將ニ漲溢シテ堤防ノ低所ヲ超エントスルニ至レリ、是ニ於テ採掘請負人ハ各所ニ人員ヲ配置シ、有ラユル防備ノ手段ヲ盡シテ警戒スル所アリシカ、午後六時ニ至ルモ豪雨猶邊マスシテ、水勢ハ愈々加リ、同八時頃終ニ石炭積場ヲ距ル二十間餘ノ上流ニ於テ、堤防ヲ缺潰スルコト約六間ニ及ヒ、河水ハ一面ニ汎濫シ、澎湃タル勢ヲ以テ本坑及ヒ第四坑方面ニ奔流シ、其ノ第一築堤ヲ衝キテ之ヲ缺潰シ、坑夫納屋十數棟ニ侵水セリ、而テ第三坑口附近ハ、舊採掘跡ニ近キヲ以テ地表陷落シ、爲メニ家屋四棟ヲ埋没シタリ、又第一築堤ノ缺潰スルヤ、汎濫セル水ハ更ニ第二築堤ニ薄リテ、直ニ其ノ數間ヲ破壊シ、第四坑口附近地表ノ陷落スルコト約百坪ニ及ヒ、次テ水流ハ渦ヲ爲シテ同坑内ニ侵入シ、二十六日午前三時遂ニ本坑及ヒ第三坑ニモ満水スルニ至レリ、是ニ於テ稻葉採炭所長ハ採炭所附海軍技手中口千代平ヲ特派シテ、其ノ被害ノ状況及ヒ復舊ノ方法等ニ就キ實査セシメタルニ、本坑竝ニ第三坑及ヒ第四坑ハ已ニ満水シ、赤地及ヒ權現堂ノ一坑ハ、幸ニ其ノ位置高所ニアルヲ以テ、水ハ坑口ヨリ約三十五間ノ坑奥ニ止リシモ、本坑ト共ニ採炭區域ノ全部ヲ失ヒシモノニシテ、各坑内ニ入りシ總水量ハ約二十七万立坪ニ及ヒ、之ヲ排水センニハ約六箇月ヲ要スト爲セリ、而テ排水著手後二月月ニシテ、一日約百

八十噸ノ切込炭ヲ採掘シ得ヘク、漸次排水事業ノ進捗スルニ隨ヒ、其ノ出炭額ヲ増加スルニ至ルヲ以テ、切込炭ハ年度内ニ於テ豫定額ヲ採掘シ終ルコトヲ得ヘシト雖モ、雜用炭ハ從來本坑ノ下層及ヒ第五坑ヨリ之ヲ採掘シ來リタルモノニシテ、之ヲ採掘スルニ至ラシメントスルニハ、多數ノ時日ヲ要スルカ故ニ、年度内ニ豫定量ヲ採掘スルコト能ハスト、是ニ於テ稻葉採炭所長ハ海軍艦政本部長ノ認可ヲ經テ、雜用炭ノ未採掘額一万二千噸ノ採掘契約ヲ解除セリ、爾後採掘請負人千早正次郎ハ、銳意シテ水害ノ復舊ニ努メ、第三坑及ヒ第四坑附近ノ陷落セル部分ニハ埋立工事ヲ行ヒ、疏水溝及ヒ下水溝ヲ設ケテ排水ノ道ヲ講シ、各坑内ノ揚水事業ヲ二期ニ區別シ、第一期ニハ揚水唧筒ヲ坑口ニ備ヘテ、第一唧筒座ニ至ル迄ノ水ヲ排除シ、第二期ニ於テハ唧筒ヲ第一唧筒座ニ移シテ、卸底ニ至ル水ヲ排除セント欲シ、日夜工夫ヲ督勵シテ著々排水シ、同年八月下旬漸ク一部ノ採炭ヲ開始シ得ルニ至ラシメ、十一月ニハ殆ト全部ノ排水ヲ終レリ、

三十八年三月齋藤海軍艦政本部長ハ、(三十八年一月七日有馬海軍中將ハ吳鎮守府司令長官ニ轉シ同日齋藤海軍中將艦政本部長ニ補セラレ)三十八年度ニ於テ、御徳炭山ヨリ切込炭十一万七千噸、雜用炭二万噸、合計十三万七千噸ヲ採掘スヘキコトヲ採炭所長ニ訓令シ、鈴木同所長ハ(海軍機關中監鈴木富三ハ三十八年三月十五日同所長ニ補セラレ)請負人千早正次郎ト其ノ採掘ヲ契約セリ、

斯テ請負人千早正次郎ハ、坑夫ヲシテ日夜其ノ採掘ヲ爲サシメツ、アリシニ、同年七月下旬連日ニ彌リテ降雨アリ、爲メニ御徳炭礦ノ西方ヲ横流スル嘉麻川ハ甚シク増水シテ、同月二十六

日終ニ堤防ヲ越エ、水ハ坑口防禦ノ築堤ヲ衝キテ之ヲ缺潰シ、坑口附近ノ土地ヲ陷落セシメテ、地表ニ在ル家屋ヲ没シ、同夜半終ニ本坑第二坑及ヒ第五坑ノ全部ニ侵水スルニ至レリ、顧ミレハ本炭山ハ三十七年六月水害ヲ蒙リテヨリ以降僅ニ一年餘、採掘請負人ハ之カ復舊ニ多額ノ費用ヲ支出シテ、其ノ瘡痍未タ癒エス、坑底ハ猶之ヲ乾了セシムルニ至ラサルニ、再此ノ水害ニ遇ヒ、損害ヲ蒙ルコト前回ニ比シ遙ニ多大ナルヲ以テ、今後之カ復舊ニ全力ヲ傾注スルモ、一日三百噸ノ出炭ヲ見ルニ至ルハ、遠ク二ヶ月餘ノ後ナルヘキヲ以テ、此ノ間ハ徒ラニ坑夫ヲシテ遊食セシメサルヘカラス、甚タ不經濟ナルカ故ニ、請負人千早正次郎ハ同八月上旬ニ於テ、一時其ノ坑夫ヲ解雇セリ、是ニ於テ山本海軍大臣ハ、御徳炭坑復舊事業方針取調委員會ヲ設ケ、海軍中將齋藤實ヲ同委員長ニ、海軍大佐岩崎達人、同伊藤乙次郎、海軍機關大監市川清次郎、海軍主計大監眞野秀雄、海軍機關中監鈴木富三及ヒ海軍主計中監宇都官鼎ヲ委員ニ任命シ、調査スル所アラシメシカ、同委員會ハ八月十八日左ノ決議ヲ爲セリ、

御徳炭坑復舊事業方針取調委員會決議

- 一、今回ノ御徳海軍炭山水害ニ對シテハ急速ニ復舊工事を行フト同時ニ今後ノ水害ニ對シテモ或程度マテ豫防工事を加ヘ以テ出炭ノ安全ヲ計ルコト
- 二、前項ノ諸工事を請負人ヲシテ一切設備セシムルコト
- 三、從來ノ御徳炭山採掘請負人タル千早正次郎ハ宿痾重體ニ陥リ到底今後其ノ事業ニ堪ヘ

サルモノト認メ本人ノ請願ヲ許容シ保證人堀三太郎ヲシテ其ノ事業ヲ繼承セシムルコト
 四、前諸項ニヨリ水害ノ復舊竝ニ豫防工事ヲ其ノ採炭事業ト共ニ一切堀三太郎ヲシテ經營
 セシムヘキニ就テハ水害復舊後ノ出炭ニ對シ若松ニ於ル一噸ノ切込炭納炭價格ヲ金四圓
 ト値上ス而テ此ノ價格ハ前記水害復舊費豫防工事費及ヒ騰貴セル今日ノ勞銀諸物價等ヲ
 參酌シテ定メタルモノナリ

五、出炭ハ今日ノ場合最急速ヲ要スルヲ以テ請負人ハ極力其ノ復舊事業ヲ速ニ完成スルコ
 トヲ努ムヘキモノトス而テ本年十二月ヲ期シ約七千噸以上ノ出炭ヲナシ以後漸次出炭ヲ
 増シ三十九年四月マテニ水害以前ノ程度ニ復舊セシムヘシ

六、第四項ノ納炭價格ハ凡三ヶ年間据置ノ見込ナルモ年度契約ニ際シテハ物價竝ニ勞銀等
 ヲ斟酌シテ成ルヘク低減セシムルノ方針トス

同年八月二十日、海軍艦政本部長ハ此ノ決議ノ要領ヲ具シ、且目下ノ狀況ニ於テハ、各地共炭價
 日ニ昂騰シ、殆ト底止スル所ナキノ有様ニ立至リ、一方ニ於テハ、今日ノ事局ニ際シ、運送船用
 竝ニ工業用石炭ノ費額、頗ル巨額ニ上リツ、アルヲ以テ、此ノ際御德炭山ノ復舊ヲ圖ラシコト
 ハ、實ニ刻下ノ急務ナルヲ意ヒ、海軍大臣ノ決裁ヲ經テ、曩ニ採掘請負人千早正次郎ニ下附シタ
 ル採掘命令書ヲ更改シ、採掘請負價格ヲ値上シ、新ニ之ヲ請負人堀三太郎ニ下附シ、速ニ復舊事
 業ニ著手セシムルコト、爲セリ、

是ニ於テ請負人堀三太郎ハ、地表ノ陷落シタル部分ニ埋立ヲ爲シ、疏水溝ノ破損シタルモノヲ

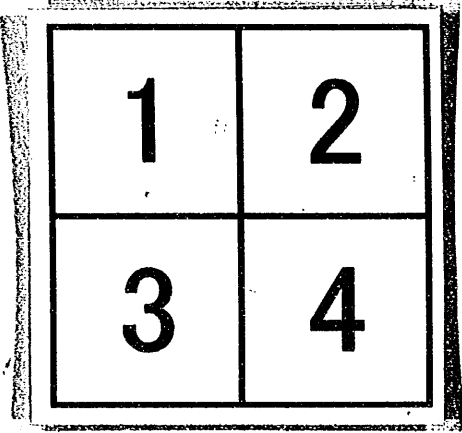
修補シ、崩壞シタル諸建設物ヲ修繕シ、新ニ大力量ヲ有スル揚水唧筒ヲ購入シテ、八月下旬ヨリ坑内ノ揚水ニ著手シ、九月中旬ニ至リテ、豫テ補助坑ト爲シタル第四坑ノ舊採掘跡ヨリ、少量ノ採掘ヲ爲スニ至レリ、

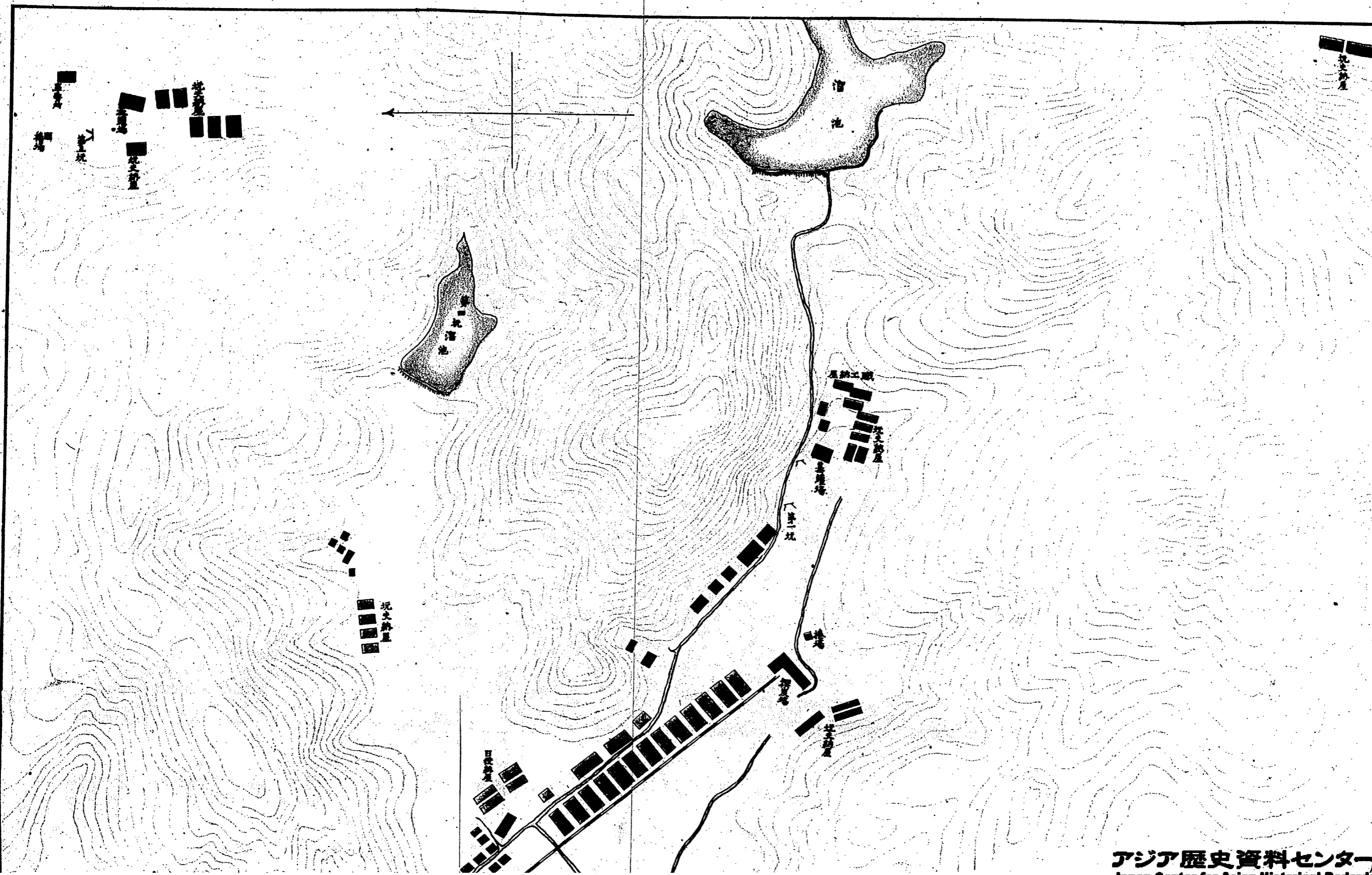
附言 同年十一月初旬ニハ其ノ他ノ諸坑ヨリモ採掘ヲ開始シ全坑ヲ通シテ一日約二百噸ノ出炭ヲ見ルニ至レリ

戰役中、御徳炭ノ運送法ハ、坑所ヨリ遠賀川ノ水便ヲ利用シテ、之ヲ若松港ニ送り、同港ヨリ和船積ニテ之ヲ需用ノ各軍港ニ送ルカ、又ハ一旦門司港ニ送りテ、同港ニ於テ我カ海軍所屬ノ運送船ニ積込ミ、以テ配給スルヲ例ト爲セリ、

御徳炭坑地表設備ノ戰役前後ニ於ル變化ハ第八圖ニ示スカ如ク、戰役中採掘シタル坑内ノ狀況ハ第九圖ニ示スカ如ク、而テ採掘シタル炭量ハ別表ニ示スカ如シ、

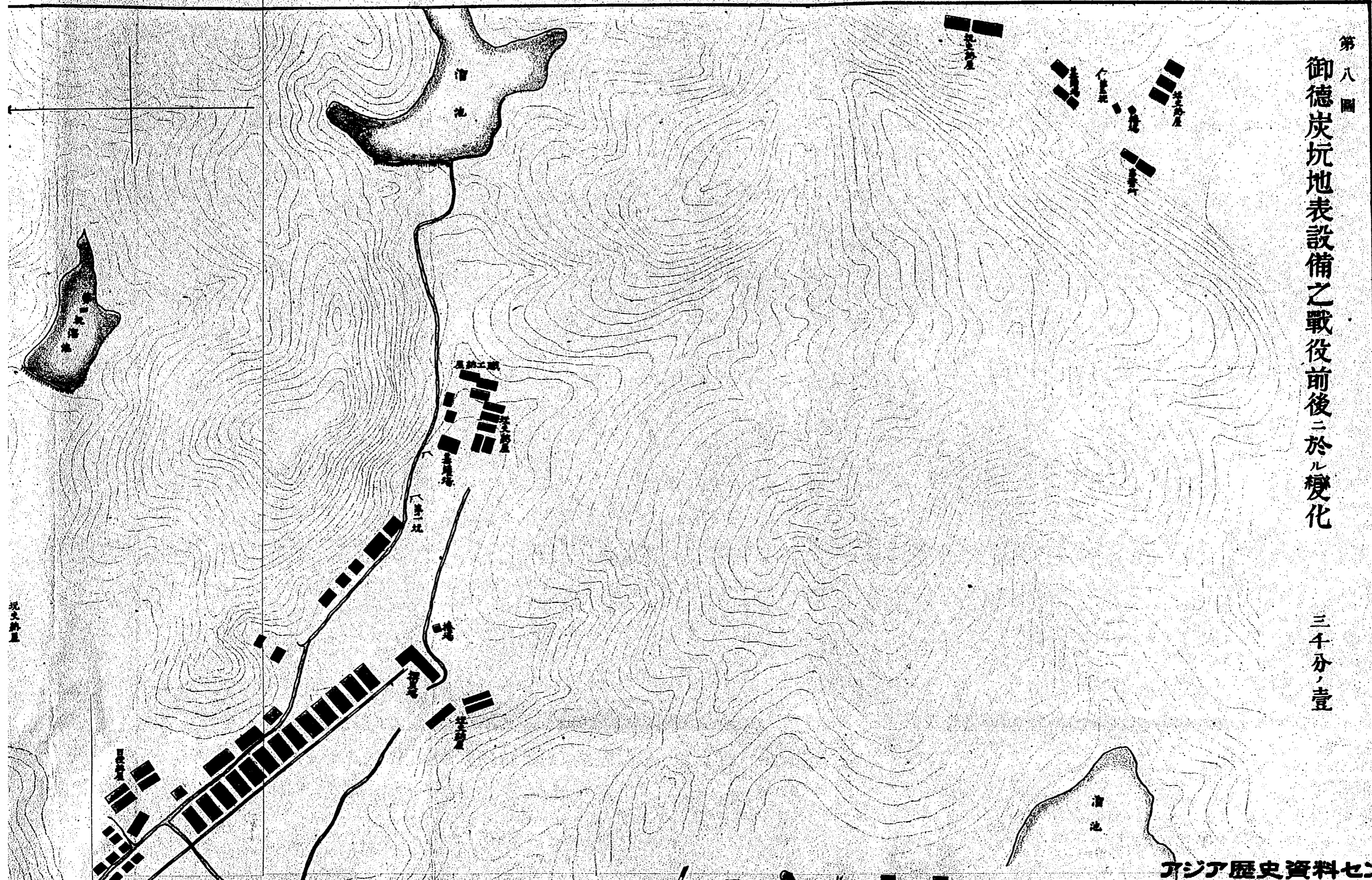
分割撮影ターゲット

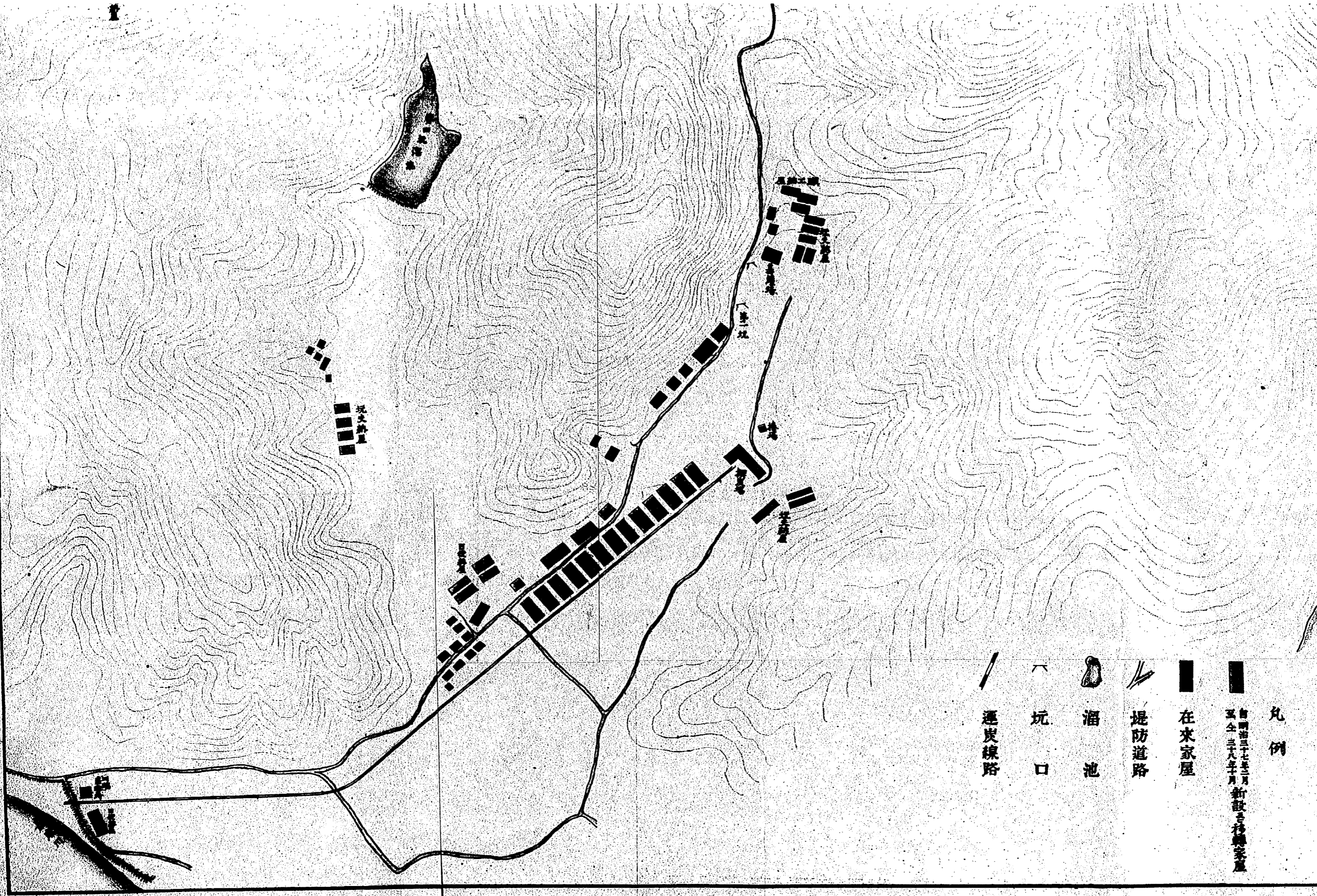
分割した 部分の 撮影順序	 <p>The diagram shows a square divided into four smaller squares by a horizontal and a vertical line. The top-left square is labeled '1', the top-right is '2', the bottom-left is '3', and the bottom-right is '4'. The entire 2x2 grid is enclosed within a slightly larger, textured rectangular border.</p>
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	



御徳炭坑地表設備之戰役前後ニ於ル變化

三千分ノ壹

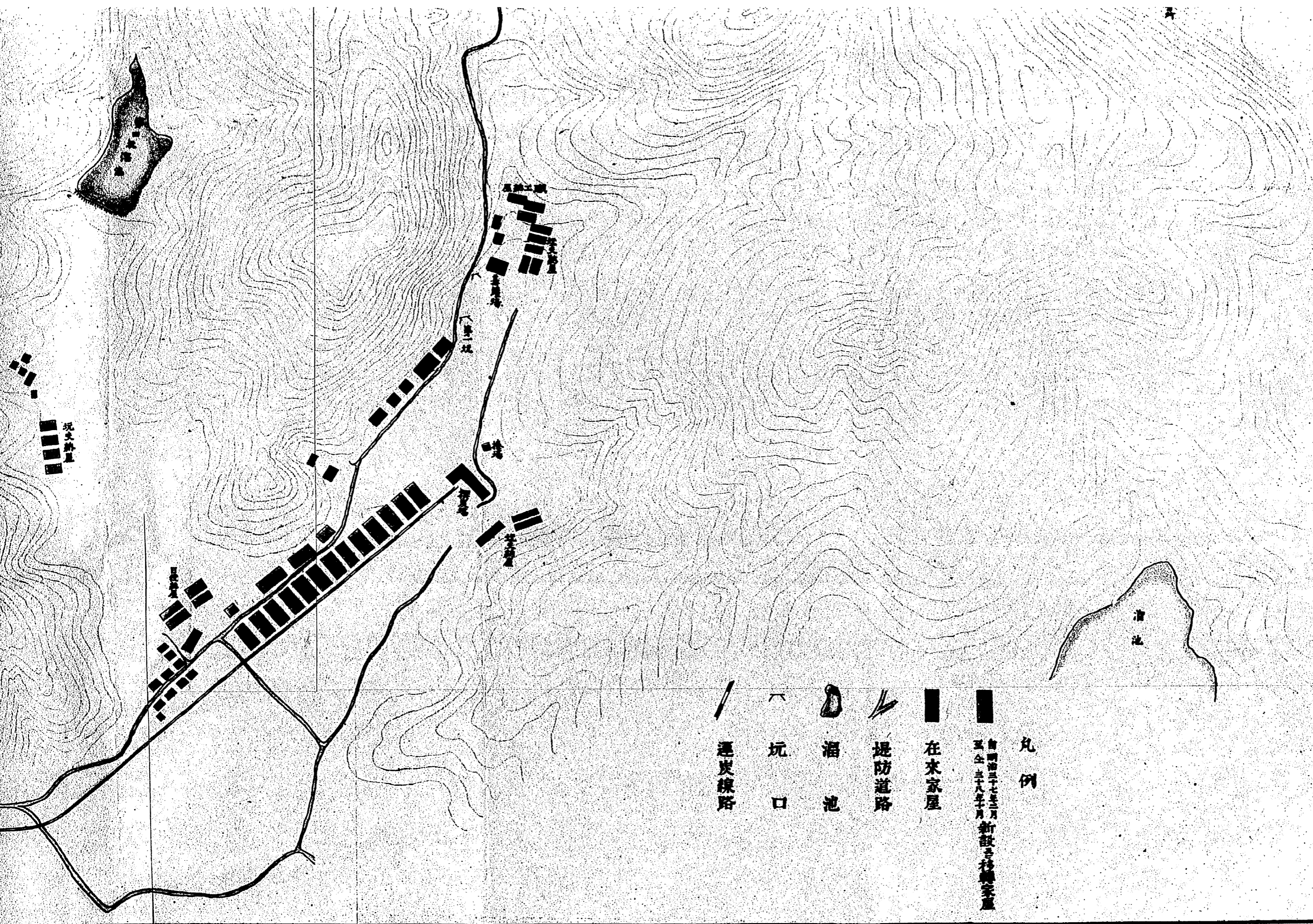




凡例
 自明治三十七年三月
 至三十八年三月 新設移轉家屋

心表設備之戰役前後ニ於ル變化

三千分ノ壹



凡例

自明治三十七年三月至三十九年十月 新設ニ移轉家屋

在來家屋

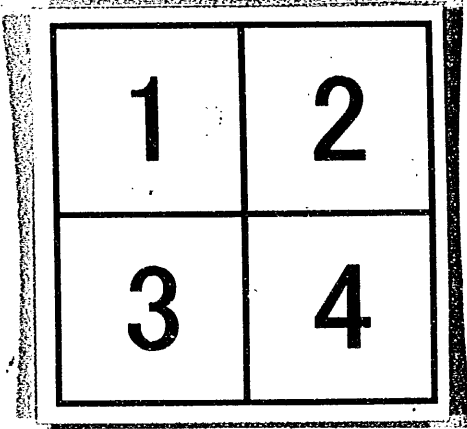
堤防道路

溜池

坑口

運炭線路

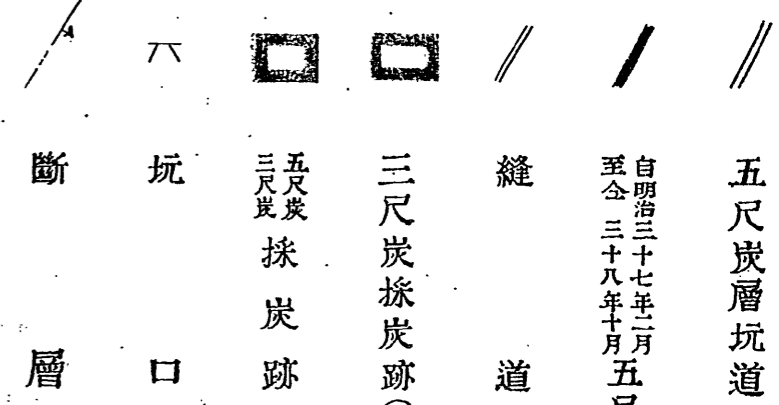
分割撮影ターゲット

分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	



第五坑

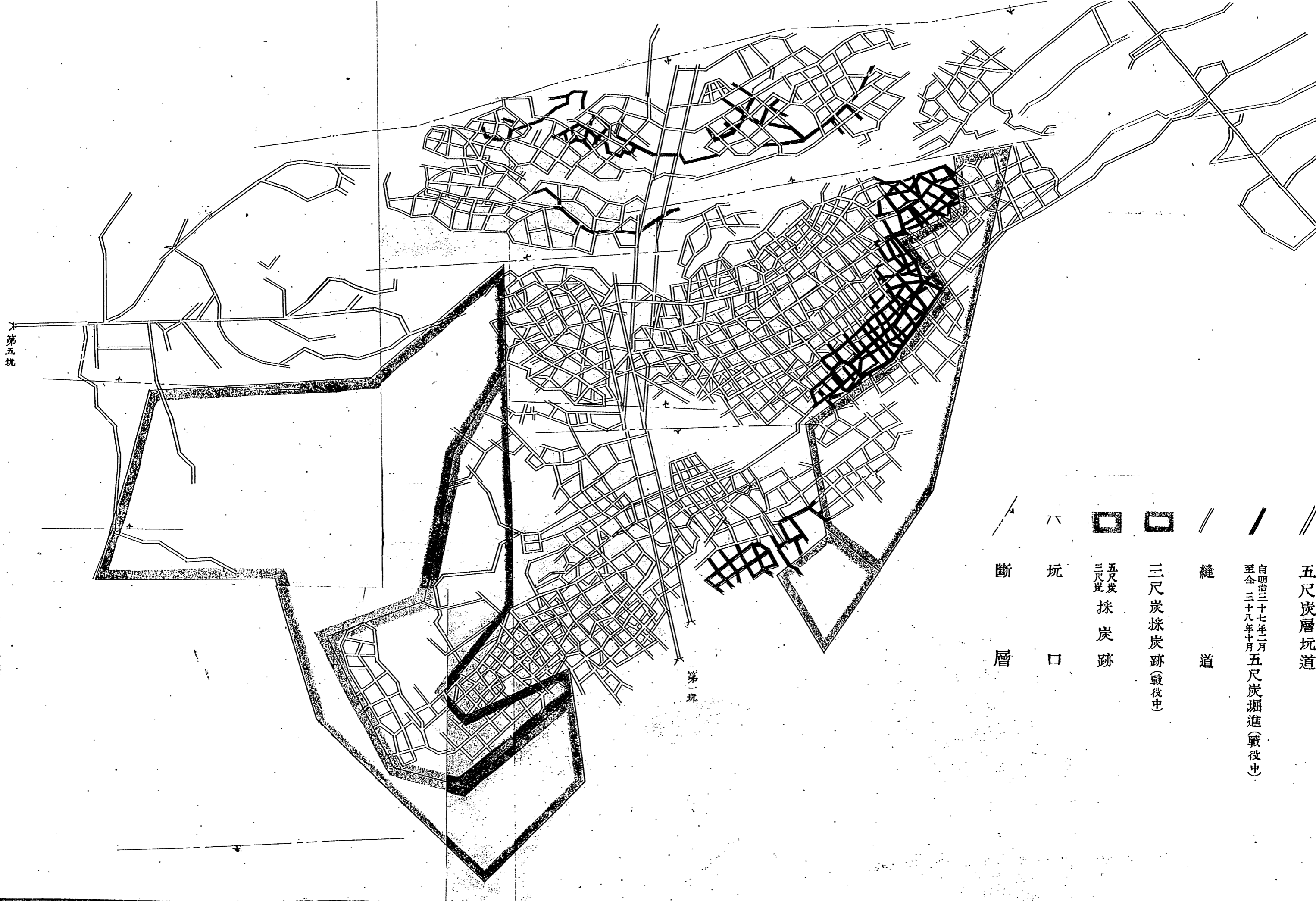
第二



三十七八年戰役中ニ於ル御徳炭山坑内之狀況 三千分之壹



- 凡例
- 〃 三尺炭層坑道
 - 〃 自明治三十七年二月三日起至三十八年十月三尺
 - 〃 五尺炭層坑道
 - 〃 自明治三十七年二月五尺至三十八年十月五尺
 - 〃 縫道
 - 三尺炭採炭跡
 - 五尺炭採炭跡
 - △ 坑口
 - ▲ 斷層



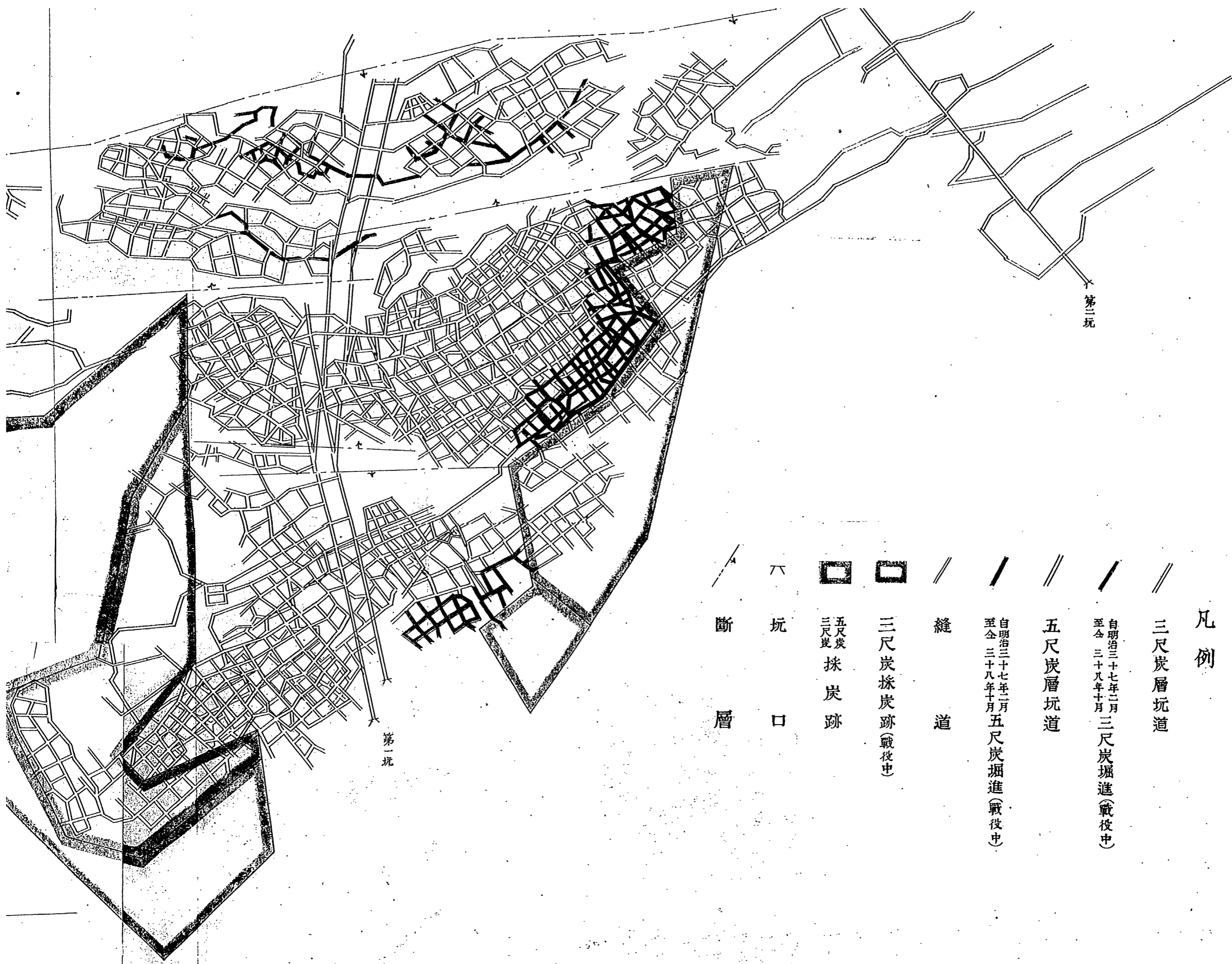
第五坑

第一坑










- 五尺炭層坑道
- 三尺炭採炭跡(戦役中)
- 三尺炭採炭跡
- 縫道
- 坑口
- 斷層

自明治三十七年二月
至今三十八年十月
五尺炭掘進(戦役中)

一八年戰役中ニ於ル御徳炭山坑内之狀況 三千分之壹



凡例

- 
 三尺炭層坑道
- 
 自明治三十七年二月
至今三十八年十月 三尺炭掘進(戰役中)
- 
 五尺炭層坑道
- 
 自明治三十七年二月
至今三十八年十月 五尺炭掘進(戰役中)
- 
 縫道
- 
 三尺炭採炭跡(戰役中)
- 
 五尺炭採炭跡
三尺炭採炭跡
- 
 坑口
- 
 斷層

三十七八年戰役中御德出炭配附表

炭種	切 込 炭										雜 用 炭					合 計
	配炭先 年 月	佐海廠庫 世軍需 保工品	吳工品 海廠庫 軍需	吳工計 海廠部 軍會	橫海廠庫 須軍需 賀工品	橫 經 須 理 賀 部	舞軍會 鶴工計 海廠部	舞軍需 鶴工品 海廠庫	臨炭所 時製 煉造	計	吳工品 海廠庫 軍需	吳工計 海廠部 軍會	吳工計 海廠部 軍會	橫海廠庫 須軍需 賀工品	計	
37—2	3200000	0	—	2800000	—	—	—	1200000	—	7200000	—	—	2700000	—	9900000	
3	1200000	0	—	3000000	—	—	—	1200000	—	5400000	—	—	3000000	400000	8800000	
4	7200000	3100000	—	—	—	—	—	1200000	—	11500000	2500000	—	—	2500000	14000000	
5	11800000	1600000	—	—	—	—	—	—	—	13400000	2500000	—	—	2500000	15900000	
6	4720000	—	—	1370000	1700000	400000	800000	—	—	8990000	—	2500000	—	2500000	11490000	
7	3600000	1400000	—	—	—	—	—	—	—	5000000	—	622160	—	622160	5622160	
8	—	890820	—	—	—	—	1200000	—	—	2090820	—	—	—	—	2090820	
9	2000000	—	—	—	—	—	—	—	—	2000000	—	—	—	—	2000000	
10	5880000	4410000	—	—	800000	400000	1100000	—	—	12590000	—	1760280	—	1760280	14350280	
11	2570000	—	—	—	—	—	—	—	—	2570000	—	1500000	—	1500000	4070000	
12	5535000	1769180	637440	2600000	—	—	1600000	—	—	12141620	—	1500000	—	1500000	13641620	
38—1	7766000	1150000	2575140	1000000	—	—	628000	—	—	13119140	—	1500000	—	1500000	14619140	
2	4098000	3725000	1641000	4310000	—	—	3129000	—	—	16903000	—	1500000	—	1500000	18403000	
3	4831000	1955000	1646420	720000	—	—	1543000	200000	—	12395420	—	1500000	—	1500000	13895420	
4	2081000	—	5358680	—	—	—	—	—	—	7439680	—	1403220	—	1403220	8842900	
5	9313000	8859000	—	—	—	—	—	219000	—	18391000	—	2730000	—	2730000	21121000	
6	5960000	371700	1568000	—	—	—	1000000	498300	—	9398000	—	568000	—	568000	9966000	
7	11820000	314000	495000	—	—	—	—	348840	—	12977840	—	2126000	—	2126000	15103840	
8	—	356520	306075	—	—	—	—	3107400	—	3769995	—	266220	—	266220	4036215	
9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
合 計	93574000	29901220	14227755	15800000	2500000	3500000	13400000	4373540	177276515	5000000	19475880	5700000	400000	30575880	207852395	